
LURIA 第2部 ～翡翠の鳥は飛び方を知らなくて～

紗妃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

LURIA第2部　　翡翠の鳥は飛び方を知らなくて

【Nコード】

N1621B

【作者名】

紗妃

【あらすじ】

「LURIA（翡翠の瞳空の蒼）」から三年。魔法遣い養成学校の応用過程に進んだりオ、ルー、アルフの前に、突如立ちはだかる真実の壁。現実の厳しさを突き付けられ、はたして彼等の友情は…？

プロローグ & 第1章 穏やかな日々（前書き）

「LURIA く翡翠の瞳 空の蒼く」続編です。

興味を持って下さった方は、是非是非、前作もご覧になって下さい。

リオ、ルー、アルフの三人を好きになって頂けたら、これに勝る喜びはありません。

プロローグ & 第1章 穏やかな日々

この世は、三つの世界によって形創られる。

混沌から全ての生を生み出した創造主『神』と、その下僕達の世界『天界』。

創造主によって創り出された儚い命に縋り付く人間達の世界『人間界』。

そして、もう一つ。

『人間界』が創られる遙か昔、同じように創造主の指先が生み出した世界があった。

それは、人間界の裏側に位置しながら、忘れ去られた世界。

神の加護から離れ、人知れず、ひっそりと存在する世界。

神の力の微かな残り香『夢幻』を司ることを認められた、御伽の者の息衝く世界。

そこに住む人々は、己が世界を『夢幻界』、あるいは『ルリア』と呼ぶ。

◆◆◆ プロローグ ◆◆◆

うつそうと茂る森の深淵部は、深い闇に包まれていた。

それは、迷い込んだ光を捉え、引きずり込み、二度と再び眩い世界へは戻さぬと謂わんばかりの色濃い悪意に満ちてすらいた。

そして、その更に奥深く……。

一条の光すら差し込まぬ暗闇の中では、闇が尚暗く凝り固まり、暗黒の影となってゆらゆらと揺れていた。それは、始めのうちは小さく、輪郭の定まらない、ぼんやりとした影でしかなかったが、影は影を重ね、吸い込み、徐々に凝り固まり、ついには光をも呑み込む真の暗黒となった。

やがて輪郭を持ったそれは、まるで命を得たかのようにざわざわ
と這いずり出した。

ズル、……ズルズル。シュー……。

腸を引き摺るような嫌な音が低く森の中に響く。

闇が這った後の草原は、まるで焼け爛れたように、そこだけ悲惨
な姿を曝した。草木の小さな命までも喰らい尽くしながら、闇は少
しずつ自らの大きさを増していった。

闇の進行方向に、一本の椎の木があった。大枝を四方に伸ばし、
瑞々しい葉を茂らせる雄々しい大木だ。その幹は太く、大人二人が
両腕を広げて取り囲んでも余りあるほどだ。

地を這う闇は、その大木の前で躊躇うように歩速を緩めたが、そ
れはほんの一瞬のこと。次の瞬間には、これまでの倍の速度で椎の
木に襲い掛かった。ズルズルと幹を這い登り、幹をつたう。闇が這
った後は樹皮が捲れ、爛れた幹からはプスプスとガスが噴き出した。
それはまるで、椎の木の声にならない悲鳴のようだった。

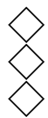
大木の小枝までを存分に嘗め尽した闇は、枝の先から地面へと戻
り、更に森の奥へ奥へと這い進んでいった。その痕は焼け焦げ、爛
れ、撒き散らされた黒い毒が大地に染み込み、じわじわと広がって
いった。

闇が去った後も、椎の木は暫し巨体を維持していたが、それも束
の間、細い枝から次々と枯れ落ち、遂には根元から横倒しに倒れた。



第1章

穏やかな日々



リオ、ルー、アルフの三人が魔法使い養成学校に入学し、早いも

ので丸三年の歳月が過ぎ去った。

今、彼等は揃って養成学校の応用過程へと進級しており、応用過程履修者の証として、学校側から褐色の杖を与えられていた。それは証明書であると共に、飛行にも使用できる優れもの。養成学校では、授業以外の場での魔法使用は原則禁止とされているのだが、その杖を持っている場合に限り飛行通学が許可されるのだ。

リオ達が住んでいる森の奥の丸太の家から学校までの所要時間は、彼等の脚で一時間ほど。森を横切る道は四季折々に自然が美しく飾りたててくれるので、三人とも、その時間を決して長いと感じたことはないのだが、こと朝の通学に関しては、杖の恩恵を素直に認めざるを得ない。なんせ、大きな眼鏡をかけた朝寝坊の常習犯がいるものだから……。

小春日和の暖かな風を頬に感じるのは心地良い。三人揃って、今日も空からの通学だ。

歩き方や話し方に特徴が現われるように、空の飛び方にも個性が出るらしい。ルーは両脚で杖に跨り、脚を前に放り出す。リオは横向きに腰掛ける。そして、常に最後尾を飛ぶアルフは、胸の前で腕を組み、両脚で杖の上に仁王立ち。それが一番楽な姿勢なのだろうか。三人の奇妙な編隊は、あっという間に養成学校の生徒達の間で噂となった。入学時は三百人ほどもいる生徒が、一年後にはその半数以下に、更に一年後にはその半数へと数を減らしていき、応用過程まで進んで杖を与えられる生徒は、一年間に数人程度なのだから、それも止むなしと言うべきか。

校門から少し離れた場所にふわりと降り立った三人は、周囲の視線を気にもせず、いつものように並んで歩きながら、おしゃべりに夢中だ。年がら年中一緒にいるのに、話題の種が尽きないのは、彼等自身不思議だった。

「一時限目のルリア史の授業、休講だってさあ」

のんびりとした口調でルーが言う。三年の間に、そばかすは薄くなり身長も伸びたが、ずり落ちそうなくらい大きな丸眼鏡と、少し間延びした話し方は相変わらずだ。

「チェッ。折角早起きしたのにな」

隣を歩いていたアルフが、無然として言う。さっぱりと短く、しかし前髪だけは長めの艶やかな黒髪はかつてと変わらないが、前髪の奥で煌めく漆黒の瞳は以前より鋭さを増していた。けれど、この世界で少なくともリオとルーの二人だけは知っている。その瞳が、どれほど温かく優しい微笑みを孕むのかを。

アルフは、魔法で小さくした杖を腰紐の後ろに差込み、空いた両手を頭の後ろで組みながら、隣を歩く、頭一つ分身長の低い少年二人を見下ろした。

「なあ。この後どうする？」

「実技の授業まで、時間、空いちやうよねえ」ルーが合いの手を入れた。

二人の間でカリキュラム表を見ていたリオが、紙面の一点を指差した。

「丁度今から占星術の授業があるね。僕等の履修単位の先生とは別の先生の講義だけど、聴いてみる？」

飛び切り上等の宝石のような深い碧の瞳が、ルーとアルフを交互に見遣る。吹き抜ける微風が、柔らかな金色の髪を揺らしながら通り過ぎていった。左肩の上で一つにまとめられている絹糸のような髪が、解れてサラサラと頬に掛かる。透き通る肌にはホクロ一つなく、唇は薄く紅を指したようだ。新入生の殆どが、彼を女性だと勘違いしてしまうのも無理からぬこと。けれど、淡い恋心など抱き、あろうことか交際の申し込みなど企てようものならば、どこからか聞きつけたアルフに手酷く罵られる。そうして、初恋を無惨にも引き千切られ、踏み躪られ、恋愛恐怖症となった若者は、両手の指で二往復しても足りないくらいだ。

友人達はそれを、新入生が通過しなければならぬ洗礼として温

かく見守ることに決めている。つまりは傍観し、楽しんでいうわけだが、彼等いわく、敢えて火の粉を被るようなマネをしないことも、魔法使いとしての重要な要素なのだそうだ。

「うん、賛成！」

ルーは諸手を上げて同意の意を示した。随分と大人びてはきたものの、そんな仕草が彼には良く似合う。

一方アルフは、空を見上げながら少し困惑の態で眉根を寄せた。

「どうしたの、アル？」

ルーが問い掛ける。

アルフは暫し首を傾げていたが、やがてボソボソと言った。

「あのさ……」

「なあに？」

「占星術と魔法って、どういう関係があるんだ？」

「アル、ひょっとして今まで知らなかったの？」

大袈裟に驚いたのは、今回もルーだ。

アルフは決まり悪そうに頭を掻いた。

「なんだよ、お前は知ってんのか？」

「ううん。知らない」

アルフは思わず立ち止まった。つられるように、他の二人の脚も止まる。

一瞬の沈黙の後、呆れ返ったような表情でアルフが訊いた。

「だって、お前、占星術の授業、いつも喜んで受けてるだろ？」

「うん。だって、星って綺麗でしょ？ だから大好き！」

「……それだけか？」

「うん」

コクリと力強い頷きが返ってきた。

アルフは頭を抱えた。

「それは、占星術とは違うだろう」

溜息と共に呟くが、ルーには、それがどういう意味かわかっていないようだ。きょとんとしている。

そんな二人を助けるべく、一番のタイミングでリオが口を開く。
二人の話をまとめるのは何時だってリオの役目なのだ。

「ルーは無意識のうちに森の力の流れを感じ取ってしまうからね、
占星術は余り必要ないのかもしれないね」

「どういふことだよ、リオ」

アルフの問いに、リオは飛びきりの笑みを返した。

「占星術の目的のことだよ。天の動きと大地の力の流れには密接な
関係があるんだ。僕達の力の源である夢幻は、言わば、この世界に
微かに残る神の力の残り香みたいなものだから、それを上手く引き
出すには、その流れを的確に読み解くことが大切なんだ。占星術は、
そのために有効な手段の一つなんだよ」

「ふーん」

二人は揃って感心の態で頷いた。

「ねえ」ルーが身を乗り出した。「リオは、どうしてそんなこと知
ってるの？」

「どうしてって……」リオは少し困惑し、小首を傾げた。「占星術
の一番最初の授業の時、先生がそう説明してくださったよ」

「あれ、そうだったっけ？」

ルーはアルフを見上げたが、当のアルフは気まずげにそっぽを向
いている。

「でも、さあ」

「要するに、魔法が遣えればいいわけで……」

二人は大きく頷きあった。こんな時、彼等の息は驚くほどにピタ
リと合うらしい。

リオは小さく溜息を吐いた。

「……とりあえず、授業、聴いてみる？」

その問いに、二人は揃って大きく頷いた。

プロローグ & 第1章 穏やかな日々（後書き）

次回予告…アルフが拗ねる心配事とは……？

「翡翠の鳥は飛び方を知らなくて」は、原則として週一回更新します。

宜しくお願いします！！

第1章 穏やかな日々 No. 2 (前書き)

「翡翠の鳥は飛び方を知らなくて」は、「LURIA」の翡翠の瞳
空の蒼」の続編です。

第1章 穏やかな日々 No. 2

◆◆◆ 第1章 穏やかな日々 ◆◆◆ No. 2

すれ違う友人達と挨拶を交わしつつ、足早に目的の教室へと向っていた三人だったが、途中で突然、リオの脚が止まった。

「いけない！ 校長先生に、お手伝い頼まれてたんだ！」

「なんだ。またかよ……」

リオの背中にぶつかりそうになりながら、なんとか踏みとどまったアルフは、不機嫌そうに言った。

それも仕方のないことだ。

またか、というアルフの言葉どおり、応用過程に進んで以来、生徒達は彼等を、まるで助手のように頼りにしはじめたのだ。初めのうちは遠慮がちだった先生も、最近では我先の態。三人のうち、必ず誰かは仕事を頼まれていたような状況だ。

それ自体は我慢の範囲だが、そのために授業を休まなければならなくなると、さすがに困る。自分達が生徒なのだということを、きちんと認識してくれと、時々アルフは愚痴ってみたりする。

リオは視線だけをアルフに向け、少しキマリ悪そうに微笑んだ。

「うん。何となく、成り行きでね」

「成り行きとかって、もう、そういうレベルじゃないだろう。先生の手伝いに、授業に追いつけない奴等の補習の講師。そうかと思えば、最近は悩み事相談まで始めたらしいじゃないか。いい加減にしとけよ。駄、もたないぞ」

アルフがこんなふうに不機嫌になるのは、いつだってリオやルーを心配してくれているから。そして、普段無口な彼が無愛想に口にする言葉は、二人への深い労わりに満ちている。よくわかっていた。いつだって感謝していた。

リオは後手に腕を組み、少し腰を曲げて、じっと正面に向けられたアルフの顔を横から覗き込んだ。感謝の想いが微笑みとなる。

「うん、ありがとう。ごめんね、何時も心配ばかり掛けて」

「別に……」

アルフはぷいと横を向き、屈み込むと、足許の石ころを一つ取り上げた。

「別に、心配なんかしてないさ。俺はただ、あんまりあいつ等を甘やかすなって言ってるんだ。授業の補習までいいよ。俺だって手伝ってやれる。けどな、前にも言ったけど、悩み事の相談については、俺は賛成できない。大体、悩み事なんてのは自分で解決しなきゃ何にもならないもんだろう？ お前がどう助言してやったって、それは所詮、お前の考でしかないんだ。あいつ等がお前と同じように行動できるわけないんだから、助言なんかしたって無駄なんだよ」

憤懣を吐き出すように一気にそう言いきると、アルフは掌の中で転がしていた石ころを空に向かって投げ上げた。石は見えなくなるまで高く飛び、硝子の粉を撒き散らすような涼し気な音を立てながら宙に四散した。

「ねえ、アル、それは違うよ」ルーが、まるでからかうように言った。「リオは助言なんてしてないもの。みんな、リオに話を聞いてもらうだけで、ホッとして帰っていくんだよ。リオには、ただ傍にいただけで、人の気持ちを癒す力があるんだから」

「そんなの、俺だってわかってる！ でもな、助言していろいろがいが、奴等がリオに相談事を持ち込んでくるたび、リオが癒しの力を使わなきゃならないのは事実だろう。俺達の力は、つまりは精神力だ。無尽蔵に使えるもんじゃない。減り過ぎれば体調にも影響して、病気にだってなっちまう。あんな奴等のためにリオが病気にでもなったら、お前、それでも今と同じように笑ってられるのかよ！」

「えー、そんなのヤダよ！」答えるルー。

「そうだろ？」アルフは眉根を寄せ、言葉を継いだ。

「それより、俺が一番心配してるのは『邪気』の問題なんだよ。奴等の悩みを聞いてやるってことは、聞き手であるリオが、少なからず奴等の邪気を被るってことなんだぞ。だから奴等は、まるで憑き物でも落ちたみたいなの顔して帰っていくんだ。幸い、今の所は直ぐに浄化されちまってるみたいだけど、ああいうのは疲れとかに便乗して溜まってくもんなんだ。気を付けるに越したことないんだよ」

ぶっきらぼうだが労わりに満ちた言葉を、リオは嬉しそうに聞いていた。その様子に気付いたアルフの頬が朱に染まる。彼は照れ臭さを隠そうとしてか乱暴に言った。

「なに笑ってんだよ、リオ。大体、お前が色んなこと引き受けてくるせいで、俺やルーにまでお鉢が回って来るんだぞ。来週だって、お前が忙しいからって、俺が先生の手伝いをしなきゃならなくなっただじゃないか。もう、いい加減にしてくれよな」

「そんな意地悪言っちゃって。リオの替わりならって、アル、自分から引き受けたくせに」

「ルー！」

アルフは踵を返すなり、ルーに飛び掛った。しかし、逃げ足だけは早いルーは、その腕の下をすり抜け、悪戯っぽく舌を出しながらリオの首筋に背後から腕を絡めた。

「ボクは全然平気だよ、リオ。毎日、楽しいしねえ」

「なんだよ。俺ばかり悪者かよ」

不平を呟くアルフの口許には、しかし、もう笑みが浮かんでいた。そんな二人を交互に見遣りつつ、リオは少し申し訳なさそうに言った。

「有難う、アル、ルー。ごめんね。僕の我が儘で、君達には何時も迷惑掛けてばっかりで。これからは、君達にあんまり負担掛けないように気を付けるからね」

「リオ！」突然、アルフが声を強めた。「何度も同じこと言わせるなよ。俺達は一度だって迷惑だなんて思ったことないぞ」

「そうだよお、リオ」

声をそろえる二人。

リオは少しだけ圧倒され、一步後退ったが、その両肩をルーが背後から優しく押した。自然、アルフと正対する形になる。漆黒の瞳が正面にあった。

「なあ、リオ。俺が言ってるのはさ、……心配してるのは、迷惑とか負担とか、そんなことじゃないんだ。前にも言っただろう？ お前にはわからないかもしれないけど、友達面して近づいてきたって、あいつ等の心の中は、あわよくばお前を蹴落としてやろうっていう野心で一杯なんだぜ。俺は、そんな奴等の言動で、お前が傷付くことが心配なんだよ。お前が優しいのはわかってる。でもな、その優しさを、少しだけでいいから、お前自身に向けてやってくれよ。もう少し、自分を大事にしてくれよ。そしたら、俺は安心できるんだから」

「アル、僕は、そんな……」

けれど、それ以上は言葉にならなかった。笑おうとしているのに、それが不自然に歪んでしまう。自分のことを氣遣ってくれるアルフとルーの想いに胸が詰まりそうだった。

ルーが優しく、リオを背後から抱き締める。その腕にそっと触れ、リオは穏やかな気持ちそのままの視線をアルフへ向けた。

途端、アルフの表情がフツと和らぐ。彼の表情の変化を認めたルーは、リオの肩口から顔を出して言った。

「人の心がわかるって、大変なんだねえ」心底アルフに同情しているように顔を曇らせている。

アルフは一つ大きな溜息を吐くと、ボソボソと呟いた。

「俺にわかるのは邪心だけさ。まったく、お前等と一緒にいるとき意外、苛々させられっぱなしだぜ」次いで腕を伸ばし、リオの柔らかな髪をくしゅくしゅと掻き回す。「早くいけ。さっさと済まして、早く帰ってこい」

「うん」

リオは大きく頷くと、胸の前で指を組み、そのまま空を見上げた。

瞬間、躰がふわりと浮き上がり、たちまち見上げるほどの高さになる。

「じゃあね、アル、ルー」

クルリと空中で一回転し、上を向いた時には、いつもどおり杖の上に腰掛けていた。

風のように飛び去っていくリオの後ろ姿を見送ってから、アルフとルーは肩を並べて教室へ向かい歩き出した。

途中、何事かを思い出したように、ルーがクルリとアルフを振り返った。後手に腕を組み、ニツコリと笑う。

「そういえばさあ、ハシユバルムのところ、無事に産まれたんだってさ。聞いた？」

「へえ、良かったじゃん」

答えるアルフも、友人の幸せを素直に喜び、小さく笑った。

種族も年齢も様々な養成学校にあっては、家族のことは普通に話題の中心となるのだ。

「あいつ、柄にもなく、結構心配してたし。これでやっと勉強に集中できるってわけだ」

「それがね、そうでもないらしいんだよお」

「なんで？」

「奥さんは、アジュに女の子になってほしいんだって。でも、ハシユバは男の子にしたいって」

「ふーん。そりゃ大変だ」

口許をへの字に曲げ、アルフは肩を窄めた。

ルリアでは、生後二年以内の子供をアジュと呼ぶ。それは、二歳以下の子供を指す言葉であると同時に、男性でも女性でもない躰のことをも言い表す言葉だ。二歳までの子供はアジュ、……つまり、両性皆無態なのだ。

性を有さない天使に、外見上似ているということから、そう呼ばれるようになったらしい。真偽のほどは定かではないが。

アジュは成長に従い、自身で性別に対する自覚を持つようになり、その意識に従って性が確定する。だから、たいていの場合、生後二年間、赤ん坊には名前をつけず、そのまま『アジュ』と呼ぶ。どちらの性別になるのか、両親にもわからないからだ。

しかし、だからこそ子供を授かったばかりの両親は試行錯誤の連続なのだそう。男に育てたければ男らしさに目覚めるように、極力、木登りや虫取りをさせ、女に育てたければヒラヒラの洋服を着せてみたりする。ハシユバルム家のように、両親の意見が対立してしまった場合、それぞれの親の心労たるや大変なものらしい。

そんなことをしても意味がない、性の認識は産まれる以前にその八十パーセントが決定しているものだ、という学説もあるようだが、宝物のような我が子の行く末を案じぬ親はいないということだ。

しばらくの間、きつとハシユバは勉強どころではないだろう。留年は決まったな。

アルフは独り、心の中でそう思った。

「でも、こればかりは本人の問題だ。親がどう騒ごうと、なるようにしかならないってのにさ。まったく、ご苦労なことだな」

「急ごう、アル。講義の時間に遅れちゃう！」

そう言って駆け出すルー。

話題を振った当人のくせに、興味がなくなると、すぐにこれだ。少し不満気な溜息を漏らしつつ、小柄な背中に付いてアルフが走り出す。

暖かな春の陽射しが照らす木立の中に、始業の鐘が高らかに鳴り響いた。

第1章 穏やかな日々 No. 2 (後書き)

次回予告…リオの様子が少し変……？

「翡翠の鳥は飛び方を知らなくて」は、原則として週一回更新します。

宜しくお願いします！！

第2章 予感（前書き）

「翡翠の鳥は飛び方を知らなくて」は「LURIA」
「空の蒼」の続編です。 翡翠の瞳

第2章 予感

◇◇◇ 第二章 予感 ◇◇◇

魔法使い養成学校では『学ぶことの大切さ』を重視しているため、単位取得に必要な最低履修時間が決められている。

学校は技を学ぶためだけの場所ではない。

そこに在学している期間に、技以外の様々なもの、例えば、社会生活での常識や、生涯を通して親交を深め得るであろう友人など、人として生きていくうえで欠くことの出来ない掛け替えのない『何か』を得てほしい。

それが、魔法使い養成学校創設者であり、現トップである校長先生の持論なのだ。

それ故、養成学校では実技以外にも様々な講座が用意されている。薬草学、音楽、占星術、癒術、歴史等々である。

『自分の中に眠る潜在能力を信じられる限り、その者は魔法使いになる可能性と権利がある』という、校長先生の基本理念に基づき、最長在学期間の設定されていない養成学校にあっては、本人が望めば、どんな講義も受講可能だ。

平均寿命が千年前後と長く、向学心旺盛なルリアの民にとって、これは願ったり叶ったり。

そんなわけで、興味のある授業には出来るだけ出席するという『目標』を、リオ達三人は他の生徒達に率先して実践していた。

特にルリア史（ルリアの歴史）は、リオの大好きな講義の一つだ。今日も、実技の講義を終えた三人は、続いてルリア史の講義を受けるべく、教室の一番後ろの席に腰掛け、先生の言葉に熱心に耳を傾けていた。

今日の主題は『滅びし種族と魔族』である。

教室の隅々まで響き渡る独特の声音で、エノラ先生の講義は進んでいく。

養成学校で講義中の女性の先生としては、エノラ先生は最年長だ。「そもそも魔族とは、天上界の聖天使セラフィムの反逆、そして墮落により、ルリアに創られた種族なのです。」

天上界にありし頃のセラフィムは、神の寵愛を一身に受ける神の腹心であり、神が生み出されたばかりの人間を監視し、その罪を神に訴えることを任務としていました。

しかし、やがてセラフィムの心に生まれた傲慢、つまり、神と等しくあろうとした傲慢ゆえに、天上界を追われ、その憎しみを種として、この地で魔族を生み出したのです。

さらにセラフィムは、自分を墮とした神への復讐として、魔族をして神が愛する人間達を邪心と疑念、そして愚劣へと墮落させていったのです」

教室中がしんと静まり返っている。

魔族はルリアで最も忌み嫌われる種族だ。

それは、ごく最近まで、ルリアの民の身近に有る恐怖として、確実に息衝いていた。

ある者は近親者を殺され、ある者は自らを傷付けられた経験を持つ。

そのことを思い出しか、はたまた、子供の頃に寝物語に聞かされた恐ろしい物語を思い出しか、皆、神妙な顔つきで先生の話を聴いている。

エノラ先生は、皆の感情を思い遣ってか、ふっくらした顔に暖かな笑みを浮かべた。

「しかし、皆さん、安心してください。

ルリアには、もう魔族は存在しません。

皆さんの多くはご存知ですね。

約十三年前、天上界からの討伐隊がルリアに潜む魔族を一掃してくださいました。

ですから、もう心配することはなにもないですよ。

講義のタイトルにもあるように、魔族は既に『滅びし種族』なのですからね」

皆が一様に安堵の表情を浮かべる。

先生は満足げに微笑むと、次の言葉を口に仕掛けた。

しかしそれは、後方の席から挙がった声によって遮られた。

「先生」

声と同時に、細い右腕が真っ直ぐに上がる。

エノラ先生は首を伸ばして声の主を確認した。

黒髪と栗毛に囲まれた柔らかな金色の髪。

ずば抜けて歳若い生徒達。養成学校の講師陣の中で、彼等の顔を知らぬものはいない。

エノラ先生はニツコリと微笑んだ。

「あら、リオね。こんにちは。何かしら？」

「一つ質問があるのですが、宜しいですか」

リオはその場でスッと立ち上がった。

物静かな物腰と丁寧な口調。

歳に似合わずしっかりしている彼を、エノラ先生は好ましく思っていた。

その想いが彼女の口調と表情とに現れる。

「まあ、珍しいわね。どうぞ」

リオは一つ深く息を吐くと、言った。

「魔族がこの地ルリアに誕生した時、神が彼等の存在自体を消し去ってしまわれなかったのは何故ですか？」

一瞬、教室中がシンと静まり返る。

リオの隣で、ルーはいつもどおりニコニコしていた。

アルフはといえば、その問いを耳にした瞬間、怪訝そうにリオを見上げたが、次いで、なにやら少し不機嫌そうにそっぽを向いて頬杖をついてしまった。

エノラ先生は困惑の態で眉根を寄せた。

「どういうことかしら？」

神は何度も魔族討伐にあたられましたよ」

しかしリオは首を横に振った。

「それは神ではなく、天上界の天使達による討伐ではありませんか？

僕が学んだ範囲の知識では、神が直接手を下されたことは一度もなかったと思います。

如何ですか？」

「そ、それは、……そうですね」

先生は戸惑いながら答えた。

「では、なぜ神は、御自ら魔族を滅ぼそうとなさらなかったのでしょうか」

「……どういう意味ですか？」

「この世の全てをお創りなられた神が、真に魔の存在を憎まれたのであれば、なぜセラフイムがご自身に対抗する存在になろうとしたその時、消してしまわれなかったのか。

なぜ、彼の者が魔族を生み出そうとする、その瞬間に、彼等を消してしまわれなかったのか。

神は、それをなさる充分なお力をお持ちのはずなのに。

僕は、それが不思議でなりません」

「それは……」

先生は暫し言い淀んだ挙げ句、やっと、言い訳するように言った。

「リオ、今は歴史の講義の時間です。

歴史は、過去に有った出来事を知ることがを目的としています。過去の特定の時の、誰の判断が正しかったか、あるいは誤りだったかを云々する場ではないのですよ」

論点は明らかに逸れていたが、教室にいる生徒の誰からも不満の声はあがらなかった。

その時、講義終了の鐘が高らかに鳴り響いた。

ノエラ先生がホッと安堵の溜息を漏らす。

「残念ですが、今日の講義はこれで終了です」

先生は教科書を閉じると、そそくさと教室を後にした。

頭のいい生徒は、時に困り者だわ。

足早に自分の研究室へと急ぎながら、先生はそう思った。

※

秋も深まり、吹き抜ける風も随分と肌寒く感じられる季節になったが、それでも今日のように天気の良い日は、陽の光がポカポカと温かく、外ですごすのは気持ちがいい。

校庭の隅、お気に入りのお木の陰に腰を下ろし、リオ、ルー、アルフの三人は、思いおもいの姿勢で寛いでいた。

リオは木の幹に背を預けて本を読み、アルフはリオの脚を枕代わりにして仰向けに、そしてルーは腹這いに寝転がり、アルフの腹をブックスタンド代わりに、こちらもまた本を読んでいる。

次の講義までは時間がある。

ここで少し時間を潰し、学生食堂で昼食を済ませるつもりでいた。読んでいた本から顔を上げたりオが、澄んだ空を見上げてボンやりしていると、頬杖をついたルーが待っていましたとばかり問い掛けてきた。

「ねえねえ、リオ。さっきのルリア史の講義、どうかしたの？」

「俺も思った。いつものお前らしくなかったぞ」

アルフは気持ちよさそうに眼を閉じ、草を噛みながら、組んだ上側の脚をブラブラさせつつ合の手を入れた。

「そう？」

リオは二人を交互に見遣った。

アルフは上目遣いにリオを見上げた。

「歴史なんて、事実を確認するだけのものだ。

その時々個人の感情なんて、先生にわかるわけがない」

「そうだね」

リオはコクリと頷いた。

「先生に悪いことしちゃったね。あとで誤りに行ってくるよ」

「そんなこと！」

リオの少し沈んだ表情に気付き、アルフが飛び起きる。

「俺は別に、そんな風に思ってたんじゃない……」

その勢いで本を跳ね飛ばされ、ルーは不満げに唇をへの字に曲げながらも、渋々起き上がった。

「ううん。本当に、そうだから」

リオは膝を折り、引き寄せると、自嘲気味に小さく微笑んだ。

「でもね、つい思ってしまったんだ。魔族の祖といわれるセラフィムは、神の寵愛を一身に受けていたほどの天使だったのだから、きっと正義感がとても強く、誠実で、神に対しても忠実だったはず。神が創られた人間達のことだって、きっと神以上に愛していたんじゃないのかな。」

なのに、そんな彼が、どうして最も敬愛していたはずの神を裏切らなければならなかったのか。

きっと何か理由があるはずなんだ。

だから……」

「そんなことを考えるの、もう止めろよ！」

アルフが声を荒げた。

隣で地面にぺたりと座っていたルーが驚いてアルフを凝視する。

「理由があつたら、どうだって言うんだ。」

理由さえあれば、人を殺しても許されるってのか？

そうじゃないだろう？

魔族は、所詮、魔族だよ。

この地に存在した最も忌むべき一族。

それだけのことさ。

そんな奴等のこと、お前が気に掛ける必要なんか無い。もうやめろよ」

「どうしたの、アルフ？ 君らしくないよ」

アルフを落ち着かせようと、リオは努めて明るく言った。

しかし、今日のアルフはいつもと違っていた。押さえきれない憤りを吐き出そうとしているかのように、リオに対してさえ語調を荒げたまま言葉を継いだ。

「他の種族のことなんかどうでもいいけど、魔族だけは嫌なんだ。奴等のことを考えるだけでも気分が悪くなる。」

あいつ等は、このルリアでは何も出来なかったように言われるけど、森に生きる民の殆どは、あいつ等に仲間を殺された苦い経験を持ってるんだぜ」

苦々しげに言い放つ。

リオとルーは返す言葉を見つけれなかった。

アルフは幼い頃、小人族に育てられた。

彼等は森に根付いて生きる民だ。

森の恩恵と同時に、厳しい現実をも目の当たりにしてきたのだらう。

アルフ自身は経験がないとしても、部族の過去は、良きにつけ悪しきにつけ、長い長い昔語りとして、諳んじられるくらいに聴かされてきたはずだ。

そして、悪しき過去には必ずといっていいほど魔族の影が付きまとう。

となれば、魔族に対する負の感情が、部族をいう媒介によって集約され、彼の中に色濃く沈殿していても当然だ。

そんな彼に対向できる言葉など、きつとどこにもありはしない。

二人はじっとアルフの言葉を聞くしかなかった。

気まずい沈黙の中、アルフが再び、ゆるゆると口を開く。

「リオはさ、よく言うよな。」

人が何かをするには、それなりの理由があるはずだって。

悪い奴だって、そうなるには何か哀しい理由があるのかもしれないって。

人の噂だけで相手を判断するなって。

でもな、あいつ等だけは違う。

そんな風に気遣ってやる価値なんか無いんだ。

あいつ等が人を殺すのに理由なんか無い。

殺したいから殺す。

それが楽しいから殺す。

それだけだ。

だからもう、あんな奴等のことなんか考えるのはよせよ、リオ」

「本当に、そうだろうか……」

無意識に、疑問の言葉を発してしまったりオ。

少し興奮状態のアルフは、それにすら食って掛かる。

「バカ野郎！ そんなこと言っていると、魔族の生き残りが寄ってくるぞ！」

「うそお。もう滅んだ一族だって、先生、言ってたよお」

ルーが怯えた声をあげ、アルフの腕にしがみ付いた。

その拍子に、アルフはハッと我に返った。

リオとルーの視線に気付き、気まづげに俯いてボリボリと頭を掻くと、そのまま勢い良く寝転んだ。

「そんなの、わかるもんか。

どっちにしろ、用心するに越したことは無いんだ。特にルー。

お前は森の中を独りでうろうろするのが好きなんだから、これから気をつけるんだぞ」

「やめてよお！ アル、意地悪だあ」

ルーは心底不安げな声を出すと、その勢いのままアルフの腹の上に覆い被さってきた。

直撃だった。

アルフがグフツと軀を曲げる。

「バツカ、野郎……」

ルーの下敷きになりつつ軀を振る。

「ちよっとは加減しろよなあ」

「ごめーん」

ルーはあつけらかんとそう言うのと、起き上がって頭を掻いた。

けれどアルフは、腹を押さえて軀をくの字に曲げたまま動かない。

「……アル、大丈夫？」

リオが心配そうに身を乗り出す。

「参った……」

アルフは顔を顰めたまま、苦しげに答えた、……かと思うと、急にクスクスと笑い出した。

リオとルーは、その様子に一瞬咂然としたが、アルフが仰向けになり両手を広げて笑い出すと、つられるように笑った。

三人そろって暫く笑った後、アルフがポツリと言った。

「……ごめん。言い過ぎた」

「ううん。僕のほうこそ」

リオが短く答える。

ルーは腹這いに寝転び、頬杖をつきながら、そんな二人をニコニコと見つめていた。

午前の講義の終了を告げる鐘の音が校内に響き渡った。

お昼の時間だ。

食堂へ向かおうと、三人が一斉に寝転んでいた軀を起こした、その時だった。

「あのお……」

頭上から掛けられた聞き慣れない声音。

三人が同時に振り返ると、少し離れた場所に、長い栗毛の巻き毛の、リオ達よりは少し年上であると思われる少女が、少し恥ずかしそうに、俯き加減で佇んでいた。

「メリーじゃない。どうしたの？」

ルーが満面の笑みで応じた。

一方、少女はというと、声を掛けてはみたものの、続ける言葉が見付からないらしく、モジモジしている。

「どうか、した？」

重ねて問うと、やっと出てきたのは蚊の鳴くような声音。

「あの、アルフに……」

「アル！ メリーが君に話があるってえ！」

彼女の声がいくら小さかろうと、すぐ傍にいるのだから、ルーに聞こえたものがアルフに聞こえないはずはない。

けれどルーは、確認するようにアルフを振り返り、かなり大きな声で伝えた。

アルフは人見知りが激しい。

なみではない。

特に女の子は面倒くさいといって、話をしたがらない。

ルーやリオが話をしているうちに、独り、その場から消えてしまふなんてのは何時ものこと。

だから、言うなれば釘を刺したというところだ。

だが、今回に限っては、ルーのそんな気遣いは必要なかったらしい。

アルフがルーの袖を掴み、ヒソヒソと問い掛けてきたのだ。

珍しいこともあるものだ。

「ルー。お前、その子、知ってるのか？」

「知ってるのかって……、アル、知らないの？ メリー・ルーシー。

今、この学校で一番可愛いって評判の子なのに」

「へえ」

「へえって……、アル！」

ルーは思わず声をあげ、慌てて口許を両手で抑えた。

「とにかく、アルに話があるんだってさ」

けれどアルフは、少し不機嫌そう前髪を掻き上げると、そっぽを向いたまま答えようとしない。

「失礼だよ、アル」

見かねてリオが声を掛ける。

すると、それを当のメリーが引きとめた。

「いいのよ、リオ。どうせ大した用事じゃないの。直ぐに済むから」
次いで彼女は、座っているリオ達に習い、彼等から二歩ほど離れ

た草地に膝をついた。

「アルフ、この間は、どうもありがとう。お礼を言いたかったの。私、何も知らなくて、貴方に怪我なんてさせて。

ホントにごめんなさいね。

家に帰って、ママにすごく叱られたわ。

物を知らないにも程があるって」

「別に」

やっと口を開いたと思えば、アルフの返事は驚くほどに短い。

メリーの口許に、戸惑うような笑みが浮かんだ。

「傷の具合は、どう？」

「治った」

「え？　でも、あれから三日しか……」

問いの続きは省略されたが、アルフは答えようとすらしめない。

会話が続き、困惑気味のメリーを見かね、ルーが助け船を出した。

「怪我って、腕の怪我のこと？　それなら、もう大丈夫だよ。

リオがいるからね、綺麗に治っちゃった。

ホント、心配ないから」

人懐っこい笑みにつられてか、メリーも小さく笑った。

「そう……、そうよね。良かった」

その表情から、心底安堵した気持ちが見て取れた。

本気でアルフのことを心配していたのだろうか。ルーは我知らず、そんなことを考えた。

メリーは再びアルフに視線を向けた。

しかし、何か話し掛けたそうに僅かに唇を動かすのだけれど、それが言葉にならない。

当たり前だ。当のアルフが彼女を見ようとすらせず、そっぽを向いたまま草を噛んでいるのだから。

ルーはリオと目配せし、なるべく二人を見ないように、邪魔をしないように、足許の花など摘んだりしていたのだが、二人の間に立ち込める雰囲気は一直線に下降し、重くなっていくばかり。

ルーとリオはチラチラ視線を交わしつつ、頭の中で場を和ませる話題を必死で探していた。

だが、そんな二人の努力も空しく、メリーは諦めたように急に立ち上がった。

「それじゃ」

「え？ もう行っちゃうの？」

ルーが慌てて声を掛ける。

「ええ。邪魔しちゃ悪いし、傷のこと、心配だったただけだから」

メリーはチラリとアルフを見た。

「じゃあ、アルフ。ホントに、どうもありがとう。貴方の忠告は、絶対に忘れないわね」

ルーが引き止めるよりも早く、栗色の巻き髪は揺れながら遠ざかってしまった。

アルフとルーが同時に深い溜息を吐く。

アルフの溜息は、メリーが去ったことへの安堵感。

そして、ルーの溜息の理由は、彼女が去ってしまったことへの絶望感といったところか。

同じ溜息でも、その意味合いが大きく違う。

ルーは無造作に前髪を掻き揚げるアルフの肩口から、彼の横顔を覗き込んだ。

「この間、腕を怪我して帰ってきた時、理由、何度訊いても教えてくれなかったけど、……そういうことだったんだねえ」

最初のうちニヤついていた口許は、しかし、次の瞬間には責めるようなへの字になった。

「でも、何で教えてくれなかったの？ 良いことしたのに」

アルフは何も答えない。不貞腐れたように手近の草をちぎっているばかりだ。

「まあまあ、ルー。そこがアルの良いところなんだから。ね？」

見かねたリオがルーを宥めに回ってくれたけれど、ルーとしては納得できない。

「それはわかってるけどさあ」

何時にも増して食い下がってしまう。

「でも、アル、何もあんな言い方しなくたっていいんじゃない？

折角メリーが御礼になって来てくれたのに。

彼女、滅多に自分から話し掛けたりしないんだって。

折角のチャンスだったのにさ」

すると、とうとう堪りかねたらしく、アルフが口を開いた。

「礼なんか要らないって、俺ははっきり言った。

無理に話しかけられても嬉しくなんかない。

それに、チャンスって何だよ。

俺は、あの子と話をしたいなんて、一度だっと思ったこと無いぞ」

「あんなに可愛い娘に話し掛けられて、なんとも思わないの？

さっきも言ったでしょう？

彼女、この学校で一番可愛いって評判なんだよ」

「話するのに何で外見が関係するんだよ。

大体、俺は訊かれたことにはちゃんと答えた。

でも、あの娘、最後の方は口の中でモゴモゴ言うだけで、結局、何

言いたいのか全然わからなかったじゃないか。

あれ以上、俺に何を言えって言うんだ。だから女の子って嫌なんだ

よ」

アルフは心外とばかりに、胸の前で腕を組み、不機嫌そうにそっぽを向いた。

これ以上、この件について何を言っても無駄のようだ。

ルーは肩を竦めた。

「わかったよ、アル。でもね、せめてもう少し愛想良くした方がいいと思うよ。

じゃないと、みんな、君のこと怖がっちゃうよ」

「俺は別に怖がられたって嫌われたって構わない。

友達なんて欲しいと思わないし」

次いで、肩越しにリオ達を振り返り、ボソリと呟いた。

「お前等がいれば充分だ。俺はそんなに器用じゃないからな」
不器用なアルフの、不器用な愛情表現。

リオとルーは顔を見合わせ、微笑みながら肩を竦めた。

アルフは照れ臭そうにぼりぼりと頭を掻くと、すっと立ち上がり、そっぽを向いたまま言った。

「そんなことより、早く昼飯に行こうぜ。腹減った」

「うん」

「そうだね！」

アルフの腕に、リオとルーが両側から腕を絡める。

不器用で優しいこの黒髪の友の真実の姿を、皆がわかってくれたらしいのに。

そのために、ボクに何ができるだろう。何気ない会話を交わしながら、ルーは心の中でそう思った。

第2章 予感（後書き）

「翡翠の鳥は飛び方を知らなくて」は、原則として週一回更新します。
宜しく願います!!

第3章 不安（前書き）

「翡翠の鳥は飛び方を知らなくて」は「LURIA」の翡翠の瞳
空の蒼」の続編です。

第3章 不安

◇◇◇ 第三章 ◇◇◇ 不安 ◇◇◇

太陽は西の地平線の上に掛かり、茜の光を放ち始めていた。

下校のために校門をくぐる生徒達の姿も、今は疎らになっている。校門に背中を預け、足許の草を蹴っていたルーの口許から、その時、珍しく深い溜息が漏れた。

「はあ……」

それを横目で見遣り、リオが微かに笑った。

訊いて欲しいことがるというルーの無言の合図は見え見えだ。

ほんの少しだけ間を空け、期待に応えて問い掛ける。

「どうかした？」

待ってましたとばかりに、しかし、それを表情には出さず、ルーはさも面倒くさそうに答えた。

「アルフのことだよお。もう少し人当たりが良くなってくれないかなあって。」

ねえ、リオもそう思うでしょう？」

どうやら、今日の昼間、メリーという少女に対してアルフが取った行動が不満だったらしい。

ルーにしては珍しく、拘っているようだ。

ちなみに当のアルフはといえば、天文学のパルマン先生に、明日の講義の準備を手伝わされている。

これは天文学の講義を受講する全ての生徒が順番に受け持たなければならぬ当番であり、逃げることはできない決まりだ。

というわけで、リオとルーは、今、校門の前で彼を待っているのだった。

「どうしたの、ルー。急にそんなこと言い出して」

リオは笑いながら訊いた。

「アルは人付き合いに関して不器用なんだ。それは、昔から変わらない。」

今更驚くことじゃないじゃないか。どうかしたの？」

「それは、ボクだってわかってるよ。」

でもね、アルが皆に誤解されたまんまなのが我慢できないんだよ。

みんな、アルのこと無愛想な乱暴者だと思ってる。

ホントは全然違うのにさ」

草を軽く蹴りながら、ルーのぼやきは続く。

普段、常に大らかな彼にしては珍しい。

誰かに何か言われたのかな？ 心の奥でそう思いながら、リオは小首を傾げた。

「大丈夫だよ、ルー。」

皆、そのうちわかってくれるさ。

それに、僕等がアルの言葉になってやればいい。

アルが照れ臭くて言えないようなことを、僕等が変わって伝えればいいんだよ。ね？」

しかし、今日のルーはなかなかしぶとくて、慰めるリオの言葉にも、なかなか納得してくれない。

「リオの言うことは、わかるよ。」

でもね、やっぱり、自分が直接言わなきゃ伝わらないことだってあるでしょう？」

「へえ……」

リオは眼を見開き、少し大袈裟に驚いて見せた。

「随分、大人びた発言だね、ルー」

途端、ルーが無邪気に胸を張る。

「えへへん。ボクだって成長するんだよおだ」

「へえ、すごいねえ」

ルーを頼もしげに見つめながら、彼の口調を真似てリオは笑った。

しかし、次の瞬間、無意識に視線が足許に落ちる。

「アルは、……優しいんだよ。優しすぎるくらいに」

長い睫が、微かに震えた。

「自分に関わる人への想いが深すぎるから、友達関係にさえ冷静になれないんだ。

見返りを求めない、何処までも深く、真っ直ぐで一途な想い。

だから、大勢を気安く『友達』なんて呼べないし、適当に付き合うことも出来ない。

でも、確かに不器用だけど、いざという時、一番頼りになる友達だ。……うん、家族だよ」

その視線は、上がると同時に傍らのルーを捉えた。

「僕達とアルは、身近な人、家族や友達に対する想い方が、ほんの少し違うんだ。

それはアルが、僕達が知らない幸せを知っていて、僕達が知らない悲しみを知っているから。

アルはね、僕達と違って、育ててくれたご両親や村の人達を、本当の家族、本当の仲間だと信じて育ち、愛していた。

けれど、そんな彼の思いは、……最悪の形で終りを迎えざるを得なかった。

その時の彼の哀しみの深さは、きっと僕達には計り知れない」

「うん」

同意を示すように、ルーがコクリと頷く。

リオが訝しむ視線を投げると、ルーは少し照れくさそうに笑いながら、短く言った。

「ボクもアルから聞いたんだ。僕等に逢う前の話」

「そっか」

今度はリオが小さく頷く。

「だからアルは、他人と必要以上に深く関わろうとしないんだ。

アルは誰よりも深い情を持ってるから、一旦関われば大切に想ってしまう。

でも、アルの意思に拘わらず、別れは必ずやってくる。

その哀しみを知っている分、それが、……怖いんだ。

傷付くのは、もう嫌なんだよ」

「わかってるよ」

ルーが顔をしかめた。

「そんなこと、ボクだってわかってる。

けど、アルがリオの十分の一でも友達づきあいが上手いと良いなって思っちゃうんだよなあ、ボク。

そのほうがずっと楽しいはずだもん」

「それを言うなら、ルー、君だろ？」

ルーが再度顔をしかめた。

意味がわからない。そういう顔つきだった。

リオは少し大袈裟に肩を竦めた。

「僕は友達付き合いが上手いわけじゃないよ。

臆病なだけさ。

誰かを傷付けることも、自分を傷付けることも怖いだけ。

確かに、一見、人当たりが良さそうに見えるかもしれないけど、無意識に相手を格付けしているんだ。

どう接すればいい相手なのかをね」

口許に浮かぶ笑みに、無意識に自嘲が混じる。

「僕等の中で一番冷たいのは、きつと僕だよ。

いざとなれば、昨日まで『友人』と言っていた相手を、平気で裏切れるんだ。

……きつと、ね」

「そんなこと無いよ！」

突然ルーが大声を出し、リオににじり寄ってきた。

「そんなこと、絶対に無い！」

ボク、知ってるもの！

リオはホントに優しいんだ。

だからボクは、……アルだって、君のことが大好きなんだよ。みんなだってわかってる。

だから、お願いだよ、そんな悲しいこと、もう言わないで！」

トパーズ色の瞳は必死だ。

「リオは何時も何時も、自分で自分を傷付けてる。自分が傷付くのが怖いなんて、そんなの嘘だよ。

人を傷付けるのが怖くて、自分自身を傷付けるんだ。

そんな優しさ、辛すぎるよ。

アルは何も言わないけど、何時だってアルが心配してるのはそのことなんだよ。

わかってよ、リオ」

リオは一瞬だけ眼を見開き、次いで口許を歪めた。

「敵わないな」

瞳を伏せ、前髪を掻き揚げる。

「ありがとう、ルー。でも、僕は……」

しかし、言い掛けた言葉は、突然、背後から掛けられた声によって遮られた。

「あの……」

ルーが首を右に傾げ、リオの背後を覗き込んだ。

彼の立ち位置からでは丁度リオの陰に隠れてしまい、相手を確認できなかったようだ。

ルーに倣って、リオも振り返る。

視界に飛び込んできたのは、赤味掛かった栗色の綺麗な巻き毛。

メリー・ルーシーだった。

ルーが明るく声を掛ける。

「やあ、メリー。今帰りなの？」

リオは視線だけで挨拶した。

それに微笑みで応じたメリーだったが、それは直ぐに躊躇いの表情へと変わった。

「どうかしたの？」

ルーが問い掛ける。

リオが一步後退ったので、彼女に対峙するルーとリオの位置関係は逆になり、リオはルー越しにメリーを見ることになった。

足許に視線を落としたまま、暫し何も語ろうとしないメリーに、ルーが推測、……しかし、かなり信頼性の高い推測を口にする。

「ひょっとして、アルのこと？」

途端、メリーの頬が真っ赤に染まった。

「どうやら凶星だったらしい。」

「やだ、ルー。どうして？」

答えるメリーに、だって、君がボク等に話し掛けてくる理由なんて他に無いじゃない？　という思いを満面に浮かべながらも、ルーはただニコニコと笑っていた。

ルーも大人になったものだ。

リオは心の中で思った。

「あの、ね……、アルフって、……無口よね
「え？」

突然の、予想外の問いに、二人は思わず顔を見合わせた。

「無口……？」

確かに、そう言われれば、そうとも言える。

ある意味、口煩いとも。

そんなことを考えていると、メリーは先を促されているとでも思ったのか、慌てたように言葉を継いだ。

「貴方達以外の人は、あんまり話をしないでしょう？」

……どうしてなのかしら

「どうということ？」

「話し掛けても、そっけないし……」

するとルーが納得の態でポンと手を打った。

「なあんだ。つまりメリーは、アルといっぱい話がしたいんだね」

「そ……、そんなんじゃない……」

「じゃあ、なあに？」

ルーの無邪気な問いは、時に容赦ない。

メリーは口籠もるしかなかった。

「私は、ただ……」

「ただ？」

「ただ、……友達は、少ないより多い方が楽しいだろうって、そう思って……」

「ふーん。メリーはアルの友達になりたいの？」

「でも、どうして？」

追い討ちをかけるルーの問いに、かなり戸惑った後、メリーは躊躇いがちに短く言った。

「優しかった……、から」

「アルは元々優しいよ。どうして急に？」

「そんなの、あれじゃ、わからないわよ」

声音に微かに苛立ちが滲んだことを、リオは聞き逃さなかった。

だがそれは、今日の前にいる二人に向けられたものではなく、此処にはいない黒髪の少年の、昼間の態度に対するものだと思えた。

「アルフって、貴方達以外には凄くそっけないし、話だって必要なことだけ。」

他の子と喧嘩したりもするし。

少し野蛮な人なんだって、そう思ったもの。

なのに……」

長い睫の奥、グレーの瞳がふっと柔らいだ。

「……この間、私が凄く困っていた時、助けてくれてたの。」

酷い怪我したのに、その後も何も言わないで」

「ひよっとして」

「鏡の泉の……？」

一つの疑問をリオとルーの二人が上手に分けて問う。

メリーはコクリと頷いた。

「助けてくれたのに、全然、恩着せがましくなくて。」

初めてだったわ、そんな子。だから……」

「……好きに、なったの？」

半歩近付き、メリーの顔を覗き込みながらルーが訊いた。

彼女の頬が更に真っ赤になる。

冴えた勘が、もう少し別の方向にも向けられるといいのだけれど。秘めた想いはつきりと言い当てられ、モジモジするしなかないメリーの姿を、少し気の毒だと思いながら、リオはボンヤリと見つめていた。

けれど、そんなリオの思いなど知る由も無いルーは、両腕を後手に組み、少し得意げに胸を張った。

「わかるよ、ボク。だって、ボクもアルのこと大好きだもん」

戸惑いながらも、メリーがニッコリと笑う。

それにつられてルーもニコニコと笑った。

「アルはね、ホントに優しいんだよ。ボク、嬉しいな、君が、そのことに気付いてくれて」

背後を振り返る。

「ねえ、リオ」

一歩離れた場所から二人の遣り取りをボンヤリと見ていたリオは、突然話を振られ、戸惑いながらも小さく微笑んだ。

「うん、そうだね」

その笑みに気を良くしてか、メリーが言った。

「私も、なれるかしら。彼の友達に……」

ルーが首を傾げ、次いでリオを振り返った。

リオは僅かに肩を竦めるしなかった。

「それは、アルが決めることだから……」

ごめんね、僕は答えてあげられない」

メリーの笑みが強張った。

少し身を引き、視線を足許に落す。

「そう、よね。ごめんなさい、いい気になって」

「ううん、そんなことないよ。きっと大丈夫だよ」

リオを肘でつつきながら、ルーが満面の笑みでそう言った。

「じゃあ、私、もう行くわ」

小さく手を振り、立ち去ろうとするメリー。

その背中に声を思わず掛けてしまったのは、ルーに促された反動

だったのかもしれない。

振り返るメリーに、リオは小走りで駆け寄った。

「ごめんね、メリー。冷たい言い方しかできなくて。」

でもアルは、僕にとって、とっても大切な 友達から、彼の心の中に無断で立ち入るようなことはしたくないんだ」

意味が解らなかったのだろうか、メリーは小首を傾げ、真っ直ぐにリオを見返した。

本当に綺麗な子だな。

微かにそんなことを思いながら、リオは言葉を継いだ。

「彼の心は、君が自分で見付けて。」

君ならきつとわかるはずだよ」

「どうして、そう思ってくれるの？」

「それは……」

メリーの問いに、今度はリオが小首を傾げた。

「それは君が、アルの優しさに気付いてくれたから。」

彼の優しさはね、色に例えれば透明。

見落としてしまいがちで、気付かない人が多いけど、凄く純粋なんだよ」

メリーが小さく笑った。

その笑みは酷く大人びて見えた。

「リオ。貴方って、何時も難しい言い方するのね」

「そうかな。……ごめん。そんなつもりじゃ……」

リオは困惑気味に前髪を掻き揚げた。

メリーは気遣うように微笑むと、そっとリオの手を握った。

「ううん。私の方こそ、変な言い方してごめんなさい。……ありがとう」

立ち去るメリーの背中を見送りながら、リオはなぜか、心の奥にチクリと、小さな棘が突き刺さったような痛みを感じていた。しかし、その痛みの理由は、リオ自身にもわからなかった。

「ねえ、リオお」

まだ来ない黒髪の友を待ちながら、校門の一部である大木の幹に寄り掛かっていると、それまで暫し無言だったルーが、我慢しきれないとばかりに話の口火を切った。

きつとメリーのことだろう。

アルの気持ちを理解してくれる人が、自分達以外にも現われたよ。よかったね。

ルーはきつと、そう言いたいに違いない。

リオは咄嗟にそう思った。

「うん、良かったね。わかってくれる人がいて」

ルーは一旦頷いたが、次いで首を左右に振った。

「違う、違う。僕が言いたいのは、そのことじゃなくてね」

トパーズの瞳が真っ直ぐにリオを捉えた。

「リオ、君のことだよ」

何のことかわからず眼を見張ると、ルーは口許をへの字に曲げたまま、リオの顔を覗き込んだ。

「さっきのリオ、少し変だったよ。どうかしたの？」

「そう？」

心の棘の存在を言い当てられたような気がして、少し戸惑う。

「何だか、メリーがアルの友達にならないほうがいいって……、そう思ってるみたいに聞こえた。

彼女のこと、あんまり好きじゃない？」

「そうだったかな。そんなつもりじゃなかったんだけど……」

胸の奥で、再び小さな棘が暴れだす。痛みというより、少し苦しい。

「でも、彼女にも似たようなこと言われちゃったから、そうだったかもしれないよね。

反省、……してる」

眉を顰めて俯くと、ルーが慌てて両手を振り、言い繕った。

「違うよ、ボク。そういう意味じゃ……」

「何だよ、二人してコソコソと、何話してたんだ？ 俺も仲間に入れろよ」

不意に背後で響いた柔らかな低音。

慌てて振り返ったリオの視線が背後に立つ人影に焦点を合わせるとの同時に、ルーが嬉しげに言う。

「アル！ 遅いよ。待ちくたびれちゃったよお」

「ああ、すまん。待たせたな」

いつものようにアルフの首筋に飛びつくルーと、微笑むアルフ。

リオは暫し呆然と、そんな二人の様子を凝視していた。

何時の間に近付いたのだろう。

それすら気付けないほどに、僕は動揺していたのか？

そう思った瞬間、頬がカッと朱を帯びた。

「どうした、リオ。顔が赤い。熱でもあるのか？」

目聡く気付いたアルフは、ルーの腕をそっと解くと、金の前髪を掻き揚げて、おでこに手を当ててきた。

咄嗟に一步後退りかけ、いつの間にか後ろに回り込んでいたルーにぶつかった。

「どうした？ 何かあったのか？」

再び問われたけれど、胸の奥で暴れ回る棘が痛くて、上手く言葉にできそうにない。

リオが唇を噛み締め、俯いていると、ルーが得意げに要点を掻い摘んで説明し始めた。

ただし、彼の説明は、いつも気持ちばかりが先走って要領を得ないのだが。

アルフを待っている間にメリーが来て、あの子はアルが優しいってわかってくれたけど、アルの友達は僕達だから、どうなるかわからないって答えておいたよ。

と、……こんな調子だ。

それでも、随分と大人になったようで、最後、こう締めくくるとだけは忘れなかった。

「リオはね、そんなふうに答えちゃったことで、また落ち込んでるんだ。」

でも、リオが悪いことなんて何にもないんだよ」

ルーの言葉は気持ちで聴かなければ。

すっかり要領を得ているアルフには、それで充分伝わったらしい。

そっと髪に触れる指先。

その温もりに誘われるように漂わせた視線は、漆黒の瞳に捉えられた。

アルフはまるで、碧の瞳の奥底まで見通そうとするかのように、真っ直ぐにリオを見つめた。

恥ずかしくて、逃げるように視線を逸らし、リオは足許の草を蹴った。

「僕は、……ダメだね。」

僕等の間に別の誰かが入ってくるのが、怖かったのかもしれない。

……ごめん」

「もう！ リオ！」

我慢しきれず、ルーがリオの腕にしがみ付く。

顔を上げたりオの視線と、黒曜石の視線が絡み合う。

「お前は自分に厳しすぎるんだ。」

人誰しも、万人を愛さなければいけないわけじゃない。

そんなのは、頼まなくても神様や天上界の奴等が気にしてくれるさ」

胸の奥がツンと痛くなった。

僅かに震える唇から、やっと言葉を紡ぎ出す。

「……幸せ、だから……」

「え？」

アルフとルーの声が重なる。

リオは再び視線を宙に漂わせた。

「今がとても幸せだから、この生活が壊れるのが、怖いんだ」
自嘲気味の笑みとともに瞳を伏せる。

「僕はとても臆病だから」

リオの髪に優しく触れていた指が離れ、強く肩を掴んだ。腕にしがみつく力も強まる。

「くだらない心配だ」

「ボク達はずっと一緒だよ。」

そう約束したでしょう？」

交互に耳に届く、二人の友の優しい言葉。

それは、触れる力と同じように強く心に響いた。

「うん……」

コクリと頷く。

不器用でもいい。

誰にもわかってもらえなくてもいい。

今、こうして三人でいられれば、それ以上何も望みはしない。

何時の間にか、溢れそうになる涙を隠したくて、リオは膝を抱え、その場に座り込んだ。

第3章 不安（後書き）

「翡翠の鳥は飛び方を知らなくて」は、原則として週一回更新します。
宜しく願います!!

第4章 ひび割れ No. 1 (前書き)

「翡翠の鳥は飛び方をしらなくて」は「LURIA」の翡翠の瞳の蒼」の続編です。

第4章 ひび割れ No. 1

◆◆◆ 第四章 ひび割れ ◆◆◆ No. 1

「悪いね、アルフ。助かるよ」

薬草学担当のグスタフ先生から掛けられた労いの言葉に、しかしアルフは無言の会釈で応えただけだった。

今は先生の教材作成を手伝っている真っ最中。

正直、彼は余り機嫌がよくない。

そのことを直感的に感じとっているのだろう、グスタフ先生は、微かに肩を竦めただけで、それ以上何も言わずに教室を後にした。

アルフがどんなに無愛想でも、先生は下手に出ざるを得ない。

勿論、理由がある。

アルフの見掛けによらぬ神経の細やかさと、彼の製作物の完成度の高さを知っているからだ。

今、アルフは、明日の薬草学の講義で先生が使う被検体小動物のサンプルモデルを創っている。

全てに共通して言えることだが、本物そっくりに創るためには、かなりの魔法力が必要となるもので、本来なら学生に創れるような代物ではないのだが、アルフ達は別格だ。

先生が創るものよりも生徒達の評判が格段に良い。

というわけで、先生方もすっかり彼等を当てにしまっているというわけなのだ。

その日、先生に教材作成の手伝いを頼まれていたのは、本当はリオだった。

なのに、何故今アルフがここにいるのかと言えば、当然のことながら、リオがアルフに代役を頼んだからだ。

無論、リオは約束を途中で反故にするようなことは絶対にしない。

事実、今日の終業の鐘がなった時には、リオは先生の手伝いにくつもりでいたし、アルフとルーもそのつもりでいた。

しかし、講義室から出て、リオが独りグスタフ先生の許に向かうべくアルフ達に手を振ったその時、突然、友人の一人に声を掛けられたのだ。

相談に乗ってほしいという相手に、リオは明日の放課後を提案したのだが、相手の深刻そうな表情に遂には折れ、已む無く先生の手伝いの代役をアルフに頼んだというわけだ。

いや、今回はアルフの方から引き受けたといったほうが正しい。アルフは正直、リオのところに悩み相談にやってくる、友達と名乗る者達が好きではなかった。

無意識のうちに人の邪気を見抜く力を有するアルフには、皆の心の奥底に蟠るリオへの嫉妬心が感じられ、一緒にいると気分が悪くなるのだ。

だから、リオが誰かの相談に応じている時、アルフは極力何かをして気を紛らわすようにしていた。

それは、ある意味、今の彼に出来る最大限の自己防衛でもあった。

※

秋も深まり、色とりどりの美しさを纏った森の中、丸太の家へと続く小道を、リオは独り、ゆっくりと歩いていた。

アルフに代理を頼んでまで引き受けた相談だったが、その内容は……無論、本人にとっては一大事なのだろうけれど……ごくごく一般的なもの。

具体的に言ってしまうえば、自分の才能の有無の確認。

もっと言ってしまうえば、学校を続けるべきか否か迷っているのだ、というものであり、愚痴を含んでも三十分掛からず、彼は満足気に帰っていった。

予想外に早く解放されたのだから、もう一度学校に戻り、アルフ

と交代すべきだろうか。

一旦リオはそう思ったのだが、すぐに考え直した。アルフのことだ、きっと要領よく作業を終わらせ、もうじき帰ってくるだろう。

今から学校に戻っていたのでは、きつと行き違いになってしまう。ならば、今日は食事当番だからと先に帰ったルーを手伝った方が賢明だ。

ルーは大らかな性格から、一見大雑把にも見えるが、こと料理に關してだけは妙に細かい。

ただ、性格が性格故に、決して手際がいいとは言えず、何を作らせても確かに美味しいのだが、リオやアルフの三倍の時間がかかってしまうのが困りものだった。

それは本人も自覚していて、今日も一足先に家に帰っていたのだが、それでも、腹ぺこで帰ってくるだろうアルフを待たせるのは気の毒だ。

それに、準備は早く終わらせて、ゆっくり食事をした方が楽しいことは言うに及ばずなのだから。

リオは自宅へと向かいながら、口許に苦笑いが浮かんでしまうのを、敢えて隠そうとはしなかった。

魔法使い養成学校に入学して、もうじき六年。周囲の状況は、少なくともリオにとっては、劇的と言えるほどの変化を遂げていた。

今までは何をするにも三人一緒。

三人で一人前だと思っていたし、周囲もそんな風に扱ってくれていることを肌で感じていた。

それが、今ではどうだ？

何やかやと、三人が三人、それぞれの役目を担うようになり、良くも悪くも多忙な毎日を送っている。

それは、とりもなおさず、周囲が彼等を、それぞれに一人前だと認め始めてくれたという証であり、無論、リオにとっても喜ばしいことなのだが、本音を言ってしまうえばリオの心中は複雑だった。

元はと言えばリオが安請け合いをしてしまうのが全ての原因であり、それに何時の間にかアルフとルーを巻き込んでしまったという感否めない。

本当なら、もう少しの間、子供らしい時間を過ごすことだって出来たはずだ。

なにも、急いで大人になる必要などないのに……。

アルフが帰ってきたら、開口一番、ぼやかれるに違いないな。

そう思うと、再び苦笑いが零れた。

アルフが嫌味で言っているわけではないことは十分すぎるほどわかってはいるし、こんなふうに考えていると知られば、かえって怒られてしまうに違いない。

アルフもルーも、今の生活を、それなりに楽しんでいることは間違いないのだから。

微かに頭を振り、否定的な考えを振り払う。

それよりも、杖を遣って早く帰ろう。

ルーを手伝って、今夜はアルフの好物を作るんだ。

茸のパイ包み焼きと胡桃パン、それから……。

腰紐から杖を取り出した、その瞬間だった。

鋭い光の矢が眼前を掠めた。

反射的にその場を飛び退く。

地面に片膝をついて姿勢を低くし、周囲を見渡した。

突如、眼の前に淡い光の塊が現われた。

光の塊は、全部で三つ。

リオは眉を顰め、光の中心を凝視した。

最初は薄ボンヤリとしていたそれは、徐々に人の形を成した。すらりとした長身。

否、正確には、大きな一對の翼を擁する人型。

……天使。

さっと血の気が引いていくのが、自身でもはっきりとわかった。逃げられるか？

退路を探して再度周囲を見回すが、三人の天使はリオを取り囲むように佇み、逃げ道は見つけられなかった。

軽く唇を噛む。

そして、そんなリオの考えを全て見透かしているとも言わんばかりに、一番長身の天使は有無を言わさぬ威喝感を持って、地を滑るようにリオの半歩前まで近付いてきた。

顎を上げたまま、足許に蹲るリオを見下ろす。

「お前ですね。名を付けられることすらなく、天上界を追われた忌まわしき命は」

含みのある言葉。

リオの視線が厳しくなった。

逃げられぬのならば、真正面から対峙するまで。

すっと立ち上がると、真っ直ぐに天使を見返した。

それでも、長身の天使を見上げる格好になってしまうことばかりは如何ともしがたかったが。

「僕の名前はリオです。僕に何か御用がおりならば伺いましょう。ですが、用件を仰る前に、まずは貴方の方から名乗られるのが礼儀ではありませんか？」

気を弛めれば臆しそうになる己を叱咤しながら、リオは精一杯落ち付きを装い、そう言った。

『天上界は君を欲しています。いざとなれば、彼等は手段を選ばぬでしょう』

あの日、校長先生に言われた言葉が脳裏を掠めた。

一瞬だけ襲いくる不安。

だがリオは、そんな気持ちを自ら一笑に伏した。

ここはルリア。

神をして天上界と同等と位置付けられた世界。

いかに天使といえど、礼儀を通さぬわけはいかぬはず。根拠もなしに、そう信じきっていたのだ。

人形のように美しい天使の顔が微妙に歪んだ。

それが憤慨のためであることは、続く言葉によって明らかとなった。

「天上界の使者である我々に口答えするとは、なんとも無礼な。身の程を弁えよ！」

陶器のように滑らかな肌、輝く金色の髪、穏やかな表情からは想像もできないほどに、その口調は激しかった。

気付けば、リオは三人の天使に周囲を完全に取り囲まれていた。

「お前ごとき堕天使が、礼儀を口にするなど、まったくもって片腹痛いわ！」

堕天使……。

リオの肩がピクリと震えた。

そして天使達は、リオの感情の起伏すら見逃してはくれなかった。右斜め後ろの天使が蔑むように言った。

「ほう……。お前、知っているようですね」

「……なんの、ことですか？」

無意識にリオはそう答えていた。

校長先生から聞かされた話は、しかし、この場では知らないふりを通した方がいい。

直感的にそう思ったのだ。

だが、どうやら天使達に嘘は通じないらしい。

三人が一斉に口許を歪めた。

「知っているのならば話は早い。お前は私達と共に天上界に来るのです。」

ルリアにさえ、お前の居場所は無いのですから」

「それはどういうことですか！」

それは咄嗟に、無意識に発した問いだった。

ルリアにさえ僕の居場所が無いなんて、そんなこと、校長先生だって仰らなかった！

しかし、それに答える声はなかった。

「お前は災い。お前は闇。」

お前がこの地に留まることで、お前の周囲にある全ての命が不幸になるのです。

これはルリアを救うための天上界の慈悲。

ありがたく感謝し、私達と共に来るのです」

言うや、天使の手が問答無用でリオの腕を掴んだ。

その瞬間、リオは意識の薄れを感じた。

まるで吸い取られていくように軀中の力が抜け、膝から崩れ落ちそうになる。

リオは、彼の意志を連れ去ろうとする見えない『何か』に必死に抗った。

頭を強く振り、なんとか己を繋ぎ止めると、腕を掴まえている天使の指を乱暴に振り払った。

「放して下さい！　なぜ僕が貴方と一緒に行かなければいけないんですか！」

僕の周りが全て不幸になるって、それはいったいどういう意味なんですか！」

数歩を必死で後退り、リオは叫んだ。

背が木の幹にあたる。

その木肌を、リオは必死で掴んだ。

まるでそれが、リオとルリアとを繋ぐ最後の砦であるかのように。

けれど、リオの想いとは対照的に冷たい、突き放すような声音が、彼の頭上で響いた。

「抗うとは、なんたる無礼」

「本来ならば、お前なぞ、生きていることさえ許されぬ身なのですよ。」

それを、天上界の深い慈悲により、天の牢獄に繋がれて、その身を恥じながら永遠の時を生きることかを許されたのです。感謝なさい」

「さあ、我々と共に来るのです！」

それだけが、お前に与えられた唯一の未来なのですよ」

次々とリオの鼓膜を突き刺す声。

次々と伸びる白い指。

「いやっ……！」

逃げようと抗うリオを、天使達は前後から挟み、彼の腕を、首を、肩を掴んだ。

再び四肢から力が抜け、意識が遠退きかける。

（嫌だ！ ……嫌だ、嫌だ！ 行きたくない！ 助けて、ルー！ 助けて、……アル！）

天と地が逆さまになるような浮遊間。

薄れいく意識の中で、リオは大切な友の姿に必死に縋り付いた。

第4章 ひび割れ No. 1 (後書き)

「翡翠の鳥は飛び方を知らなくて」は、原則として週一回更新します。

宜しくお願いします!!

第4章 ひび割れ No. 2 (前書き)

「翡翠の鳥は飛び方を知らなくて」は「LURIA」の翡翠の瞳
空の蒼」の続編です。

第4章 ひび割れ No. 2

◆◆◆ 第四章 ひび割れ ◆◆◆ No. 2

アルフは、独りで外出先から戻る時は何時も、カナンの大木の雄大な姿が見えてくるとホッとした。

もうすぐ家に着く。

リオやルーが迎えてくれる。そんな安心感に胸が満たされる瞬間だからだ。

だが、今日は何かが違っていた。

ポラリスの森を南に向かって進めば進むほど、次第に不思議な想いに駆られていく。

それは、胸を締めつけるような深い哀しみ。

誰かの想いに森が共鳴している、そんな嫌な感じだった。

何かあったのだろうか？

不安に急かされるように、アルフは杖の速度を速め、木々の枝の間を疾走した。

玄関のぶ厚い木の扉に体当たりするように肩で押し開ける。すると。

「お帰りい、アル」

迎えてくれたのは、拍子抜けするほどに明るいルーの声だった。

「ご飯、もう少しだからね。座って待っててえ」

いつも通りだ。

ルーが変わったところはない。

ホッと安堵し、次いで、もう独りの友の姿を探して視線を巡らす。

「リオは？ まだ戻ってないのか？」

「あれ？ アルと一緒にじゃなかったの？」

「え？」

「サフなら、もう随分前に家に帰ってったよ。帰りに此処に寄ってくれたんだ。リオの忘れ物届けに」

「なんだと？」

背筋を悪寒が這い上がってくる。

そんなアルフの不安を感じ取ってか、ルーの表情が強張った。

「ボク、リオの帰りが遅いのは、アルフを手伝いに学校に戻ったからだと思ってたんだけど」

「いや、俺のところには来てない」

見合わせたお互いの顔が、次第に色を失っていく。

「……どういう、こと？」

「まさか、リオに何か……？」

何かあったのか？

いいや、奴のことだ。

帰り道で別の友人に逢って、長話に付き合わされているだけかもしれない。

でも、それなら何らかの連絡を寄越すはずだ。

それじゃ、いったい……？

それだけのことが一瞬で頭の中を駆け巡った。

アルフの不安はルーにも伝播したらしい。

次の瞬間には計ったわけでもないのに、二人揃って外へと駆け出していた。

当たって欲しくない嫌な予感が当たってしまったのか？

どうか、取り越し苦労であってくれ。

胸の中で一心にそう願いながら、二人は森の奥へと駆け込んでいった。

※

気付けば、リオは暗闇を彷徨っていた。

汗は頬を伝い、絹のような金の髪を伝って滴り落ちる。

何かに追われている。追い立てられている。

その恐怖から逃れたくて、リオは重い脚を引き摺るように一歩一歩と歩を進めた。

手に触れる木の幹と、素脚に感じる濡れた草の感触から、ここが森の中であることは間違いなかった。

だが、こんな暗い森の姿を、リオはかつて見たことがなかった。

恐怖は背後から、徐々に、しかし確実に迫ってくる。

間近に、もう直ぐそこまで。

追いつかれる。

これ以上は逃げられない！

そう思った瞬間、眼の前に白い影がぼんやりと浮かびあがった。

「運命に甘んじること。それが唯一、お前に与えられた使命。それすらわからぬ愚か者であったとは……」

白い影からすると腕が伸び、リオを捕らえようと襲ってくる。リオは咄嗟に身を捻り、白い腕から逃げるが、思うように動かない脚は、その場に膝から崩れ落ちた。

白い影は、一旦フワリと浮き上がったかと思うと、リオの前に立ち塞がるように降り立った。

精一杯の気迫を込め、それを睨み返すリオ。

「なんと禍々しい！」

聞こえてきた声は、凍てつくような冷ややかさを孕んでいた。

「どうしても我等の言うことを聞かぬというのなら、やむを得ぬ」

再び白い影から伸びた細い腕が、自らの影の中から細長い何かを取り出した。

冷たく煌めく、それは長剣であった。

白い影が、それを頭上高く振りかざす。

硬質で白々とした光を見つめ、リオは全てを諦めた。

草を掴み、両の眼を固く閉ざす。

瞼の裏に、愛しい友の顔が浮かんた。

（ごめん、アルフ、ルー。もう、二度と逢えない……）

鼓膜を揺さぶる、肉を切る鈍い音。

けれど、次いで襲いくるはずの激痛は、……こない。

訝しみ、震える瞼をゆっくりと開く。

と、眼前に迫る黒い影。

リオと白い影との間に立ちはだかる別の背中が、そこにあった。

視線を上へと動かしていくと、背中の主の左肩口に深々と突き刺さる剣の鈍い煌め。

わけがわからず、リオは茫然とその背中を見つめた。

突き刺さった剣は、一瞬の停止の後、ズブズブという嫌な音を伴いながら、再び白い影の頭上高く掲げられた。

瞬間、黒い影の肩口から真っ赤な鮮血が飛び散る。

生温かい血はリオの顔にも掛かり、染め上げ、滴った。

黒い影は、暫し、その場に両足を踏ん張り耐えていたが、ゆっくりと膝から崩れ、リオの腕の中にぱったりと倒れた。

その影の……、眼を固く瞑り、青ざめた横顔を見た瞬間、リオは激しい衝撃に突き抜かれ、身動きが取れなくなった。

影の主、それは……。

「アル、フ……？」

いつの間に来たの？ どうして？

呆然とするリオの眼の前で、アルフはよろよろと身を起こすと、再びリオを背に庇うように立ち上がった。

その直後、白い剣が再び彼を襲う。

それはアルフの右肩口から首筋を斬り付け、その勢いにはじき飛ばされたアルフは、黒い草の上、自らの血溜まりの中に倒れ伏した。信じられなかった。

否、信じたくなかった。

鮮血を吹き出し、倒れた友の姿など。

「やめろおおお！」

叫ぶと同時に、リオはアルフの躰の上に覆い被さろうとしたが、

彼の意志に反し、四肢はまるで空中の见えない十字架に縛り付けられたかのように微動だにしない。

「やめろ！ もう、やめてくれ！」

必死の叫びは、しかし空しく黒い森に吸い込まれていくだけ。

今、リオに出来ることは、なす術なくアルフを見詰めていることだけだった。

そんなリオを嘲笑うかのように、白い剣は執拗なまでにアルフを襲い、傷つける。

アルフの艶やかな黒髪が、見る間に真っ赤に染まっていく。

「アル！ アルフ、眼を開けて！ アル！！」

リオは叫び続けた。けれど、アルフはぐったりと倒れたまま、身動き一つしてはくれない。

「アル！ アルフ……」

視界はぼやけ、友の姿が見えなくなる。

腕も足も折れてしまえばかりに身を振り呪縛から逃れようとすが、髪が微かに揺れる程度しか動けない。

アルフを襲う剣が空を切り裂く音は、更に激しさを増していく。

「やめて……。もう止めて下さい。お願いします。お願い、だから……」

嗚咽の中から、やっと紡ぎだした言葉は、それで精一杯だった。

剣の音が止まる。

涙に曇る瞳を上げると、真っ赤な血を滴らせた剣を脇に携えた白い影が立っていた。

その後ろには、血の海に沈むアルフの姿がある。

「アル！ アルフ！！」

走り寄りたかった。

傍に行き、せめてこの腕に抱き締めたかった。

なのに、やはり躰が動かない。

叫び声だけが空しく森へと吸い込まれていく。

もう、嗚咽しか出ない。

すると、白い影は音も無く近付き、アルフの姿を隠すように立ち
はだった。

伸びた指がリオの顎を掴んで引き上げる。

許せない！　ただ、その感情のままに睨み付けると、途端、白い
手がリオの頬を激しく叩いた。

「邪悪な瞳で私を見てはならぬ！　瞳を閉じよ！」

屈辱に唇を噛み締めながら、リオはきつく眼を瞑った。

冷たい指先が、リオの顎から頬をなぞり上げる。

「お前が大人しく我々の命に従うのであれば、その者の命までは取
らずに置いてやろう。だが、お前がまだ抗うというのであれば、今
この場で、その者は死す。……さあ、どうする？　お前に選ばせて
くれる」

リオは暫く俯いていたが、やがて小さく頷いた。

力のない今の自分にできることは他になにもない。

それが酷く情けなくて辛かった。

その途端、今までリオを縛り付けていた力がスッと消え去った。

「アル！」

倒れ付したままのアルフに向かって駆け出す。

なのに、白い影の背後に透明な壁があるようで、アルフに近づく
ことができない。

すぐ眼の前にいるというのに。

「アルフ！　アル！　眼を開けて！」

見えない壁を必死に叩き続ける。

そんなリオを冷たく見下ろし、白い影は静かな口調で言った。

「私の前に跪き、この掌に接吻せよ。さすれば、その者のこと、こ
の場で忘れてしんぜよう」

「アル！　アルフ！」

途端、白い腕がリオの襟元をねじり上げ、鋭く頬を打った。

口の中に鉄の味が広がった。

「聞こえぬ振りをするとは、なんたる無礼！」

冷やかな声の主は、もう一度、リオの頬を激しく叩いた。
頬の痛さよりも、胸が、……心が痛かった。

胸座を捻り挙げられたままの姿勢で、リオはアルフを見つめ続けた。

倒れ伏した彼は、しかし、もうピクリとも動いてくれない。

これほどまでに己の無力さを思い知らされ、悔しく思ったことが、かつてあっただろうか。

跪くこと。

接吻すること。

その行為が何を意味するのか、わからぬリオではなかった。

それは完全なる服従を意味する行為。

もう二度と、アルフにもルーにも逢えなくなるだろう。

けれど、今、眼の前のアルフを助けられない自分に、他に選択肢などありえようか。

友が傷付く様を為す術なく見つめ続けることは、己の死以上に辛いこと。

「わかりました。貴方に、……従います」

リオは再び唇をきつく噛み締めた。

「しかし、もし……、もしも貴方が、その約束を違えたならば、僕は誓って、どんなことがあろうと、貴方を倒します！」

リオは俯きながら、しかし強い口調でそう言った。

そして、白い影の足許に跪き、差し出された掌に接吻した。

（サヨナラ、アルフ。サヨナラ、ルー……）

瞬間、リオの意識は途切れた。

白い影は凝縮し、一對の翼を擁する人の形を成した。

それは、陶器のように滑らかな掌を差し出すと、地面に倒れたりオの上に翳した。

すると、リオの躰の中から、人の形をした光の塊がずると引きずり出され、白い腕に吊されるように立ち上がった。

背に輝く翼を携えたその姿は、まさに、蝶が蛹から成虫へと羽化する光景だった。

全身を顕にした『それ』は、次第に輝きを増し始めたが、白い天使は、その光を畏れ、覆い隠すかのように、片方の翼でその軀を包んだ。

「始めから抗いなどしなければ、このように辛い思いをすることもなかったものを。なんとも愚かな」

「やむを得まい。所詮は、その程度の命」

白い天使は、腕に光を抱き締めたまま、大きな翼をはためかせ、空へと昇っていった。

その後には、草むらの上に力無く横たわるリオの軀が、ポツンと取り残されているだけだった。

第4章 ひび割れ No. 2 (後書き)

次回予告…突然現れた天使達に浚われたリオ。彼等の目的は？
その時、アルフは？ ルーは？

「翡翠の鳥は飛び方を知らなくて」は、原則として週一回更新します。

次回更新(予定)日は12月27日(水)！
宜しく願います！！

第4章 ひび割れ No. 3 (前書き)

「翡翠の鳥は飛び方を知らなくて」は、「LURIA　　」翡翠の瞳
空の蒼」の続編です。

第4章 ひび割れ No. 3

◆◆◆ 第四章 ひび割れ ◆◆◆ No. 3

何が起こったのか、全くわからない。

ただ一つ確かなことは、今、リオが二人の傍にいないという事実だけ。

「リオ！ リオ、どこ？」

「リオ、返事しろ！ リオ！」

呼び遣りながら、二人は森中を探し回ったが、リオの行方是一向に知れなかった。

彼等の不安を煽るように、どんよりとした曇り空から、冷たい雨が落ち始めた。

「いたか？」

「いない！」

「くそっ……！」

「これだけ探しても見付からないなんて、いったい……」

疲れ切った身体を一瞬だけ休ませるために立ち止まったルーは、傍らの大木を右の拳で強く叩いた。

その傍らでは、やはり肩で息をしているアルフが、どんな小さな手がかりさえ見逃すまいと、森の奥底まで見透かそうとするかのような鋭い視線を走らせていた。

「何かあったんだ。間違いない」

「どうしよう！ どうしよう、アル！」

なぜか酷く不安げだったリオの姿が思い出される。

自分達の知らないところで、きっと何か大きなことが起こっているに違いない。

リオはそれを自分独りで抱え込もうとして、……そして、何かに

巻き込まれたんだ。

掌をぎゅっと握り、お己を叱咤するように膝を叩く。

「とにかく、探そう。心当たりを全部」

急がなくては。手遅れになる前に。

そんな焦りに突き動かされ、ルーとアルフは再び別々の方向へと駆け出した。

「リオ、何処にいるの？ 返事してよ、リオ！」

月の泉の辺まで来てみたけれど、やはり、リオは何処にもいない。手掛かりも得られない。

泣き出しそうになるのを必死で堪え、ルーは左手を頭上に差し伸ばした。

瞬時に、そこに風が渦巻く。

集まった風に向かい、ルーは念じるように呟いた。

「風よ、お願い。リオを探して。……急いで！」

風は暫しルーの周囲に渦巻いていたが、解けるように四散すると、森に向かって吹いていった。

それを見送るルーの肩に、真っ白な小鳥が一羽停まった。

ルーは小鳥を指先に移し、顔を近付けると少しだけ微笑んだ。

「君も、探してくれるの？」

小鳥は小首を傾げた。

「僕の友達のリオ。わかるよね？ とっても大切な友達なんだ。ポラリスの森の深緑を切り取ったような瞳をした子だよ。お願い。君の友達にも伝えて、みんなで探して！」

小鳥は、まるでルーの意志を読み取ろうとしているかのように数度首を傾げた後、翼を広げて大空へと羽ばたいていった。

小鳥の囀りに気付いて見上げれば、頭上の木々の枝には、知らぬ間に沢山の鳥達が、そして周囲の木陰には、多くの動物達が集まって来ていたが、彼等はみな、ルーの言葉と小鳥の羽ばたきに呼応するように、一斉に駆け出し、飛び去っていく。

「願いだよ、みんな。どうか、リオを見つけて！」

動物達の背中を見送りながら、そう願うことしかできない己の無力さが、ルーは齒噛みするほどに悔しかった。

カナンの大木の根元に片膝を着くと、アルフは両掌を地面に水平に押し当てた。

途端、その掌が赤く輝き、輝きは大地の奥へと吸い込まれていった。

アルフの思考が大地を伝い、ルリア中に伝わっていく。

（リオ。何処だ、返事をしろ！　リオ！）

激しさを増す雨は、疲れ切った二人の身体を容赦なく打ちつけた。そして、リオを探し続ける彼等の足音も、呼び声さえも、無情に掻き消してしまうのだった。

※

リオが見つかったのは、翌朝になってからだった。

前日から降り続いていた雨がやっと上がり、雲間から金色の朝日が射し込み始めた頃、何度も探したはずの木の陰に、ずぶ濡れで倒れていた。

木の枝以外、雨を遮るものなど何も無い森の中で、リオの躰は氷のように冷え切っていた。

できるだけそっと家へ連れ帰り、温かなベッドに寝かせて、やっと一息吐く。

しかし、真っ白なベッドの中、横たわるリオは、まるで人形のようにながななかった。

白い肌は青ざめ、唇は色を失っていた。

「リオ……」

声を掛け、そっと頬に触れる。

氷のように冷たい肌。

瞬間、アルフは胸の奥を掴み出され、押し潰されるような、烈しい息苦しさを覚えた。

咄嗟にリオをきつく抱き締めると、その軀はとても細くて華奢だった。

そのことが、余計にアルフを哀しくさせた。

トクトクと脈打つ鼓動だけが、かろうじてリオの命の炎の揺らぎを実感させてくれる。

何があった、リオ？ 俺がいない間に、いったい何があったんだ？ 問い掛けても、リオは何も答えてはくれない。

「アル、リオは？ どうかしたの？」

そんなアルフの様子を訝しみ、ルーが問い掛ける。

アルフはゆっくりと顔を上げ、深く溜息を吐くと、ほんの少し唇の端を上げた。

「大丈夫。大丈夫だ。リオは強い奴だ。だから、きっと大丈夫だ」
自分自身に言い聞かせるかのように、アルフは何度もその言葉を繰り返した。

抱き締める腕に力を込める。

せめて自分の温もりだけでも、リオに差し出したかったから。

その時。

リオの指先が、僅かだが動いたような気がした。

「リオ？」

軀を離し、肩を掴む。

「リオ？ おい、リオ！」

呼び掛けながら肩を揺らす。

すると、何度目かの呼び掛けの時、今度は確かに指先がピクピクと動いた。

「リオ？ 気が付いたのか？ リオ！」

リオの両肩を掴んだまま、軀を前後に揺さぶり、下から顔を覗き込む。

すると、リオの口許が微かに動き、眉間に皺が寄った。

次いで、薄く開いた唇の間から長い吐息が漏れた。

「リオ！ リオ？ わかる？ ボクだよ！」

不安そうに横から覗き込んでいたルーがリオに飛びつく。

「おい、目を覚ませよ！ リオ！」

「リオ！ リオ？」

二人の呼びかけに答えるように長い睫が震え、青ざめた瞼がゆるゆると開かれていく。

「よかった、リオ。よかった……」

極度の緊張から解放されたためか、ルーはその場にへたへたと座り込んだ。

「このまま、眼、覚まさなかったら、ボク、どうしようかと……」

その様を視界の隅に捕らえつつ、アルフも肩の力抜けていくのを感じていた。

無意識に弛んでしまう口許を抑えようともせず、リオが座りやすいように牀の位置をずらし、枕に寄り掛かせてから、その顔を正面から見つめた。

「バカ野郎。心配掛けやがって。いったい何が……」

言いかけて……、しかし、そこから先の言葉を、アルフは呑み込んだ。

何かが違う。

なんだ、この嫌な感じは……？

リオが目覚めた。

それは間違いないはずなのに、胸の奥の痼りは消えず、それどころか、更に数を増しているような不快感。

その原因を捜したくて、アルフは一旦部屋の中を見回り、次いでリオの顔を覗き込んだ。

その瞬間。

アルフは牀中の血が足許の床を介して吸い取られていくような錯覚を覚えた。

目の前にある、ポラリスの森を切り取ったように澄んでいなければならないリオの碧の瞳が、澱んでいた。

煌めきを失ったそれは、周囲の風景を確かに映してはいるけれど、観て、認識しているとはとても思えなかった。

「……リオ？」

恐る恐る声を掛けるが、碧の瞳はボンヤリと宙を泳ぐだけ。ぞっとした。

悪寒が背筋を這い上がってくる。

「リオ、……リオ？ どうした？ リオ！」

耳許で声音を強めて呼び、肩を掴んで軀を何度も揺さぶった。

しかし、頭がガクガクと揺れ、金の髪が解れていくだけで、何の反応も返ってはこない。

「どうしたの、アル？」

アルフのただならぬ様子に気付き、ルーが立ち上がって二人の間に割って入った。

ボンヤリしているリオの様子を訝しみつつも、異変には気付いていないようだ。

「……リオじゃ、ない」

「え？」

眉根を寄せたルーがリオの顔を凝視する。

「……どういうこと？」

咄嗟に口にしてしまった言葉を、一瞬、アルフは後悔した。

俺の気のせいなのではないか？

そう思い、そうならばどんなに良いだろうかと思い、しかし、そんな言葉で偽ってどうするつもりなのだ、と己を叱咤した。

俺はこんなにも確信しているじゃないか。

これは、……今、目の前にあるのは、リオじゃない。

生きているだけの人形。

そして、問いに答えないアルフを不審な眼で見つつも、言葉の意味を確認するようにリオを凝視していたルーは、やがて、アルフと

同じ懸念に行き着いたらしい。

リオの髪を撫で、頬を撫で、肩を掴んだ。

「リオ？　ボクだよ。ルーだよ。わかる？」

だが、ボンヤリと濁った碧の瞳には、やはりなんの変化も現れない。

「ねえ、アル、どういうこと？　リオ、どうしちゃったの？」

ルーの表情がみるみるうちに歪んでいく。

「ねえ、教えてよ、アル！　リオ、どうしちゃったの？　どうして答えてくれないの？　どうして、笑ってくれないの？」

問われても、答える言葉をアルフは持ち合わせていなかった。

今出来るのは、唇を噛み締めて俯ことだけ。

その時だった。

寒さを防ぐために窓は閉じているのに、どこからか入り込んだ風が白いカーテンをフワリと揺らした。

瞬間、リオの顔色が急変した。

びくんと軀が震え、怯えたように周囲を見渡す。

「リオ？　おい、リオ？」

意識が戻ったのか？

淡い期待に突き動かされ、アルフはルーを押し退けてリオの肩を掴んだ。

しかし、その腕は、予想外の力ではね除けられた。

「いや、……いやだ。や……」

リオの顔は恐怖で引きつっていた。

両の耳を両手で押さえ、見えない何かに怯えるようにベッドの上に蹲り、か細い悲鳴をあげ続ける。

「リオ？　どうした？」

「ボクだよ、リオ！　わからないの？」

落ち着かせたくて、腕を掴もうとするが、それは逆効果にしかならなかった。

「いや……、いやあああああああ！」

腕を振り、めちやくちやに周り暴れるリオ。

その姿はまるで、親に捨てられ、世界の全てに怯える子狐のようで、余りにも哀しすぎた。

ルーは一步下がったまま、その光景をただ茫然と見つめている。

『リオ』であって『リオ』でないもの。

心を失い、恐怖だけに支配された、それは、リオの抜け殻でしかないもの。

堪らなかった。堪らなく悔しかった。

アルフは無理矢理、リオの細い軀を腕の中に強く抱き締めた。

それでも暴れ続けるリオに、しかし、今してやれることなんて、他には何も思いつかなかった。

抱き締める腕に力を込める。

辛くて、悔しくて、涙だけが頬を伝っていった。

リオ、どうしたんだ？

いったい、何があった？

そう問い掛けても、腕の中で子供のように泣きじゃくり暴れ回る

リオは、何も答えてはくれなかった。

第4章 ひび割れ No. 3 (後書き)

次回予告…リオがリオでなくなった？ 過去も言葉も失ってしまったりオを前にして、アルフは？ そして、ルーは？

「翡翠の鳥は飛び方を知らなくて」は、原則として週一回更新します。

次回更新(予定)日は1月4日(水)！
宜しくお願いします！！

第5章 困惑 No. 1 (前書き)

「翡翠の鳥は飛び方を知らなくて」は「LURIA」は「翡翠の瞳
空の蒼」の続編です。

第5章 困惑 No. 1

◇◇◇ 第五章 困惑 ◇◇◇ No. 1

あまり懐かしくはない記憶を、その時、ボクは思い出していた。
リオと共に養父であるラウ先生の元で生活するようになって半年ほどが過ぎた頃。

二人とも魔法遣い養成学校への入学が決まり、入学準備に追われていた時期のことだ。

朝、眼が覚めたらリオが居なかった。

ボクは彼を捜しまわった。

まだ、彼以外の誰かを信じる事が出来なかった時だから、必死で探した。

探し回って、やっと、森の奥へ独り歩いていくリオの背中を見つけたボクは、嬉しさの余り勢いよく飛びついたっけ。

「リオお、どこ行くのお？」

リオは最初、少し驚いていたけれど、唇を窄めて息を吐くと、優しくボクの髪を撫でてくれた。

「お家へお帰り、ルー。僕はちょっと、ご挨拶をしておかなきゃならない場所があるんだよ」

「なら、ボクも行く」

「でも……」

「ボクも行くう！」

リオは少し困ったような顔をした。

でも、言いだしたらきかないボクの性格を知っているから、やりわりと手を引いてくれた。

暫く歩いて脚が疲れた頃、やっと到着したのは、その一角だけ森が光の進入を拒否しているかのように、妙に薄暗い場所だった。

更にその奥、分け入って進んだ先には、密集する灌木で隠されるように、小さな洞窟が口を開けていたんだ。

「ねえ、ルー。何を見ても大声を出したりしないって、約束できる？」

確認するように問われ、ボクはコクリと頷いた。

なぜリオがこんなことを訊くのかわからなかったけれど、その時のボクは、宝箱を覗く直前みたいに、少しの怖さと沢山の興奮でドキドキしていたんだ。

灯りといえは数カ所に置かれた蠟燭だけ。

洞窟の中は酷く薄暗かった。

リオのシャツの裾を掴んで恐る恐る着いて行くと、突然止まった背中に、おでこと鼻を思い切りぶつけてしまった。

「こんにちわ、マリアさん」

洞窟の最奥に向かってリオが言った。

その視線を辿って、ボクも同じ方を見つめる。

最初のうちはよくわからなかったけれど、暗がりに眼がなれ始めた頃、ボクはやっと、薄暗い灯にゆらりと浮かび上がる人影を捕らえることができた。

それは、子供だったボクの眼には、なぜか酷く恐ろしいものに見えて、ボクはリオの腕をぎゅっと握ってしまった。

すると、ボクの耳許で、リオが囁くように言った。

「彼女は人間なんだよ」

「ニン、ゲン？」

「そう」

コクリと頷くと、金の髪がさらりと揺れた。

「この世界に迷い込んでしまった、人間」

驚いた。

異世界の生き物を見るのは、それが生まれて初めてだったから。だがらきつと、ボクは無意識に、無遠慮にジロジロと見てしまっ

ていたのだろう。

『マリア』という名の人間は、微かに眼球を動かしてボクを見ると、酷くきこちなく、それでも微かに微笑んだ、……ような気がした。

その瞳に、生气はなかった。

怖い！

それが、その時のボクの正直な気持ちだった。

「リオお、変だよ、この人。生きてないみたいだ」

リオの腕を更に強く握ると、彼は静かに頷いた。

「そうだよ。彼女の精神は、もうじき消えてなくなってしまう。そして、彼女の魂は、この世界を彷徨い続け、苦しみ続けるんだ」

「魂？」

「うん。人間だけが持っている精神の結合体。天上界に戻って、次の命をもらうための種のことだよ」

そういえば以前、ラウ先生からそんな話を聞いたことがあったっけ。

ボクはなんとなくわかったような気がして小さく頷いた。

「そう、なんだ」

でも、言えたのはそれだけだった。

どうしてマリアがルリアに来てしまったのか、どうして人間の世に帰らなかったのか、今となっては不思議でならないけれど、その時のボクには、そんなことを疑問に思う余裕さえなかった。

「じゃあ、この人間の魂は、どうしてルリアを彷徨わなくちゃならないの？ 人間の魂は消えずに天上界へ行くんでしょう？ この人は天上界に行くんだね？」

ラウ先生の受け売りだったけれど、ボクは自慢げにそう言った。途端、リオの表情が曇った。

「ううん。ちがうよ」

辛そうに、少しだけ唇を噛む。

「ルリアと人間界は違う。ルリアに天使はやってこない。だから、

マリアさんの魂は天上界にはいけないんだ」

「死なないってこと？」

「人間として、という意味ではね」

「でも、この人は人間でしょう？　どうなっちゃうの？」

人間とルリアの民の違いがよくわからなくて、ボクはすっかり混乱していた。

ルリアにおいて人が死ぬということは、精神の消滅を意味する。

消滅。

……つまりは、消えてしまうこと。

そして、精神を失った肉体は、地中に埋葬されて土となり、自然に返る。

だから、死は決して哀しいことじゃない。

ルリアから生まれた命が、ルリアに帰り、新たな命の糧になることだ。

誰に教えられたわけではないけれど、ボクは無意識にそう思っていた。

けれど、リオから教えられた人間の最期は、ボクが予想していたものとは全く違っていたんだもの。

リオは少し考え込んでいたが、やがてボクを振り返ってゆっくりと言った。

「この世界で生きるには、人間の精神力は弱すぎるから、ここにいるだけで人間の精神は消耗し、消滅してしまうんだ。けれど、精神が消滅した後も魂は残ったままだから、人間の軀は、人間界の定義の上では生きていることになる。でもそれは、単なる魂の入れ物。何も見えず、何も聞こえず、何も感じない。それでも軀は生き続けるから、自然が肉体を風化させてしまうまで苦しみだけが残る。そして、いつか肉体が滅んだ後、解放された魂は行き場を失って、この世界を永遠に彷徨い続けるんだ」

冷たい何かが背筋を這い上がっていくような気がした。

それが怖くて、気持ち悪くて、ボクはリオの腕にぎゅっとしがみ

ついたんだ。

リオはボクの髪をそつと撫でてくれた。

怖がらなくてもいいんだよ。

そう囁きながら。

「どんなに頑張っても、どうにもできないことが、この世界にはたくさんある。でも、魔法遣いになれば、少なくとも、今よりはきつと、沢山のことが出来るようになるはずなんだ。マリアさんは救えなかったけれど、これから先、同じように哀しい出来事を繰り返さないようにすることが、もしかしたら、僕にもできるかもしれない」

その時リオは、確かにそう言った。

恐る恐る顔を上げたボクは、リオの瞳を見つめた。

いつもと同じ優しい碧。

けれど、その奥に寶石のように硬くて強い意志の力があることに、その時ボクは初めて気付いた。

ボクなんかとは違う。

ボクみたいに『なんとなく、リオの背中を追い掛けて』なんて単純な理由じゃなくて、リオは、この世界の哀しみを少しでも減らしたくて、そのために魔法遣いになる道を選んだんだ。

マリアの姿をじつと見つめ、リオは小さく言った。

「もう、僕はここには来ない。だから今日は、お別れを言いに来たんだ」

その口調は、目の前の女性に言っているようでもあり、自分自身に言い聞かせているようでもあった。

何もかもを忘れ、ボンヤリと宙を見つめるリオを見て、ボクは、その時の光景を思い出していた。

『魂』とは別の何かが、精神を奪われたリオの軀には残っている。ならば、自然が肉体を風化させてしまうまで、リオは苦しみ続けなければならないのだろうか？

それはボクにとって、世界の終わりと同じくらい、底の見えない

暗闇を伴う、とてつもない恐怖だったんだ。

第5章 困惑 No. 1 (後書き)

次回予告…リオを取り戻すため、アルフが、ルーが森を駆ける！

「翡翠の鳥は飛び方を知らなくて」は、原則として週一回更新します。

次回更新(予定)日は1月12日(金)！

宜しく願います！！

第5章 困惑 No. 2 (前書き)

「翡翠の鳥は飛び方を知らなくて」は、
「LURIA」は、
「翡翠の瞳
空の蒼」の続編です。

第5章 困惑 No. 2

◇◇◇ 第五章 困惑 ◇◇◇ No. 2

『リオは帰省していて、暫くは登校できません』

養成学校には、そう嘘の申請を出した。

友人達は当然のように、突然の帰省の理由を知りたがったが、アルフは決して、それ以上のことを口にしようとはしなかった。

『リオ』でなくなった『リオ』を、誰にも会わせようと思わない。

ルーは、養成学校の先生方に事情を説明し、協力してもらうことを提案したが、アルフはそれすら頑なに拒んだ。

唯一信頼の置ける校長先生が、養成学校分校新設調整のため長期出張中で留守であったことも一つの要因であったが、それだけではなかった。

『闇に魅入られし者は、やがて心を喰われる』

彼が幼少期を過ごした小人族には、そんな伝承があるらしく、それがアルフに、リオの今の状況を公にすることを躊躇わせていた。

そんなこと、あるわけがないというルーの言葉にさえ、耳を貸さうとしないほどに、アルフは頑なだった。

突然の出来事。リオの心を奪った『何か』。

わけのわからない、それら全ての恐怖から、これ以上、何一つ奪われたりしないように、両腕に抱えて必死に護ろうとしている気持ちに痛みほどに感じられて、ルーは余計に哀しくなった。

とにかく二人は、可能な限り学校を休み、一方はリオに付き添い、もう一方は食事と睡眠以外の時間のほとんどを、心を取り戻す方法を探すことに費やした。

魔法遣い養成学校の学生という立場で可能な限り、過去の文献の保管されているあらゆる場所……学校の図書館、古文書館、各部族

の長老達……を訪ね回り、文献という文献、伝承という伝承を聞き回った。

しかし、古文書はにいずれも『心を失いし者、肉体の滅びを待つのみ』としか書かれていなかった。

その文言を眼にする度、その言葉を耳にする度、二人は落胆し、暗闇の底に突き落とされるような気分になったが、だからといってあきらめることはできなかった。

※

リオが言葉と過去を失い、あつという間に二ヶ月が過ぎた。状況は一向に進展しない。

唯一の変化といえば、最初のうちは触れようとするだけでも怯えたように震え、身を小さく竦めていたリオが、何度も繰り返し、少しずつ距離を縮めていくにつれて、次第に慣れてくれたのか、心を許してくれたのか、やっと触れることだけは許してくれるようになったことくらい。

何も出来ず、ただ見守るだけの日々。

無力な己を悔やむことしかできないとしても、……否、だからこそ、疲労は積み重なるものなのだ。

特にアルフの焦燥は、日々、眼に見えて深くなっていく。

一度目を通した文献を、再度、嘗めるように読み返しながら、ほとんどリオに付きっきりの日々だ。

ルーが付き添いを代わっても、再び起こるかもしれない『何か』を恐れ、ほとんど眠れないらしい。

そんなアルフが痛々しくて、せめて彼に気晴らしをさせてあげたくて、ルーは、彼なりに散々悩んだ挙げ句、思い切って外出を提案してみた。

「ねえ、アル」

名を呼ぶと、無言のままに振り返る。

そこには色濃い疲労が見て取れた。

一瞬、萎えそうになる気持ちを奮い起こし、言葉を継いだ。

「リオをね、連れて行きたいところがあるんだ」

顰められた漆黒の視線が、言葉を伴わずに問うてくる。

まさか学校じゃないだろうな、と。

ルーは首を横に振った。

「違うよ。そうじゃなくて、ね、……月の湖」

アルフは訝しむように眉根を寄せた。

「寒いぞ」

「わかってる。でも、リオ、この季節に月の湖を観るの、毎年、凄く楽しみにしてたでしょ？ 見せてあげようよ。リオだって喜ぶと思うし、きっといい気晴らしになるよ」

月の湖は、水面全体がうつすらと氷に覆われていた。

それが木漏れ陽を反射し、淡く輝いて見える。その様子を上空から見ると、まるで柔らかな光を纏った満月のようなものであることから、この名が付いたのだと、以前、先生が教えてくれた。

一年で一番寒い、この時期だけ観ることのできる美しい風景を、リオはとても好んでいた。

一日中眺めていても飽きないと言って、日に何度も足を運んでいたほどだ。

全てを失ったように見えても、記憶の断片が僅かながらでも残っているのか、それとも感性や好みというものは過去の記憶とは全く異なる次元で存在する意識なのか。

そのへんの難しいことはよくわからないが、リオは月の湖に興味を惹かれたらしい。

アルフとルーの手を借りることなく畔まで自分一人で歩いていくと、そこに腰を下ろし、湖とその周辺の景色をボンヤリと眺めた。今の状態になってから以降、リオが自分から何かに興味を示すのはこれが初めてで、この場所に連れてきたのは間違いではなかった

と、アルフとルーは揃って安堵した。

この調子なら、もしかしたら何か思い出すかもしれない。

万が一の可能性でしかないかもしれないけれど。

そんな淡い期待など抱いたりしてみながら、リオから数歩離れた場所に並んで腰を下ろしたアルフとルーは、暫し無言で、リオの様子を見守ることにした。

頬を刺す冷たい風が森の木々の間を巡り、枝を揺らしてザワザワという音を響かせる。

酷く物淋しい風景ではあるが、心までも凍りついてしまう出来事に遭遇した彼等は、冷たさを感じる感覚が麻痺してしまっているのか、特に辛いとは感じなかった。

周囲に流れる、時間さえも凍えさせるような沈黙。

それを破ったのはルーだった。

これまで何度も繰り返し、拒否されると分かり切ってる提案だったけれど、今日、この場所に来てからも散々悩んだけれど、ルーは思い切って言うてみた。

「ねえ、アル。やっぱり、ボク等だけじゃ限界がある。先生達がダメなら、誰か別の人でもいい。大人達に相談してみようよ。ボク等がまだ知らないことが、何かあるかもしれないじゃないか」

しかしアルフは、じっと正面を見据えたまま短く答えるだけだ。

「……ダメだ」

「アル！」

思わず上げてしまった大声が森に響き、驚いた鳥達が飛び立つ音を聞きながら、ルーはアルフににじり寄った。

「その人が例え小人族の伝承を知っていたとしても、リオが闇に魅入られたなんて、そんなこと誰も思ったりするわけじゃないか。リオをよく知っている人を選べば大丈夫だよ」

「噂なんてのは、どこから広がるかわからないもんだ」

「でも、それでリオが元に戻ってくれれば……」

「戻ればいいさ。でも、戻らなかったら？ リオはそんな根も葉も

ない噂をされながら、みんなの好奇の目に晒されることになるんだぞ。それでもいいのか？」

「そんな……」

アルフと言い争うなんて、半年前のルーには考えられなかったことだ。

それでも、今回だけは退きたくはなかった。

アルフの気持ちはわかるけど、考えは間違ってる。

日に日に、そんな思いが強まる一方だからだ。

「そんなふうに悲観的にばかり考えていたら、先になんか進めないじゃないか。今はリオを元通りにすることを優先すべきだろ？ その可能性が僅かでもあるのなら、それに賭けるべきなんじゃないの？ もしもボクや君が同じような立場になったら、リオはきっとそうしてくれるはずだよ。アルはそう思わないの？」

アルフが言葉に詰まった。

もう一息だ。

もう少し説得の言葉を重ねたら、アルフはルーの提案を受け入れてくれるかもしれない。

そう思った瞬間だった。

周囲の森に激しい水音が響いた。

驚いて顔を上げると、ついさっきまで水際にいたはずのリオの姿が消えている。

「リオ？」

二人は慌てて立ち上がり、湖に駆け寄った。

バシャバシャという暴れるような水音は続いているが、リオの姿はやはり見えない。

水音を辿り、素早く視線を巡らせる。

すると、水面に黄金の髪が一瞬見え、しかし、すぐに消えてしまった。

この湖は、岸から急に深くなる。脚を滑らせ、誤って冷たい水中に落ちてしまったのだろうか。

「待ってろよ、リオ！」

言うが早いのか、アルフが湖に頭から飛び込んだ。

ルーは驚きと不安で混乱しかけたが、自分自身を落ち着かせるべく数度足踏みすると、小さく頷き、次いで、空気に溶け込むようにその場から消えた。

第5章 困惑 No. 3 (前書き)

「翡翠の鳥は飛び方をしらなくて」は「LURIA」は「翡翠の瞳
空の蒼」の続編です。

第5章 困惑 No. 3

◆◆◆ 第五章 困惑 ◆◆◆ No. 3

凍るほどに冷たい水の中でリオは必死に手脚をばたつかせているが、パニックで天地の感覚が麻痺しているらしく、岸にも水面にも近づけぬままに、ただ水を掻いていた。

水圧で押し潰された肺から吐き出された空気が気泡となり視界を塞いでいることも、混乱の要因になっているに違いない。

それでも光の差し込む方へと向かって伸ばされた腕をしっかりと掴んだアルフは、次いでリオの身を掬い上げ、そのまま水面へと向かって泳いだ。

水から顔を出した瞬間、新鮮な空気を貪るように呼吸するリオを見定めて、やっと安堵した。

「大丈夫か？」

リオを右腕に抱え、絡みついた髪を整えてやりながら顔を覗き込む。

寒さと驚きのためだろう、顔色は酷く青ざめ、全身をガタガタと震わせながら慌ただしく呼吸を続けている。

「バカ野郎……。心配、させんな」

深呼吸して、アルフは呟いた。

岸に泳ぎ着き、芝の上に身を引き揚げるやいなや、アルフはびしょ濡れのリオの服を脱がしにかかった。

一刻も早く身を温めなくては大変なことになる。

そのためには、水を含んで冷たくなっていくだけの衣服は邪魔なだけなのだ。

右手の指を鳴らすと、今まで何もなかった場所に、たちまち赤々とした焚き火が現れ、炎を燃え上がらせた。

「ルー、タオルと毛布取ってこい！」

そうアルフが叫んだ次の瞬間には、ルーが空気の中から現れた。両腕一杯にタオルと毛布、そして着替えなどを抱えている。

「はい！」

「気が利くな」

唇の端だけでニヤリと笑い、山ほどのタオルを受け取って、アルフはリオの臍を擦り始めた。

「ゴメンね、リオ。ボク等が眼を離したから」

アルフを手伝いながら、ルーが言葉を掛ける。

リオはガタガタと震えながら、自分を取り囲む二人の顔を交互に見比べていたが、それがアルフとルーであると確認できたらしく、ほんの少し安堵の表情を浮かべて長い息を吐いた。

四肢の硬直を解いて臍を預ける。

その時だった。

少しでも早く体温を上げるためリオの臍を拭いていたアルフの腕がピタリと止まった。

それが次第に震え始める。

眼を見開いたまま、驚きは徐々に色濃い困惑へと変化していった。

「アル、どうしかした、の……？」

アルフの様子を訝しみ、その手許を覗き込んだルーも、やはり同じように言葉を途切れさせた。

「リオ、君……」

「男じゃ、なかったのか？」

やっと絞り出した声音は、自分のものではないくらい、ひどく乾いてざらついていた。

恐らく二人は同時に、今この場で言葉にすることが適当でない、

……否、したくない単語を思い浮かべていた。

……アジュ。

両性皆無の幼児態。ルリアの地に生を受けてから二年間、どんなに長くても三年間だけであるはずの臍。

「だって、……あり得ないよ、そんなこと！」

喉の奥に詰まった痼りを吐き出そうとするように、ルーは言った。まるで、そうすることで、目の前の現実を変えられると信じているかのように。

「ボク等、もう十三なんだよ。この年までアジュでいるなんて、ぜったいにあり得ない！　ボクらは命を繋いでいかなきゃならないんだ。ルリアの民なら……」

そこまで言って、自らの発言から手繰り寄せた結論に自ら驚愕し、ゆっくりと息を呑む。

「まさか、リオ、君……」

最後、ルーの口から零れてしまった言葉を押し戻したくて、アルフは何事もなかったかのようにリオの軀をタオルと毛布でぐるぐる巻きにし、その上から強く擦った。

ルーが何か話しかけてきたけれど、聞こえない振りをした。

……聞きたくなかった。

彼が言いたいことはわかっていた。

性別を持たない種族など、他にいるはずがない。

雲の糸と太陽の光から産まれる異世界の民。……天使。

しかし、それを認めることは、この世界でのリオの存在自体を否定することになってしまう。

天上界とルリアは相互不干渉が原則なのだから。

ルーに背を向けたまま、アルフはただ黙々とリオの軀を温め続けた。

リオは暫し不思議そうに二人の顔を交互に見遣っていたが、ふとその視線が二人の背後でピタリと止まった。

「こんなことが……。私が最も恐れていたことが、現実になってしまったとは……」

この場にいるはずのない、予想外の声。

二人は弾かれたように、同時に振り返った。

そこには、純白の衣装に身を包み、たっぷりとした純白の口髭を

蓄えた長身の老人が独り、ポツンと佇んでいた。

最初に動いたのはアルフだった。

毛布にくるまれたリオを老人の視界から隠すように軀を滑り込ませ、彼を背に庇う。

「……なんだ、あんた」

言い捨て、一時の凝視の後、あっと気付いて肩の力が抜けた。

いつもの黒服ではなかったから判断が遅れたが、眉の奥から覗く穏やかで優しい瞳は、見間違えようがない。

すかさずルーが老人の許に駆け寄った。

「校長先生、リオが、……リオを助けて！」

腕にしがみつくルーの髪を片手でそっと撫でながら、校長先生は暫くの間、リオをじっと凝視していがた、一つ大きな溜息を吐いた後、首を横に数度振り動かすと、目頭を抑えて俯いた。

「奴等に捕まってしまったのですね、リオ」

独白のような先生の呟きを、アルフは聞き逃しはしなかった。奴等？ 奴等って誰だ？ 先生は何か知っているのか？

一步脚を踏みだしかけたが、今度はルーの方が早かった。

「奴等って……？ 先生、奴等って誰のこと？」

必死に問うルーの髪を撫でながら、しかし、先生の視線はリオから一瞬も離れることはなかった。

「リオ。そこは冷たくて暗いですか？ ……可哀想に」

先生の掌がリオに向かって翳された。

その瞬間、今までボンヤリと濁っていた翡翠の瞳から、大粒の涙が溢れ出し、次々とリオの頬を伝って流れ落ちはじめた。

これまでになかったことだ。

「リオ？」

アルフはリオの両肩を握り、彼の軀を前後に揺すった。

「リオ、俺がわかるか？ リオ！」

だが、翡翠の瞳はポロポロと涙を落としてはしても、それ以上の反応が返ってくることはなかった。

「どうしたんだよ、リオ！ 返事しろよ！」

それでも繰り返し呼び続けるアルフの肩を、温もりがそっと包み込んだ。

「残念ですが、戻ったわけではありません」

視線だけで振り返ると、肩に置かれた大きな手、そしてその先には校長先生の空色の瞳が哀しげに揺れていた。

「今のリオは、生まれたばかりの子供のような存在です。護ってやりなさい。そして、リオが伝えたくて伝えられなかった心の奥の奥に眠る彼自身を見守っておあげなさい。今、君達に出来ることは、それだけです」

悔しかった。

今の自分には何もできないのだと、そう断言されたことが悔しくて、……情けなかった。

だからこそ、素直に認めることだけはしたくなかった。

「あんた、何を知っている？」

ガキの悪足掻きだとわかってはいたが、アルフは校長先生ににじり寄った。

眉根と共に顰められた低音に込める怒りの矛先を向ける相手が違うことくらい、充分に認識していたけれど。

そして校長先生は、そんなアルフの思いの全てを見透かしているかのように、子供をなだめすかす口調で言った。

先生の顔には、既にいつもの穏やかな笑みが戻っていた。

「君の知らないことを少しばかり……」

カッとして、アルフは先生の襟元に飛びついた。

驚いたルーが制止しようとアルフの腕にしがみついたが、そのぐらいで引き剥がされはしない。

襟元をねじり上げ、噛みつくように叫んだ。

「アジュって、いったいどういうことだ！ アンタ、知ってるんだろう？ あいつの周りで、……俺達の周りで、いったい何が起きてるんだ！」

「アジュとはどういう存在か、君だとして知らぬわけではないでしょう？　ならば、その問への答えは、君自身の中に既に用意されているではありませんか？」

襟首に取り付いたままの腕を振り払おうともせず、先生は答えた。短くて的確で、それ故に冷たい言葉。

「じゃあ、本当に……？」

うわごとのようにルーが呟く。

先生は静かに頷いた。

決定的だ。

上り詰めた血が一気に足許まで落ちて行くような感覚を覚えたアルフだったが、膝から倒れそうになる両脚を踏ん張って堪えた。

「そんなの、俺は何も聴いてない！」

「アル！」

抑えようと絡みつくルーの腕を、アルフは少し乱暴に払い除けた。自分勝手な言い分だとわかってはいたけれど、反発の言葉を口にせずにはいられなかった。

なぜなら、今、それを認めたなら、それ以上のことも認めなくてはならなくなるのだから。

「あんた、何も知らないくせに！　あいつが俺に、……俺達に、隠し事なんかするわけがないんだ！　俺達、約束したんだ！　絶対に隠し事はしないって。なのに……！」

「落ち着きなさい、アルフ！」

かつて耳にしたことのない校長先生の鋭い声音が森に響く。

「何もわかっていないのは、君のほうではありませんか？」

「……っんだと！」

頬が朱を帯びるのが自分でもわかったが、湧き上がる感情が抑えられない。

「あんた等大人は、いつだってそうだ！　みんな、知ったふうな顔しやがって、そのくせ俺達には何も教えてくれないんだ！」

「待っていても真実は手に入りはしない。子供だからという言い訳

で自分を正当化しようとするなら、君はずっと、大切な友を護るこ
とさえ出来ぬままに、無知という迷路の中で迷い続けているしかあ
りませんよ」

先生の表情はいつもと同じで優しく、けれど、どこか突き放すよ
うな冷たさがあった。

アルフは両掌をきつく握りしめた。

自分はただ待っていたわけじゃない！

そう反論したいのに、別の自分が問い掛けてくる。

なら、いったい俺に何ができた？

リオを護れなかった事実は、言葉の上塗りだけで消し去れはしな
いじゃないか。

情けないけれど、唇を噛むことだけが、今の自分にできる精一杯
の抵抗だった。

第5章 困惑 No. 4 (前書き)

「翡翠の鳥は飛び方をしらなくて」は「LURIA」は「翡翠の瞳
空の蒼」の続編です。

第5章 困惑 No. 4

◇◇◇ 第五章 困惑 ◇◇◇ No. 4

先生の言葉が、そんなアルフに更に追い打ちをかける。

「どうしました？ 反論の言葉は、それっぽっちで尽きてしまったのですか？ それとも……」 僅かな沈黙の後に続いた言葉は、アルフの鼓膜に突き刺さった。

「それとも、諦めましたか？ 君には何も出来ぬことを認めましたか？ ならば、リオを置き、黙ってこの場を去りなさい。もう一緒には暮らせないでしょう？」

瞬間、アルフの体はビクリと震えた。

『もう一緒に暮らせない』

一番考えたくない、しかし本当は、一番に考えてしまったこと。その通りだ、と理性が告げている。

異界の民と暮らすことなど出来るのか？

同じ世界の中でさえ、部族が異なると言うだけで、蔑み合い、憎しみ合い、時には闘うことさえあるというのに。

ましてや天上人など。

でも、それでも……。

「……関係ない！」

つぶれそうな胸を、固まる喉を、痺れる唇を奮い立たせる。

「リオがアジュだって、……何者だって、そんなこと、俺達には関係ない！ リオはリオだ！」

言葉として吐き出したことで、揺らぎそうだったその思いが、再び確固たる強さを孕んだ。

「そうだよ！」

アルフの背を押すように、ルーの同意の声は強い。

そんな二人を見つめる校長先生の視線は、更に疑うように顰められた。

「本当に？ 異界の民に対する恐怖は、人誰しもが持つ自衛本能なのですよ。それを認めたからといって、誰も君達を責めたりはしない。なのに、それでも、……その事実を知りながら、この先ずっと共に暮らすことができるというのですか？」

「当たり前だ！ 俺を、……俺達を見くびるな！」

二人、視線を交わし頷き合い、リオの両脇に戻ると彼を背後から支えた。

その様子を、暫し無言で見つめていた校長先生の視線が、ふっと弛んだ。

「強い瞳ですね。強くて頑なで、そしてとても清々しい」

片膝を地面について軀を折ると、大きくて温かな手が二人の肩をそっと叩いた。

「信じましょう、君を。……否、君達の友情を」

同じ目線の高さにある空の青が、揺らぐことなく真っ直ぐに、優しく包み込むようにそこにある。

それだけで、さっきまでは今にも萎えてしまいそうだった心に、鋼の強さが漲るのがわかる。

「君達の決意の強さを知りたくて、試すようなことをしてしまいました。許して下さいね」

肩に置かれた手に力がこもる。

「ただ、わかってあげて下さい。隠したくて隠していたわけではない。言いたくても言えなかった。そんなリオの気持ち。君達なら、きっとわかってあげられるはずです」

漆黒の瞳で、眼の前の大空を見つめ返したまま、アルフは小さく、けれど強く頷いた。

その隣で、ルーが先生の白い袖を微かに引いた。

「ねえ、先生」

ブルーの視線がゆっくりと移動する。

ルーはひどく戸惑いながら訊いた。

その手は、リオの腕をしっかりと掴んでいた。

「リオは、帰っちゃったんですか？ 天使だから、僕等を置いて天上界に帰っちゃったんですか？」

青の瞳がスッと笑みの形に細められた。

「大切な友達である君達に何も言わずに？ こんなにも心配をさせて？ ルー、君は本当にそう思うのですか？」

「……うん」

「そうですね。そんなことは有り得ない」

先生は深い溜息を一つ吐くと、柔らかな草の椅子の上にゆつくりと腰を下ろした。

先ほどまでは、ただの枯れた草原が広がっていた場所に、いつの間にか現れた低い椅子。

けれど、アルフもルーも驚きはしなかった。

いまだ三人を暖めるには充分な炎を蓄えたままの焚き火をじっと凝視したまま、先生は独り言のように呟いた。

「リオの心は捕らえられてしまいました。決して逃れることのできない天の牢獄に」

「どうしてですか？」

「天上界という特異な世界に蠢く様々な感情と、くだらない掟ゆえに」

それきり先生は黙り込んでしまった。

何を考えているのか、その横顔から推し量ることは、アルフには出来なかった。

「どうすればいい？」

しびれを切らし、アルフが沈黙を破った。

「どうすれば、リオを助けられる？」

それでも先生は暫し何事かを思案していたが、やがて首を横に振った。

「君達の、……いいえ、君達だけではない、ルリアの民の力では、

「どうすることも出来ません」

「先生、それじゃ……」

ルーが不安げに問う。

けれど、彼が先を続けるまえに、アルフは、ともすれば倒れてしまいそうなりオの軀をルーに預け、先生ににじり寄った。

訊かずにはいられなかったのだ。

「そんな建前、どうでもいい。あんた、何か知ってるんだろう？」

どうすればリオを助けられるのか、それだけを教えてくれよ」

先生の窪んだ眼が、鋭くアルフを捕らえた。

だがそれは、すぐにいつもの優しい光を纏うと、喉の奥で小さく笑った。

「どんな状況でも、常に挑み掛かっていく気概。それはそれで素晴らしいことですが、人に頼み事をする時は、もう少し謙虚にならなくてはいいじゃないね」

「冗談言ってる場合じゃないんだ！ どうしたらいい？ どうしたらリオを助けられる？ 頼む、教えてくれよ！」

アルフは今にも掴み掛からんばかりに、更に距離を詰めた。

「俺はそのためにならどうなったっていい！ リオを助けられるなら、命だってくれてやる！ だから、教えてくれ！」

「それでは困ります」

「何？」

「リオを助ける代わりに、君に死なれては困ると言っているんです」

「何だと！」

「アル、もう止めて！」

二人の遣り取りを見守っていたルーが、堪えきれずにアルフを制した。

「命なんかいらなくて、何でそんなこと言うの？ リオが戻ってきた時、君がいなくなったら、そんなのリオが喜ぶわけじゃないじゃないか！」

校長先生が深い息を吐きながら首を数度横に振った。

「そんなことをしたら、次はリオとルーの二人に、アルフを助ける方法はないのかと責められてしまいます。こんなことは一度きりで勘弁願いたいものですね」

アルフは唇を噛んだ。

自分の命を惜しむ気持ちなど欠片も沸いてはこないが、感情的になりすぎた。

命云々の話は、確かに今この場で口にすべきことではなかったと反省したのだ。

一歩後退り、腰を折って頭を垂れた。

「……済みませんでした」

「いいえ。わかってもらえたのなら、それで結構です」

先生は口角を僅かに上げた。

「私は確かに、君達には出来ないと言いました。けれど、リオを助けることが出来ないと言った覚えはありませんよ。人の話は最後までよく聴くものです」

瞬間、ルーとアルフの瞳がパツと輝いた。

「校長先生、それじゃ……!」

先生が大きな頷きで答える。

「リオの心は天上界のどこかに幽閉されているはずです。助けるには、そこから解放しなければなりません。そしてそれは、私の役目です」

「役目……?」

「……です、か?」

訝しむ二つの声音が重なる。

先生は優しく微笑んだ。

「君達には内緒にしましたが、私は以前、リオと約束したので。私から彼に、彼の過去を伝えたその日に。そして、彼がルリアに残ることを決めたその日に、私は彼と約束しました。私はリオの判断を尊重し、この後、天上界の意志によってリオにもたらされるであろうあらゆる苦境、苦難から、私が必ず護ると。……少しばかり

り遅くなってしまうましたがね」

白い髭に覆われた口許に、今まで見たこともない哀しげな笑みが浮かんだことを、その時、アルフは見逃さなかった。

「まさか……」

そしてルーも気付いたらしい。アルフの言葉を引き継ぐ。

「先生は天上界へ行く方法を知ってるんですか？　なら……」

「それなら、お願いします！　俺も連れて行ってください！」

だが、校長先生の返事は短く、端的だった。

「残念ながら、それは出来ません」

「校長先生！」

「どうしてですか！」

先生は椅子から腰を上げ、一步近付いて二人の肩に手を置くと、それぞれの顔を交互に見遣りつつ、噛んで含めるようにゆっくりと言った。

「アルフ、ルー。私を信じてください。私の全身全霊を賭けて、約束は必ずや果たしましょう。その代わり、アルフ、君も私に約束してください」

空色の視線がアルフの上で止まった。

アルフは少し困惑気味に先生の顔を斜めに見上げた。

「……はい」

「真実を知ることが畏れないのなら、進みなさい。畏れるのなら今のまま、現状に立ち止まったままでもいい。けれど、その状況を他人のせいにしてはいけません。わかりますね？」

少し間を置いて頷くと、まだ湿気を含んだままの漆黒の前髪が揺れた。

「知りたければ、自分から行動しなさい。リオはそうしましたよ。悩んだ時、困った時には、出発点に戻りなさい。必ずや、かつては見えなかった新しい何かを知り得るはずですよ」

瞬間、校長先生の周りに突風が湧き起こり、純白のは搔き消されるようにフツと消えた。

先生が消えた場所を凝視したまま、アルフは口を真一文字に結び、暫くの間ピクリとも動かなかった。

「大丈夫、だよな？ 先生が約束してくれたんだもの。きっと、リオはすぐに戻ってこられるよね？」

自分自身にそう言い聞かせながら、ルーはそつとアルフの顔を覗き見た。

まだ水を含んだ艶やか黒髪の奥で、その表情が徐々に歪んでいく。今にも泣き出しそうだ。

不安に駆られ、彼の服の裾をそつと引っ張った。

「ねえ、アル。どうしたの？ どうしてそんな顔してるの？」

「……なんでもない。帰るぞ」

ルーの不安を、リオの苦しみを、そして何より、彼の中に渦巻く憤りを吹き飛ばそうとするかのように強く言うと、アルフは毛布ごとリオの軀を抱き上げ、丸太の我が家へと向けて歩き出した。

広い背を追って小走りに駆け出しながら、ルーはアルフの歩みを凝視した。

厳しい冬の訪れを、その両脚で確認するように、一步一步ゆつくりと、踏みしめるように歩く背中。

そこにうら寂しさを感じながらも、ルーはその背中に掛ける言葉を見つることができなかった。

第5章 困惑 No. 4 (後書き)

次回予告…リオを取り戻すため、アルフが下した決断とは？

「翡翠の鳥は飛び方を知らなくて」は、原則として週一回更新します。

次回更新(予定)日は1月26日(金)！

宜しく願います！！ 次回予告…

第6章 決断 No. 1 (前書き)

「翡翠の鳥は飛び方を知らなくて」は「LURIA」は「翡翠の瞳
空の蒼」の続編です。

第6章 決断 No. 1

◇◇◇ 第六章 決断 ◇◇◇ No. 1

出口の見えない暗闇が、こんなにも恐ろしいものだなんて思わなかった。

『リオは私が必ず救い出しましょう』

確証のない、それでも縋らずにはいられない校長先生との約束から、既に一月が過ぎていた。

雪が舞い踊り、全てを純白に染め上げる季節。

それは、とても美しい光景。白銀に輝く世界だ。

雪は全てを覆い隠す。まるで始めから何もなかったかのように。

この季節と同じように、想い出なんて全て塗り替えてしまえばいい。

そうすれば、哀しも苦しみも、全部なくなってしまいうのに。

それでも、この場所が、かつては光り輝く緑に覆われていたのだと知っているボク等は、光の季節を思い出さずにはられない。

だからだろうか、白銀が眼に染みて、酷く哀しくなってしまうのは……。

※

校長先生の言葉に対する期待度の差なのだろうか、それとも元々の楽観的性格故か、ある意味、良くも悪くも開き直った感のあるルイに対し、リオはすぐにも戻ってくるものと信じて疑わなかったアルフの絶望は、日増しに色濃くなっていった。

「ちきしょう！ まだなのかよ！」

言いしな両掌でテーブルを強く叩く。

木製の食器が大きく揺れ、スプーンが床に転がり落ちた。

けれど、同じテーブルに着いているルーは驚く素振りさえ見せない。

「大丈夫、もうすぐさ。きつと、もうすぐだよ」

あやすように言い、千切ったパンを口に放り込む。

アルフは反論の言葉を吐こうと数度パクパクと口を動かすが、唇をへの字に曲げると黙ってスプーンを拾った。

こんな遣り取りが、今ではすっかり二人の日課となってしまった。無論、ルーだとして平気なわけではない。

木枯らしが窓を叩くたび、小鳥達の羽ばたきを耳にするたび、校長先生から何らかの連絡が届いたのではないかと庭に飛び出し、そしてそのたび、そこに何もなかったことを確認して落胆する日々を送っているのだ。

今だって、食事に集中する振りをして苛つくアルフを宥めながら、ざわつく気持ちを必死で抑えていた。

無理をして笑みを創ってはいいるが、それは、今にも崩れてしまいそうになる自分自身への戒め。

そうしていなければ、過去も含めて全てを失ってしまいそうで、それが一番怖かったから。

待つこと以外何もできない無力な自分。

しかし、だからといって弱気になってどうする？

何もできないなら、せめて信じ続けよう。

リオは必ず戻ってくると、以前と同じように笑いあえる日々が戻ってくるのだと、そう信じよう。

そして、リオが戻ってきた時、彼が『彼』でなかった時間など始めから存在しなかったかのように、空白の時間など罅割れ一つ残すことなく綺麗に埋めてしまえるように、悪い夢を見て目覚めた朝のように、眠りに就く前と何ら変わらない『いつもの日常』を崩さずに積み上げていこう。

そのためには、少しくらい無理をして、心を偽って笑みを創る

くらいわけのないこと。

そう心に決めたのだ。

その思いは、きつとアルフも同じはず。

ただ、自己防衛の方法がルーとは異なるだけなのだ。

声を荒げ、激情することでしたか自分を保てない、そんな脆い一面が、今回のことで浮き彫りになっただけなのだ。

学校もすっかり休みがちになり、一日中、リオに付き添っている。その様は、ルーが見ていてさえ痛々しい。

このままでは、リオが戻ってくる前にアルフの方が参ってしまう。

「アル」

立ち上がり、黒髪の友の肩にそっと手を添えた。

「大丈夫だよ。校長先生が約束してくれたでしょう？　リオはきつと帰ってくる。きつともうすぐだよ。だから、待っていよう。ね？」きつと。もうすぐ。

言葉は空しく壁に響く。

何度も繰り返し、そして、繰り返すたびに重みを失っていく言葉。それがわかっていても、縋るように繰り返さずにはいられない言葉。

それは同時に、ルー自身が己に言い聞かせるための言葉でもあった。

次いで、いつもの通り軽く身構える。

いつ戻るんだ？　もうすぐって、一体いつなんだ！

アルフにそう訊かれ、曖昧に言い訳するのも、もう慣れた。けれど……。

今日のアルフは、様子が違っていた。

ゆっくりとルーに向けられた漆黒の瞳の奥に挑むような輝きがある。

ルーは訝しむように眉根を寄せた。

「……なあ、ルー」

「なあに？」

さり気なく、務めて明るく答える。

アルフは暫し躊躇った後、困惑を振り切るように言った。

「暫くの間、こいつのこと、任せてもいいか？」

一瞬、その言葉の意味するところがわからず、ルーは数度眼を瞬かせたが、すぐに学校に行っている間のことを指してるのだろうと推測し、コクリと頷いた。

「うん、大丈夫。行ってきてよ、学校。リオのことなら、いつもどおり、ボクがちゃんと……」

だが、ルーの言葉が終わるのを待たず、アルフは首を横に振った。

「村に、行ってこようと……、思うんだ」

村。

アルフの生まれた、村……？

「村、って……？」

「二、三日で戻ってくる」

問うというよりは、結論だけを伝える口調。

カッとした。

突然、何を言い出すのかと思えば、あんまり自分勝手じゃないか？

酷すぎるよ！

リオがこんな時に！

「どう、して……？」

必死に抑えたけれど、恐らく、声音に滲んだ非難。

それを察しているだろうアルフは、前屈みに背を丸めて指を組むと、その中に顎を埋めた。

「今、リオの傍にいても、俺にしてやれることなんてなにもない」「アル！」

「俺、ずっと考えてた。あの時、校長先生に言われた言葉。真実が知りたければ、原点に戻れ。それがどういう意味なのか、俺、わからなくてさ、ずっと考えてた。未だに、先生が何を言おうとしていたのかなんてわからない。でも、一つだけ気付いたことがあるんだ。

俺の原点は、あの村だ。俺を拾ってくれた両親がいて、幼い時期を過ごした小人族の村。今は何もわからなくても、あそこに行けば、何かがわかるかもしれない。だから、行く。俺はこれ以上、待てるだけなんて嫌なんだよ」

いつも以上に低い声音が、凍える隙間風と一緒に生ぬるく澱んだ空気を掻き回していく。

それは、納得のできない現状すらも失ってしまうことを恐れ、手を止め、脚を止め、呼吸さえも止めようとしていたルーの心に、一筋の風穴を開ける突風であった。

第6章 決断 No. 1 (後書き)

次回予告…村へ戻ったアルフ。そこで彼が見たものとは？

「翡翠の鳥は飛び方を知らなくて」は、原則として週一回更新します。

次回更新(予定)日は2月2日(金)！

宜しく願います！！

第6章 決断 No. 2 (前書き)

「翡翠の鳥は飛び方を知らなくて」は、
「LURIA」は、
「翡翠の瞳
空の蒼」の続編です。

第6章 決断 No. 2

◇◇◇ 第六章 ◇◇◇ 決断 ◇◇◇ No. 2

出発は翌日の早朝を選んだ。

朝食を食べ、お茶を飲んで、緩やかで温かな日常の繰り返しの中に再び埋没してしまったら、せつかくの決断が鈍ってしまいそうで怖かったからだ。

家の前に佇み、唇を噛んでじっとこちらを凝視したままのルーと、その隣りでボンヤリと空を見上げているリオを残して家を留守にすることに不安がないといえは嘘になるが、今はルーを信じて任せるしかないと自身に言い聞かせ、杖に飛び乗った。

振り返らなかった。自分の弱さは嫌というほど知り抜いている。また直ぐに逢える。そう心の中で繰り返し、そのたびに胸が詰まりそうになりながらも、決して振り返りはしなかった。

カナンの大木の横を過ぎ去り、鏡の泉を右手に見て暫く飛んだ、その時だった。

突然、眼の前を人影が横切った。

まだ太陽さえ地平線から顔を出していないこの時間、人に逢うことなど予想だにしていなかったアルフは、衝突を避けるため反射的に杖を空に向けた。

同時に自分は杖から飛び降りたが、その躰は森の柔らかい土の上を二回転してやっと止まった。

「痛っ……！」

無意識にうめきつつ、地面に撃ちつけた肩を庇うようにして起き上がると直ぐに、危なく衝突しかけた相手を探した。

直前でなんとか避けられたと思うが、確かめるまでは安心できない

い。

周囲を見回すと、蹲る背中是一直に見付かった。

「大丈夫ですか！」

駆け寄り、そう声をかけると、相手は俯きながらもしつかりと答えた。

「大丈夫です。ごめんなさい、ボンヤリしてました」

声の様子から、大事には至っていないさそうだと推測できた。

その場に座り込み、アルフはやっと安堵の溜息を吐いた。

その時。

「……アルフ？」

突然、名を呼ばれた。

反射的に顔を上げ、相手の顔を凝視する。

長い栗色の巻き毛に華奢な髭つき。

……女。

確かに見覚えのある顔。

しかし、名前が出てこない。

「お前……」

眉根を寄せ言い淀んでいると、相手は肩を竦めて小さく笑った。

「メリーよ。メリー・ルーシー」

「ああ……」

鏡の泉の娘か。それだけ認識して曖昧に頷く。

「悪い。怪我、なかったか？」

「平気。私の方こそごめんなさい。ボンヤリしてて」

「こんな時間に、こんなところで何してるんだ」

「散歩。好きなよ、冬の朝って」

メリーは長い髪を掻き揚げ、上目遣いでアルフを見つめた。

微かに頬が上気している。

だが、アルフはいえ、（朝といっても、早すぎるだろう）な
どと内心で思いつつも口には出さず、服に付いた枯れ葉を払い落
した。

相手に怪我がなかったことだけ確認できれば、それ以上、この場で時間を無駄にするつもりはなかったのだ。

一刻も早く目的地に行かなくては！

そのことで気持ちが急いていた。

「それじゃ……」

言い置いて立ち去ろうと踵を返した瞬間、メリーに腕を掴まれた。

「ねえ、リオに何かあったの？」

突然の問い。ドキリとした。振り返ると、メリーの顔が間近にある。

それを睨むように凝視してしまっていることに、彼女の困惑の表情で気付いたアルフは、視線を逸らして平静を装った。

「なんのことだ？」

「彼、ずっと休んでるし、貴方もルーも、彼の話になるとすごく不機嫌になって、話題を逸らそうとするから、きつとリオに何かあったんじゃないかって、学校でも、みんな噂してるのよ」

メリーはアルフの腕を掴む指先に力を込め、更に顔を近付けてきた。

「ねえ、何があったんでしよう？ 相談してみて。私達だって力になれるかもしれないじゃない」

アルフは再びメリーを見た。真っ直ぐな瞳だった。

真綿に包まれ、美しいものだけを見て育った瞳。

疑うことを知らず、誰かを裏切ったり裏切られたり、そんな汚れた世界を映したことなどないのだろう、澄んだ瞳。

不思議だった。

一見、アルフとさほど変わらない年格好の少女。

しかし、少なくともアルフの倍は生きているはずの彼女は、自分の周囲にある美しい世界が、真に世界の全てだと信じているのだろうか？

なんの疑問も持たず、その先に広がっているだろう外の世界を見ようともせずには？

どうしてそんな気持ちになったのか、アルフ自身、わからない。
しかし、なぜか無性に訊いてみたくなった。

「どうして……？ どうして、そんなことを言う？」

突然のアルフの問いは、メリーには予想外だったらしい。

「だって……」

一瞬だけ言い淀み、数度、眼を瞬かせた。

「私達、同じ学校の生徒だし、……友達、でしょう？ 友達が困っている時に助け合うのは当たり前じゃない」

「友達って、なんだ？」

「え？」

「お前が言う友達って、いったいなんだ？」

「だから、困った時には相談しあったり、助け合ったり……」

「そうやって、自分の中の嫌な気持ちや不満とかを押し付け合って、慰め合って、庇い合うのが友達なのか？」

「そんな……」

瞬間、メリーの頬が紅潮し、目尻が少し釣り上がった。

声が半オクターブ跳ね上がる。

「どうしてなの？ どうして貴方達は、いつもそんな言い方ばかりするの？ どうして三人だけで孤立しようとするの？ 他に親しい友達も作ろうとせずに。おかしいわよ！」

「俺には、奴等がいれば充分だ。他に友達なんて必要ない」

「だから、どうして？」

女の子とは変なところで意固地になるものらしい。

しかも、ルー曰く、養成学校一可愛いと評判の女の子も、怒った顔は決して可愛くはないものだ。

ひどく冷静に、そんなことを分析しつつ、アルフはさっき空へ飛ばしてしまった杖を探して周囲を見回した。

そして、メリーにはそれが我慢ならなかったらしい。

「アルフ、ちゃんと話を聞いて、答えて！ どうしてなの？」
更ににじり寄ってくる。

アルフはやむなく一步後退り、訝しむ視線でメリーを見返した。
正直、彼女の質問の意図がわからなかった。

「リオとルーは、俺の家族だからだ」

そんなの決まってる。

今更問われるなんて心外だ。

語調には、アルフのそんな想いがはっきりと滲んでいたはずだ。

メリーの形の良い口許がキュッと結ばれ、次いでそれは、今まで以上に強い調子で言葉を発した。

「家族、家族っていうけど、貴方達のはただの家族ごっこでしょう？ 家族は血の繋がりがあってこそ……」

そこまで言うてから、ハッとしたように口許を抑えた。

慌ててアルフの腕を離し俯く。

「……ごめんなさい」

アルフは一つ大きく溜息を吐くと、頭上まで広げられた木の梢の間に引っ掛かっていた杖に向かって腕を翳した。

瞬間、杖はまるで自ら意志を持っているかのように枝の間を器用に擦りぬけ、アルフの掌の中にすっぽりと治まった。

「俺に、……俺達三人に親がいないのは事実だ。でも、そんな俺達が家族を持ちたいと思うのはおかしいか？」

アルフが返事をしたことに気をよくしてか、メリーは汚名挽回とばかりに勢い込んで言った。

「そりゃ、家族は大切だわ。でも、私達は大人になって、家族から自立して、新しい、自分だけの家族を作らなければならないのよ。それが命を繋ぐってことでしょう？ いつまでも家族にしがみ付いてるなんて変だし、不可能よ」

「お前には、わからないんだ。すごく温かい家族の中で育ったお前には。今まで不変だと信じていた世界が突然崩れ去る恐怖とか、突然独りぼっちにされるってことが、どれ位不安なことなのか、とか。お前にはわからないんだ」

杖に視線を注いだまま、アルフは言った。

ぐつと答えに詰まったメリーが、拗ねたように唇を窄める。

その横顔に黄金色の朝日が降りかかった。

もうこれ以上、こんな下らない話に拘わっている時間はない。

アルフは杖の上にヒラリと飛び乗ると、真っ直ぐ前に視線を据えて低く言った。

「とにかく、俺達のことには首を突っ込まないでくれ。……迷惑だ」

それだけを言い置き、一気に加速して上空へ。

またルーに文句を言われるな。

一瞬、そんな考えが脳裏を掠め、森を見下ろす朝焼けの空を疾走するアルフの口許に、苦笑いが零れた。

第6章 決断 No. 2 (後書き)

次回予告…村へ戻ったアルフ。そこで彼が見たものとは？

「翡翠の鳥は飛び方を知らなくて」は、原則として週一回更新します。

次回更新(予定)日は2月8日(木)！

宜しく願います！！

第7章 天上界 No. 1 (前書き)

「翡翠の鳥は飛び方を知らなくて」は「LURIA」の翡翠の瞳の蒼」の続編です。

第7章 天上界 No. 1

◇◇◇ 第七章 天上界 ◇◇◇ No. 1

その日、天上界は数百年ぶりに平穏を乱された。

それは、一人の天使の来訪によりもたらされた、僅かな空気の揺らぎのような動揺であった。

艶やかで象徴的な三対の金色の翼。

月の光の如く輝く銀色の髪。

そして何より、彼の頭上を照らす三重の光輪により、来訪者が大天使を凌ぐ上級天使、天上界でも最高級の地位に奉ぜられる聖天使であることは明らかだった。

世界の創世から今日まで、たった四人にしか与えられたことのない最高級位。

そして現在、その地位により天上界の実質上の指導者として君臨するのは、二人のみ。

残る二名の地位は空席となって久しい。

そこに現れた一人の聖天使の姿は、若い下級天使達にとっては、肖像画でしか眼にしたことのない高貴な姿であった。

来訪者は、遠巻きにざわつく下級天使達には眼もくれず、天宮の園への門扉を守る門番に一瞥をくれると、翼を一振り羽ばたかせ、庭園の中へフワリと入っていった。

門番は、己の役割を果たすどころか、声をかけることすらできず、彫像のように硬直したまま、金の背中を見送った。

純白の絨毯、七色に輝く光の粉を撒き散らしたようにキラキラと輝く雲の平原を、来訪者は文字通り飛ぶように駆け抜ける。

下級天使達の噂を聞き付けたのだろう、来訪者の姿を目敏く探し出した二人の大天使が、にこやかな、しかし微かに硬い笑みを浮か

べて駆け寄ってきたかと思うと、その足許に仰々しく跪いた。

「お懐かしゅうございます、ケルビム様！ 貴方様のお戻りを、今か今かとお待ち申し上げておりました！」

「お部屋は、お暮らしになっていらした当時のまま、日々磨き上げておりました。ささ、早速ご案内致しましょう」

来訪者ケルビムは、彼等を見定めるや歩みを停めた。

けれど、優美な唇が紡いだ言葉は、その穏やかで優美な外見からは想像もできぬほどに厳しいものであった。

そこに懐かしさや労りなど、欠片も感じられなかった。

「私への気遣いならば無用。それよりも、ミカエル、ラファエル、私は貴方達を見損ないましたよ。気概のある若者と、かつては眼をかけてきたつもりでしたが、このたびの所業、なんたることですか！ さあ、リオを、……貴方達がルリアの地から無理やりに奪い去ってきた少年を、今すぐ彼の地にお戻しなさい！」

二人の大天使は戦きつつも、己の役目を全うすべく言い訳の言葉を並べた。

「いかなケルビム様のお言葉でも、それはできません！」

「それでは天上界の規律に反します！ 下の者にも示しが付きませぬ！」

しかし、宥めるべく発せられた二人の言葉がケルビムの怒りに火を付けた。

それまでなんとか平静を保っていた語調が荒ぶる。

「何が規律ですか！ 貴方達が自らの保身のために創り上げた規則など、あっても邪魔なだけ！ いっそ捨てておしまいなさい！」

二人の天使は落雷に打たれたかの如くすっかり怯え、翼で顔を隠しながら一歩後退った。

それでも必死の抵抗を試みるのは、大天使としての誇りゆえか。

「どうか、お静まりください、ケルビム様！ 天上人が一度為したことを簡単に違えられぬこと、ケルビム様とてご存知のはず！」

「ならばお聞かせなさい！」

外見からは想像出来ぬほどに冷たい物言いが、ケルビムの怒りの深さを表していた。

「生まれたばかりの彼を、なぜルリアに墮としたのですか！　かような無慈悲を為しておきながら、今更、手脚を奪うような真似をしてまで捕えるとは、全くもって彼の人格を無視した行為！　酷過ぎるとは思わぬのですか？　心を尊ばぬことこそが天上人として尤も恥ずべき行為であると、貴方達は、それすら忘れてしまったというのですか！」

二人の大天使も、さすがに返す言葉を失った。

お互いに目配せし合い黙り込む。

「さあ、リオをお返しなさい！」

ケルビムが一步躍り寄る。

と、その時だった。

「やあ。久しぶりに懐かしい顔が戻ってきたと聴き、逢いに来てみれば、さっそく雷か」

背後に掛けられた笑い声。

振り返れば、ケルビムと同じ姿形をした天使が一人、腕組みをして佇んでいた。

「お前の小言は俺でも怖い。やめておけ、やめておけ。若い者が怯えておるではないか」

「トロニ……」

久しぶりに口にする名だ。

「やっと、少しは話のわかる者が出てきてくれたようだね」

皮肉を込めてケルビムが言った。

似た二人だが、並んでみれば、ケルビムの瞳の色のほうが濃く、トロニの方が薄い。

そのせいか、微かに粗野な雰囲気を滲ませている。

トロニは視線で二人の天使を下がらせるとニヤリと笑った。

「旧友ではないか。お主が逢いたいと言ってくれれば、彼の地へだとして出向いてやったさ」

懐かしむように頬が弛み、抱き締めようと長い腕を伸ばす。

「久しぶりだな、ケルビム。お主がこの世界を捨て、はや三千年か。長いようで短いものだ」

しかし、そう声を掛けられた当人は、相変わらず硬い表情を崩すことはなかった。

差し出された腕をピシヤリと払い除ける。

「トロニ、暫く見ない間に、この世界も随分と様変わりしたようですね」

「おいおい、久しぶりだというに、友への再会の挨拶もなしか？相変わらず手厳しい奴だ」

「生憎、私は昔語りをするために、わざわざ此处まで参ったわけはありませんから」

ケルビムの視線が窺うように細められる。

「まさか、とは思いますが、リオ幽閉の指示を出したのは、貴方ではありませんまいな？」

「俺が？ まさか」

トロニは笑いながら肩を竦めた。

「俺は下界のことなどどうでもよい。……といっても、今、実務上の責任者は俺ということになっている。若い者の為したことに責任がないなどと言い逃れはできないよなあ」

「無論」

厳しい表情のまま頷くと、トロニは喉の奥で噛み殺したような笑い声を漏らした。

「で？ お主の望みは？」

直ぐに端的な問いが返ってくる。

相反する二人だが、回りくどい言い方をしないところは、昔からケルビムの好むところだ。

僅かに肩の力を抜き、ケルビムは言った。

「即刻、リオを解放し、ルリアに戻して戴きたい。彼になんの罪がある？ 元を正せば天上界側の落ち度ではないか。にもかかわらず、

己が非を認めるどころか、既に自我を持ち、意志を持つ子供を無理矢理連れ去って幽閉するなど、自分勝手も甚だしい。天上人としてあるまじき行為だと私は思いますが、如何？」

ケルビムの怒りの言葉を無言で聴いていたトロニの視線が微かに鋭くなった。

「それは、ルリアの年寄りとしての言葉か？　それとも、聖天使ケルビムとしてのものか？」

一瞬、言葉に詰まった。

この地を捨て去った身でありながら、出過ぎた言だということは自覚している。

しかし、ここで退くわけにはいかなかった。

「どちらでも、貴方のお気に召すままに解釈して戴いて結構。私は私。それ以上でも以下でもありません」

「相変わらず、訳のわからんことをぬかす奴だ」

そう独り言ちると、トロニはボリボリと頭を掻いた。

美しい外見とは不似合いなガサツな行為だが、しかし彼には妙に似合っていた。

薄い青の視線が再び和らぐ。

「よかろう。旧友として、お主の望み、叶えてやろうではないか」「本当ですか？」

ケルビムの顔に初めて笑みが浮かんだ。

トロニが頷く。

第7章 天上界 No. 1 (後書き)

次回予告…天上界での攻防。リオはどこに？

「翡翠の鳥は飛び方を知らなくて」は、原則として週一回更新します。

次回更新(予定)日は2月16日(金)！

宜しく願います！！

第7章 天上界 No. 2 (前書き)

「翡翠の鳥は飛び方を知らなくて」は「LURIA」の翡翠の瞳の蒼」の続編です。

第7章 天上界 No. 2

◇◇◇ 第七章 天上界 ◇◇◇ No. 2

「立ち話もなんだ。まあ、座らぬか」

言い終えぬうちに、彼の足許に小さな守護天使達が現れ、そそくさと、どこからともなく椅子とテーブルを運んできた。

トロニは確認することなく椅子に腰かけ、ケルビムにも座るよう手振りで示した。

「我々の再三の招きにも応じなかったお主が、こうして帰ってきたのだからな。そのくらいさせてもらう価値はあるさ」

「ありがとうございます、トロニ。感謝します」

「但し、条件がある」

花卉がほころぶようなケルビムの微笑みは、しかし、トロニの言葉により再び厳しいものへと一変した。

「取引ですか？ 天上界も、随分と人間臭くなったものですね」

「なんとでも言え」

トロニは吐き捨てるように言った。

己の言に、自身、嫌気がさしている様が、そこから垣間見られた。ケルビムは、その秀麗な眉を顰めたが、一考の後、言った。

「いいでしょう。条件とやらを聞かせて下さい。私に出来ることならば、なんでもいたしましょう」

すると今度はトロニが形の良い眉を寄せ眉間に皺を作った。

「わからんな。お主はなぜ、それほどまでに、あの子供を助けようとする？ お前とあの子供との間には何の関係もないだろうに」

ケルビムは小さく笑った。

「本当に貴方達は変わってしまった。まるで人間のように考え、ものを言う。いけませんね。損得を前提に物事を考えるなど、天上人

としては失格ですよ」

トロニの口許が歪んだ。

「自ら天使としての宿命を捨て、堕ちたお主から『天使失格』といわれるとはな」

「そう、天使として私は失格者です。だからこそ、例え感情に流されていると誹られようとも、リオを救いたい。昔救えなかった友の替わりに、なんとしても」

ケルビムは再度微かに笑った。

色濃い自嘲が宿っていることに、自身、気付きながらも。

トロニが大きく肩を揺らして息を吐く。

「ケルビムよ。お主の心はまだ『あの時』に縛られたままか」

色濃い青の視線が曇った。

「どうして友の死を忘れることなど出来ましょう。私は今でも毎夜思い出し、後悔に苛まれています。なぜあの時、私は彼のために何かをしてやる事が出来なかったのか。なぜ？ どうして？ ……その苦しみから解放されたことなど、三千年の間、一日たりとて有りはしませんでした」

「愚かだな」

「愚かで結構。それで友の願いを叶えることが出来るのならば、その謗り、甘んじてお受けいたしましょう」

始めは喉奥から漏れるくらいだったトロニの笑い声は、次第に大きくなった。

暫し笑った後、脚を組み、椅子の背にも垂れて、空を仰いだ。

雲を足許とするこの世界では、空は果てしなく、ただ青い。

「知識と学問の神であるケルビムの口から、そんな言葉が聴けるとはな。やはり、時は流れたようだ」

ボンヤリと天を仰いだまま独り言のように呟くと、反動をつけて姿勢を戻す。

「まあいい。あの子供を解放するための条件は二つ。一つはケルビム、お主が天上界に戻ることだ」

俄かにケルビムの表情が険しくなった。

それに気付いているであろうトロニは、前屈みに膝の上に肘をつき、畳み掛けるように言った。

「戻れ、ケルビム。今の天上界の状況が如何に厳しいものか、離れていたとはいえ、お主にならわかるだろう？ 神が天空宮に籠もられて早三千年。若い者達の中には、根拠もなく奢り高ぶり、自らの快樂のためだけに異世界に争いの種を撒き散らすバカ者まで出てくる始末だ。このままでよいはずがないのは俺だとしてわかってはいるが、隅々まで眼を光らせるには俺だけでは如何ともしがたい。天上界を、……否、この世界を変えるには、ケルビム、今こそお主の能力が必要なのだ」

何時も強気なトロニの口から、これほどまでに弱気の発言が飛び出すとは、正直、予想外だった。

天上界の乱れは、ケルビムが思っていた以上に深刻らしい。

故郷の大事に心が動かぬはずはない。しかし……。

ケルビムは口許に色濃い自嘲を滲ませると、ゆっくりと首を横に振った。

「私は自ら望んで下界に堕ちた者。そんな私が今更のこのこと戻るなど、それこそ天上界の規律に反しましょう」

「お主に非はない！」

トロニは椅子を蹴って身を乗り出した。

「お主が幾ら口を噤もうと、それくらいのこと、当時の者なら皆知っているぞ！ お主は、闇を生み出そうとする亜奴の行為を阻止しようとしただけのこと。それが出来なかったが故に、自らを責め、我等の制止を振り切って、亜奴を追って地に堕ちた。ただそれだけのことではないか！」

そこまで言い切ってハッと我に返ったらしく、トロニは誤魔化すように数度咳払いし、少し乱暴に椅子に腰掛けた。

先ほど倒れた椅子は、守護天使によっていつの間にかキチンと元に戻されていた

何時も強気ではあるが、感情を表に出すことのないトロニにしては珍しい激情に、彼の苦悩が思い遣られ、ケルビムは哀しくなったが、だからといって掛ける言葉も持ち合わせてはいない。

暫し漂った気まずい沈黙の後、いつもの冷静さを取り戻したトロニが再び口を開いた。

「責と言うなら、神が天空宮に御簞もりあそばしたこのの方が重大だ。お主は、亜奴と共に神のお氣に入りだったからな。あの事件で、亜奴ばかりかお主までも去ってしまったがゆえに、神は嘆かれ、誰にも逢おうとなさらなくなったのだ。神に天空宮からお出まし戴くためにも、お主には戻ってもらわねばならんのだ」

「随分と弱気な言ではないですか。貴方らしくないですね」

皮肉を込めて言ったが、トロニは何も答えない。

ケルビムは頬杖を付き、暫し考えを巡らしていたが、やがて真っ直ぐに友の顔を見詰めると、低く言った。

「わかりました。私が戻ることでリオを返していただけるのなら、私は喜んで貴方に従いましょう。しかし……」

そこで一つ深い溜息を吐く。

「しかし、一つだけ申し上げておきます。あの日の出来事について、私に非があるか否かなど、所詮は取るに足らぬこと。私は自分が許せない。知の天使などと謳われながら、私はあの時、考えなかった。友を救う術を考えると、このことを無意識に避けていた。そんな己が許せない。それは空にあらうと地にあらうと同じこと。過去と同じ私を期待されても、ご期待に添うことは出来ぬと思って頂きたい」

「構わぬさ。お主が真に果てる時、この世界も終るだろう。それだけのことだ」

青と青の瞳が交差する。

そこに微かな自暴の色を見て取り、ケルビムはそれ以上、言葉を重ねることをやめた。

粗野で無神経に見えるはしても、その内面は酷く繊細で感受性に富んでいることを、ケルビムは知っている。

今、天上界で彼が背負わされている責務も立場も、本来ならば彼が最も忌み嫌うはずのもの。

そんな彼を今の立場に追いやってしまったのは、他でもない自分なのだというくらいわからぬケルビムではなかった。

硬い表情を微かに和らげ、静かに問う。

「さて、条件は二つとのことでしたね。もう一つの条件とは？ 神に天空宮からお出ましいただくことは、残念ながらお約束できませんよ」

トロニは視線を伏せてニヤリと笑った。

「今、それができる者がいるとすれば、お主だけなのだがな。まあ良い。確信のない約束はしないのが、お主の主義だったな。ならば、それでいいさ」

続いて提示された第二の条件を聞き終えた時、ケルビムの頬は青ざめ、唇はワナワナと震えた。

第7章 天上界 No. 2 (後書き)

次回予告…囚われのリオ。彼に会ったケルビムは？

「翡翠の鳥は飛び方を知らなくて」は、原則として週一回更新します。

次回更新(予定)日は2月23日(金)！

宜しく願います！！

第7章 天上界 No. 3 (前書き)

「翡翠の鳥は飛び方を知らなくて」は「LURIA」の翡翠の瞳の蒼」の続編です。

第7章 天上界 No. 3

◇◇◇ 第七章 天上界 ◇◇◇ No. 3

目印は、夫婦櫨の太木。

もともとは、単に並んで伸びていただけの別々の樹が、なぜか幹の途中から接近し、絡み合い、ついには一本の太木となって大空へと枝葉を茂らせた大櫨だ。

その様は、人が生きる様を示しているようであり、お互いを支え合う夫婦の姿のようでもあるといって尊ばれている、自然が創り上げた門。

それが、シエン村への入り口なのだ。

シエン村。

森の奥の奥、小人族がひっそりと暮らす小さな村。

アルフの、……故郷。

ふと、暗く湿った感情が呼び覚まされた。

水底に沈んでいくかのような圧迫感を覚え、息苦しくなる。

理由は、……わかっていた。

未だに過去の自分と向き合うことが出来ない、己の弱さ故だ。

成長と共に顕著になっていく、小人族とは異なる身体的特徴に悩んだ幼少時代。

それにより、虐められ、蔑まれ、遠ざけられた日々。

ここには、そんな辛い思い出しかない。

けれど同時に、幼い自分を育んでくれた懐かしい丘や山もここにしかないのだ。

この場所には二度と戻らないと誓った夜、身を切られるような哀しみに一晩中泣き明かしたことを思い出すと、今でも胸がチリチリと痛む。

そんな弱い感情の断片を振り払いたくて、アルフは強く首を横に振った。

そんな動作くらいでは拭えないとわかってはいても、針に指されるような痛みを放置しておくよりはマシだと思った。

真っ直ぐに顔を上げる。

全ては過去。

良い想い出も嫌な想い出も全てが入り交じり、時の流れの下流へと押し流されてしまった、ただの事実でしかない。

ならば、過去の弱い自分と対峙し、自らの手で決別の薙刀を振り下ろすためにも、行かなければならない。

そうしなければ、今しなければいけないこと、今護らなければならぬモノを護りきることなんて、きっとできやしないのだから。

ここまで乗ってきた杖を掌の中で小さくし、腰に挟むと、己を勇気づけるために胸の奥で大切な友の名を数度反芻してから、アルフは夫婦櫂の下をゆっくりとくぐった。

※

そこは、空気の色までもが違って見える場所だ。
決して良い意味ではない。

古い因習に囚われ、時の流れに逆らい、頑なに過去にしがみついている。

外界からの進入を拒み、自らも村の外へ出ることを拒み続けてきた古い村と人々。

それがシェン村の姿であり、小人族の生き方だ。そこにあっては、数年という時の流れなど、ないも同然らしい。

アルフが出て行った時の姿そのままに鬱蒼と茂る森が、あの時と同じように来訪者の行く手を阻んで広がっている。

そのせいだろうか、気持ちが過去へと遡っていく。

寂しがり屋で弱虫だった、大嫌いな自分に。

胸がドキドキし始めた。

期待と不安。

二つの感情が入り混じり、気持ちを掻き乱していく。

アルフの唯一の理解者だった優しい両親は、今でもあの家で元気に暮らしているのだろうか？ 昔と同じようにそっと抱き締めてくれるだろうか？

けれど、村の皆は、決して自分を受け入れてはくれないだろう。

それはやむを得ない。

最初からわかっていたことだ。

ならば、両親が余所者である俺と逢っているところを誰かに見られたら、どうなる？

又迷惑をかけてしまうことになるのか？

きつとそうに違いない。

ならば、いつそ両親には逢わずに帰ろう。

そのほうがいいに決まっている。

もしも両親にまで拒まれたなら……。

あれやこれやと考えばかりが先走り、不安をいや増していく。

脚は次第に重くなる。

けれど……。

『悩んだ時、困った時には、出発点に戻りなさい。必ずや、新しい何かを得ることができるはずです』

校長先生は、確かにそう言ってくださった。

ならば、確かめなければならぬ何か、新たに得なければならぬ何か、ここにあるに違いない。

それを見極めなければ……、今までと同じように恐れ、避けていたのでは、もう二度と大切な友を取り戻すことができなくなってしまうかもしれないのだ。

それを避けるため、友を取り戻すために、自らに科した禁を破ってまで、この場所に来たのではなかったか。

アルフは、ともすれば挫折そうになる両脚を叱咤しながら、一歩

ずつ森の奥へと歩を進めた。

どのくらい歩いただろうか。

鬱蒼と暗い森を抜け、気が付けば村全体が一望出来る場所、『望郷の丘』の上に立っていた。

かつて教えられた、この場所の名前の由来を無意識に思い出す。

『この丘に登る者は、村を追われて出て行かねばならぬ者。恐怖と失望が満ち溢れている外の世界に赴くには、死を覚悟しなければならぬ。明日を望めぬ者が、最後に故郷を振り返り、涙する場所がこの丘なのだよ』

けれど、アルフがここに立つのは、これで二度目。

一度目は三年前。望郷の名の通り、人目を憚る必要のないこの場所、陽が暮れるまで泣き続けた。

そして二度目は、……今日。

とうに捨て去ったと思っていたのに、あの日と変わらぬ哀しみが胸の奥底から込み上げてきて、感情の平静を乱していく。

そんな自分に戸惑いを覚えながらも、抑えようのない懐かしさに駆られ、身を乗り出して眼前に広がる風景を見渡した。

あの日と変わらぬ閑静な村の風景が、そこに広がっていることを疑いもせずに。

美しい丘や小川。

整然と整地され、手入れの行き届いた田畑。

土と木とで造られた可愛らしい家並み。

時の流れに取り残されたように進歩もないかわりに、懐かしい風景が壊されることもない。

それこそが、アルフの記憶にあるシエン村の姿だ。

けれど次の瞬間、その思いは脆くも打ち砕かれた。

大きく見開いた双眸が映した懐かしい村は、その姿を一変していたのだ。

焼け爛れた木々。

抉られた大地。

踏み躪られた家々。

そして、地面にはあちこちに、どす黒く変色した染みが、何かの痕を残している。

驚きと困惑に我を忘れ、アルフは丘を駆け下り、フラフラと村の中に彷徨い込んだ。

「いったい……、何があったんだ？」

誰も答えてくれるはずのない問い掛けが、震える唇から零れて落ちる。

清浄な空気と村人の笑い声に満ちていたかつてのシエン村は、面影さえ残っていない。

否、村と呼ぶことすら躊躇われる光景だ。

まるで悪夢を見ているようだ。

その時だった。

背後に人の気配を感じ、弾かれるように振り返る。

鍛えられた彼の躰は、無意識のうちに重心を落とし、姿の見えない敵を迎え撃つ姿勢をとった。

けれど。

「……アルフォンス？ お前、アルフォンスだな？」

突如、かつての名前で呼ばれ、アルフは動きをピタリと止めた。

声の主の姿を窺うために一度細めた瞳を大きく見開く。

「シエンダ、爺さん……？」

言葉にすると同時に、肩の力がスツと抜けた。

懐かしい顔。

ジエンダ翁。

養父の古くからの友人で、アルフが小人族ではないと村中に知れ渡り、噂となり、陰口を囁かれるようになった後でさえ、両親と共に彼を庇い、可愛がってくれた老人だ。

出来ることなら顔を見たいと密かに思っていた。

込み上げる懐かしさに、思わず脚が前に進み出た。

「爺さん……」

だが、ジェンダの吐き出した言葉によって、その動きは凍りついた。

「寄るな、疫病神め！　まだ飽きたらず、最後の一滴まで、生き血を吸いに戻りおったか！」

そう言い捨てるや、彼は手に握った斧を躊躇いなく振り上げた。鋭い刃に陽の光が反射し、それがアルフの眼を眩ませた。

第7章 天上界 No. 3 (後書き)

次回予告…囚われのリオ。彼に会ったケルビムは？

「翡翠の鳥は飛び方を知らなくて」は、原則として週一回更新します。

次回更新(予定)日は3月2日(金)！

宜しく願います！！

第7章 天上界 No. 4 (前書き)

「翡翠の鳥は飛び方を知らなくて」は「LURIA」
「翡翠の瞳
空の蒼」の続編です。

第7章 天上界 No. 4

◇◇◇ 第七章 天上界 ◇◇◇ No. 4

透明な青い空、輝く純白の海原を背景に、白濁した球形の空間がいくつか、ふわりふわりと浮かんでいる。

天上界の者であれば誰しもが忌み嫌い、恐怖し、脚を踏み入れることさえ躊躇う場所。

天の牢獄。

一度捕えられ拘束されれば、二度と再び外に出ることは叶わぬと噂される天上界の墓場だ。

流れる風さえも薄ら寒いその場所に、ケルビムはゆつくりと脚を踏み入れた。

供も連れず、たった一人きり。

彼がそれを望んだ。

長い時間を一介の老人として異界の地で過ごしてはきたが、万が一何かが起きたとしても、下級天使如きに触れることさえ許さぬだけの力は維持しているという自負も無論はある。

が、今から逢いに行く『彼』の姿を他の誰かに見せることが躊躇われたというのが、その真の理由だった。

特別な許可がなければ立ち入ることなどできない場所だが、天上界で最上席に拝せられる聖天使に命じられれば、いかな牢獄の門番として、門を開き、長い黄金の髪が揺れる背中をただ見送るしかなかった。

ケルビムは一瞬の戸惑いもなく最奥を目指した。

被縛者の格に応じて部屋が配置されるのは遠い昔からの慣例だ。

『彼』は最奥にいる。

その罪状が、例えどんなに陳腐で嘘に塗り固められたものである

うとも、捕えられた真の理由ゆえに、『彼』は最奥にいないなければならないのだ。

緩く点滅する白濁した球の間をゆっくりと歩きながら、ケルビムは先程まで旧友と交わしていた会話の内容を脳裏に呼び起こしていた。

『あの深い翡翠の瞳は大いなる凶兆の証。このまま下界に戻すわけにはいかぬ。亜奴と同じ瞳を持つあの子供の内に秘められし力は偉大であり脅威だ。裏切り者とはいえ、亜奴は我等の長であったのだから。そして、亜奴と同じ瞳を持つがゆえに、あの子供は必ずや闇に魅入られよう』

友の言葉に、ケルビムは憤まんも露わに反論した。

『貴方は、まだそのようなことを……！ 彼は闇に魅入られたのではない！ 彼の行為は、奢り始めた人間達に神の恩恵を知らしめるために必要だったのです！ 何度同じことを申し上げればわかっていただける！ 全ては天上界のため、神の御為！ こんなにもわからずやで頭でっかちの天上界が彼を追い詰め、闇へと向かわせたのだと、私はずっとそう申し上げてきたではありませんか！ なのに、三千年もの間、貴方達は一切を覆い隠すことばかりに専念し、何も悔い改めなかったというのですか？』

爆発する怒りの中で、ケルビムは思い出していた。

丁度、これと同じ会話を交わしたことがある。

知識を司り、常に冷静沈着を旨としてきた自分が、初めて声を荒げた日。

……そう、あれは三千年前。ルリアに堕ちる直前のことだ。

『リオだと同じ！ あの子は決して闇に魅入られたりはしません！ なぜ信じないのです？ 信じようとしらないのです？ 私は三千年の間、ルリアの地で、子供達に信じることに、思いやることの大切さ、素晴らしさを説いてきました。それなのに、私の故郷は、一番簡単で一番大切なことさえ忘れてしまったのですか？ 情けない！』

『危険は排除しなければならぬ。碧の瞳が闇に魅入られし時、そ

の力は彼の地のみならず、この世の全てを滅ぼす脅威となるだろう』
『それこそ、ただの推測に過ぎぬと申し上げている！』

思い切り叩くと、周囲に控えていた守護天使達がビクリと軀を震わせた。

『あの人間達でさえ、我々の予測どおりになど動かぬものを、何と愚かなことを申されるのです？ 貴方達には何もわかっていない！ 自らの力で必死に生きようとする尊い意思を、幼い魂を、全てを見下すことを前提とした愚かしい憶測だけで摘み取ることなど、決して許される行為ではないはずでしょう！』

しかし、トロニの声音は断固として揺るぎない。

『それでもだ。危険の芽は、小さいうちに摘み取らなければならぬ。それが我等の役目だ』

ケルビムは深い溜息を吐いた。

これ以上、何を言っても、トロニは決して考えを変えはしないだろう。

前提となる基準が違い過ぎるのだ。

これは、それほど容易に解決できる問題ではない。

已む無く話を変えた。

『あの子と、……リオと二人きりで話をさせてもらえませんか？

あの子の生き方は、彼自身にこそ選ぶ権利があるのですから』

長い通路を進んできたケルビムの脚が、そこでピタリと止まった。行き止まり。最奥の間だ。

その場所にたった一つ、他より僅かに大きい白球がゆらゆらと揺れていた。

周囲に漂う珠のどれよりも、はるかに嚴重に、二重三重の封印を施された『それ』。

ゆっくりと中を覗き込む。

初めのうち、それは、中央で淡い光りが点灯しているだけの空であるかに思われた。

顔を近づけ眼を凝らしたケルビムは、次いでハッとして息を呑んだ。

光りは『彼』であった。

天上人の中で最も美しいと讃えられる聖天使の称号を与えられているケルビムでさえ、己の姿を恥じてしまうほどの神々しさと美しさを兼ね備えた唯一無二の天使。

天上界にあった頃、全ての天使の羨望を一心に集めていた光の天使。

……セラフィム。

その全身は透明な光によって包まれていた。

今、眼前にある『彼』そのままに。

愕然とし、数度、首を横に振った。

『彼』はいない。

いるはずがない。

それは、ケルビム、己が一番よく知っていることではないか。

自分自身をそう叱咤する。

ならば、『彼』は……。

ケルビムはその場にガックリと膝をついた。

自らの推測の正しさが証明されたけれど、それは喜びには繋がらなかった。

哀しみだけが胸の奥底から湧き上がってくる。

なにより、白濁した壁に背を預け、ぐったりと座り込んでいる彼の姿は、哀れだった。かつての最愛の友の姿を彷彿とさせ、あまりにも辛かった。

身長ほどもある長く柔らかな黄金の髪は、やつれた頬に掛かり、足許へと流れ落ちている。

三重の後輪の光りさえ微かだ。

視線はボンヤリと宙を漂い、その瞳からは、ただ涙だけがポロポロと零れている。

翡翠の瞳には、恐らく全てが見えているのだろう。

哀しみに打ち拉がれる友の姿。

ルリアの危機。

そして、過去と未来の時間の全てが。

心を切り裂かれるような、拷問にも等しい苦痛に耐えているのだろう、その姿は、壮絶な美しさすらはらんでいた。

ケルビムの中で、時が遡っていく。

あの時、最愛の友は、やはりこんな表情をしていなかったか？

それを自分は、ただ美しいとしか思えなかった。

せめてあの時、友の苦悩に気付いてやれていたならば、世界はこれほどまでに歪みはしなかったかもしれない。

そう思うと、胸が締め付けられるほどに苦しくなった。

唇を噛み、漏れそうになる哀しみを抑えながら、出来うる限りそつと声をかけた。

空気の揺らぎが彼を掻き消してしまうことを恐れてでもいるかのように。

「セロ、わかりますか？ 私の声が聞こえますか？」

懐かしい友の愛称で呼んでみる。

すると、彼の指先がピクリと動いた。

無表情にまま、それでも視線がゆつくりとこちらに向けられる。

仕草までもが瓜二つだ。

胸が震えた。

「何故なのですか？ なぜ黙って捕らえられたりしたのですか？」

ルリアの少年が惨殺される光景など、ただの幻影であると気付かぬ貴方ではないでしょうに」

深い碧の瞳が、ふっと細められた。

柔らかな声音が言葉少なに呟く。

「幻であろうとなかろうと、あれが現実になどならぬと、いったい誰が約束してくれる？」

やはり同じ声、同じ眼差し。

心が軋み、膝から力が抜けそうになる。

「だからといって、貴方の運命を預けてしまうなど……！」

言葉が喉に詰まり、それを誤魔化したくて俯いた。

「貴方は、いつもそう。自分のことよりも友のこと。自分のことよりも世界のこと。自らを傷つけることに恐れがなさすぎる。そこまでする必要などありませんまいに」

その言葉が心に届いたのか、彼は涙の溢れるままに瞳を伏せ、細い首を小さく横に振った。

「私は弱いのだ。誰かが傷つく様を見るのが怖い。私が身勝手にリアの地に留まる限り、私の大切な友が誰かによって傷つけられるかもしれない。あの悪夢が、いつか現実となってしまうかもしれない。そう考えただけで、身を引き裂かれるほどに辛くなるのだ。それくらいなら、……誰かを苦しめるくらいなら、私は……」

顔を俯けた時、絹のような細い金の髪が彼の頬にサラサラと落ち掛かった。

そうだ、あの時も彼は……。

突如、妙な錯覚に囚われた。

三千年の時の流れは、全て夢ではないのか？

自分は天上界の聖天使として敬われる地位にあり、愛しい友と供に敬愛する神のお側近くにお仕えしているのではないのか？

今、この時、友の苦悩を払い去ることが出来さえすれば、今のこの穏やかな時は何も変わることなく、綿々と過ぎ去っていくのではないのか？

第7章 天上界 No. 4 (後書き)

次回予告…ケルビムの提案。そして、リオの決断とは？

「翡翠の鳥は飛び方を知らなくて」は、原則として週一回更新します。

次回更新(予定)日は3月16日(金)！

宜しく願います！！

第7章 天上界 No. 5 (前書き)

「翡翠の鳥は飛び方を知らなくて」は「LURIA」の翡翠の瞳の蒼」の続編です。

第7章 天上界 No. 5

◇◇◇ 第七章 天上界 ◇◇◇ No. 5

そこまで思っ、強く首を横に振った。
違う。

錯覚だ。

過ぎ去った時は、繕えはしない。

三千年の時は確実に流れ、世界を変えてしまったではないか。
思い出せ！

『彼』ではない。

この子の名はリオ。

天上人としての外見は酷似していても、我が最愛の友ではないのだ。

異界の地に住む、まだ、たった十三歳の少年なのだ。

改めて思い返し、ケルビムは己を戒める意味を込め、務めて厳しい口調を装った。

「リオ。君のその美しい碧の瞳には、全てが見えているのでしょ？
君が苦しめたくないお願い、自らを奉じてまで護ろうとした大切な友人は、今、苦しみがいています。全ては君がルリアの地を去ったがために」

彼の地にある時、この少年に掛けたのと同じ口調で言った。

「さあ、どうなのです？ 彼等を傷つけたくない、護りたいという君の願いは、これで叶えられたといえるのですか？ 君は、これで満足なのですか？ 彼等を哀しませ、絶望の淵に追い込むこと。これが、君の望んだ結果なのですか？」

途端、それまで頑なに感情を隠していた瞳から、スッと力が抜けた。

その姿は一回り小さくなり、眼に馴染んだ少年の容姿に変わる。

彼の震える唇から、絞るような言葉が漏れた

「それでも、命を奪われるよりは、……いい」

「愚かな！ 君は本当にそう思っているのですか？ 命を奪われる以上に辛いことなどあるはずがないと、本気で思っているのですか？」

リオは何も答えなかった。

答える代わりに、堪えきれず漏れたのだろう嗚咽だけが聞こえた。白い頬を伝い落ちる涙は、まるで星屑のようにキラキラと輝いて見えた。

「僕等の、出逢いは……」

やっと絞り出した声音は震えていた。

「僕が彼と出逢ってしまったことは、僕に対する罰なのですか？」

ケルビムの肩が無意識にピクリと波打った。

見つめる視線の先で、リオがきつく瞼を閉じる。

そうすることで外界との絆の全てを断ち切ってしまいたいと願っているように見えた。

「……生まれてなど、こなければよかった」

「リオ、いったい……」

「どう頑張ったって、どう足掻いたって、僕等が出逢ったことは苦しみしか生まない。始めから、そう仕組まれていたんだもの。なら、……そんな命なら、いらなかった！」

高まる感情は一気に熱を帯び、輝く光となって四散した。

瞬間、白濁した呪縛の檻の表面が細かく震動した。

聖天使の力を持つ彼のため、特別に設えられた檻だというのに、それさえも破壊してしまいそうなのこの力の強さはどうだ。

これが負の方向に解放された時、この世界はどうなってしまおうのだろうか？

一瞬、そんな思考が頭の隅に浮かんだが、意識してそれを消し去る。

起こり得ぬ仮定などしてみたところで、無用な恐怖心を煽るだけ。そう己に言い聞かせた。

「僕への罰ならば、僕だけが苦しめばいいはずなのに、……それなのに、なぜですか？　なぜ彼まで、こんなに苦しまねばならないんですか！　神はそんなにも、僕の存在が許せなかったというのですか？　それほどに、僕の存在は罪だというのですか？　生まれ落ちたその瞬間、命を絶ってしまうという慈悲すら与えてはいただけなかったほどに！」

ハッとした。背筋を悪寒が這い登っていく。

けれど、それを表情には出さぬように留意しつつ、ケルビムは静かに訊いた。

「君は、この牢獄の中で、何を見、何を聞かされたのですか？」

瞬間、リオの面から血の気が退いた。

唇が震え、それ以上の言葉を紡ぐことさえできない。

どうやら、予想は的中したらしい。

きっと、ケルビムが空に戻ってくるまでに要した時間の分だけ、彼は観せられてしまったのだろう。

時間の流れが描き出す不確かな未来図。

捕縛者の意図によって造り替えられた、最悪の結果を。

それが重すぎる枷となり、幼い心を締め付けるには充分以上の苦痛をもたらしているに違いない。

無慈悲な天上界の遣り方に、改めて怒りを禁じ得なかった。

「結構。もう何も言わなくていい。私の配慮が足りませんでしたね」
弧をなす白濁の壁に、静かに一歩近付く。

「いいですか、リオ。私の言葉をよくお聴きなさい。君がここで観、聞かされたことは、確かに君の未来です。ですがそれは、無数にある選択肢の中から、たった一つの道を選んだ先に有る、たった一つの未来でしかありません。これから先、君が生きていくうえで下すであろう何千回、何万回という判断の結果が導き出した、たった一つの未来でしかないのです。君がどこかで、たった一箇所、異なっ

た判断を下したならば、君の未来は確実に変わります。わかりますか？ 君の未来は、君のこれからの選択によって、いくらでも変えることができるのです。ですから、恐れる必要などないのです。最初から定められた運命など、この世にありはしないのですから」

それまでじつと話に耳を傾けていたリオの表情が、瞬間、微かに色を帯びた。

「本当、ですか？」

「ええ、本当ですとも」

ケルビムは力強く頷いた。

「確かに、君達の出逢いは、……そして、その進むべき道は、決して平坦なものではありません。厳しい茨の道が続くでしょう。けれど、苦しみにしか繋がらない未来など存在しません。未来は君達が切り開き、その手で得るものなのですから」

今は彼の生きようとする力に希望を託すしかない。

この白く濁った牢獄から出るためにも、この先に待ち受けている様々な苦難に、彼が打ち勝つためにも。

敢えてニツコリと微笑んでみせた。

「さあ、少し冷静になって、よく考えて御覧なさい。君が今、心から望むことはなんですか？」

想い出の中の友の姿で、彼と同じ深い碧の瞳が、リオの心が、切なげに揺らめいた。

じつと答えを待つ。

リオは俯き、瞳を閉じて何事か考え込んでいたが、やがて訝しむように顔を上げた。

「でも、……何が出来ると？ 今の僕に、いったい何ができるというのですか？」

「何が出来るかは、君次第。君の未来を勝ち取るのは、君のその手だけなのですからね」ケルビムは精一杯明るい口調で言った。「リオ、諦めてはいけません。どんな状況下にあろうとも、最後まで決して諦めてはなりません。の強い想いは、何物をも貫く力となるで

しょう」

「あきらめ、ない……」

「そうです。諦めてはいけません」

もう一度、今度は力強く頷いた。

「私は、君と同じ瞳を持った者を知っています。天上界の者にとって瞳は力の証。ですから、君のその翡翠の瞳が証明しています。君が私の知っている、私の大切な友人と同じ強い力、強い心を持っているということを。そして彼は、決して諦めませんでしたよ。最期の時まで自分にできる最善のことをしようと努力し、そして、成し遂げました」

「僕と同じ、瞳……?」

「さあ、君はどうするのです? このまま空に留まって、自分の全てを否定し、悔いながら、永劫の時を生きますか? それとも、地上に戻り、友と一緒に運命と闘いますか?」

その瞬間、まだあどけなさの残る円らな瞳から大粒の涙がポロポロと溢れ出した。

「戻りたい、です。彼等のところに。もしも、まだ、僕の願いが叶うのなら。それが僕の、……僕だけの我侭でないのなら」

溢れる涙を拭おうともせず、リオはハッキリと言った。

たったこれだけの言葉に込められた彼の想いの重さを慮る。

誰かに自分と同じ苦難の道を強いるとわかっていながら、それを望むことは罪悪であると信じて疑わない彼にとって、この決断は、その苦難に立ち向かうよりも辛いものであったにちがいない。

だが、それでも望まずにはいらなかったのだろう。

最愛の友との友情の続きを。

あの時の自分に、彼と同じ強さがあったなら……。

ふとそんなことを思い、思ってしまった己を戒めるように表情を硬くして、白濁した壁にそっと両掌を添えた。

「いいですか、リオ。選択肢は二つ。ここから出てルリアに戻るために、君は選ばねばなりません。どちらを選ぼうとも、その結果は

必ずや尊重されることを、我、聖天使ケルビムが誓って約束いたしましょう」

大きく頷くりオの瞳に戻った輝きを確認し、ケルビムはゆっくりと言った。

風が、吹いた。

そんな二人の遣り取りを、雲の波の狭間から見守る青い眼があった。

トロニだ。

彼は、自分にしか聴こえぬほどの微かな声で独り言ちた。

「かの地に帰ることを選んだか、闇に魅入られし者よ。まあ、それも良いだろう。お前がそれを望むのであれば、今は望み通りにするがいい。しかし、お前は必ず、再びここに戻ってくる。植え付けられた恐怖の種は、やがて芽吹く。お前のその硝子のような透明な心では、それに耐えることなど出来はしないだろうからな」

守護天使が彼の囲りを飛び回っていることに気付き、誘われるままに脚を向ける。

「哀れな魂よ。天上界のせめてもの慈悲だ。一時なりと、友との憩いの時間を噛み締めるがよい。その先には別離しか待っていないことなど、今は知る必要もあるまい」

言葉を風が掻き消していく。

歩きながら、彼は口角を僅かに上げたが、それは笑みにはならず、しかも一瞬で消えた。

第7章 天上界 No. 5 (後書き)

次回予告…懐かしい田舎へ戻ったアルフ。しかし、そこで見たものとは……？

「翡翠の鳥は飛び方を知らなくて」は、原則として週一回更新します。

次回更新(予定)日は3月23日(金)！
宜しくお願いします！！

第8章 望郷の想い No. 1 (前書き)

「翡翠の鳥は飛び方を知らなくて」は「LURIA」は「翡翠の瞳
空の蒼」の続編です。

第8章 望郷の想い No. 1

◇◇◇ 第八章 望郷の想い ◇◇◇ No. 1

流れ落ちる汗を拭おうと手の甲で額に触れると、ズキリと痛んだ。慌てて手を引っ込める。

掌を見遣れば、半ば固まりかけた血糊がべったりとまとわりついている。

全身のヌルつく感覚が、汗によるものなのか、それとも躰から滲みだした命の糧によるものなのか、定かでない。

全身が冷え、ギシギシと軋んで悲鳴をあげている。

膝は痺れたようにガクガクと震え、足許がふらつく。辛うじて二本の脚で歩いてはいるけれど、真っ直ぐに進むことは出来ない。

もう何度、膝から崩れ、手近の幹に肩から縋ったことだろう。

眼が霞み、視界がぼやけている。

今、俺はどこに居るんだ……？

深い森の中。それだけしかわからない。

早く家に帰らなければ。

焦りが脚を前へと動かす。

しかし、あれから何日経ったものか、朧な頭ではそれさえ定かでない。

だが、出掛けに告げてきた予定の日数をとうに過ぎているのは間違いないはずだ。

飛べずに歩いているのだから、時間のロスは明らかだ。

一日でも早く帰らなければ、寂しがり屋の友に心配をかけてしまう。

いつまでたっても子供じみて、直ぐに泣きべそをかく。

そのくせ口だけは達者で、何時だってやり込められてしまうのは

こっちだ。

それが一流の屁理屈だとわかっていても、不思議と嫌な後味を残さないのは、奴の性格故だろう。

哀しい時、辛い時、笑っていられる芯の強さを持っている。

その無邪気さに、何時も心癒されてきた。

大切な友人。

愛しい家族。

そして、もう一人……。

他人の苦しみを、まるで自分のことのように感じ、共に傷ついてくれる人。

何時でも傍にそっと居て、苦しみも辛さも、その半分を引き受けてくれる人。

どんな淋しさも包んでくれる優しい微笑み。

なのに、今は、……いない人。

その姿とポラリスの森のような碧の瞳を思い浮かべた瞬間、胸の奥底がキリキリと痛んだ。

また眼前が霞む。

その瞬間、地面に張り出した木の根に脚を取られて転倒してしまっ

った。左肩を強かに打ち付ける。

冷たい地面に顔を押しつけると、酷く情けない気持ちになった。

……帰りたい。

今すぐに帰りたい。

彼等に逢いたい！

あの笑顔に癒されたい！

けれど……。

グッと両手を握りしめる。

帰ってもいいのだろうか。

自分にその価値があるのだろうか。

故郷を後にしてから先、何度も何度も繰り返してきた自問。

そして、未だ答えは見つからない。

何よりも大切だと思ってきた。

何よりも大切にしてきた。

一緒にいたいと願ってきた。

それは、決して無謀な願いではなかったはずだ。

けれど、否、だからこそ、傍に居てはいけないのか？

それすらも、自分にとっては許され得ぬ望みだというのか？

指の間から少し湿った土が零れ落ちていく。

柔らかな土だ。

まだ木の葉だった頃の面影を残しているせいか、ガサガサとした感触が掌に残る。

樹は大地の滋養を吸収し、葉を茂らせる。

そうして秋に散った葉は土に帰り、再び自らの糧となる。

それこそが、ルリアに根ざす命の輪廻。

そうだ。

俺達は皆、いつかは土に帰っていくんじゃないか。

ならば、それが今で、なにが悪い？

こうしていれば、俺もやがては大地に溶け込み、ルリアの一部となれる。

万物の命の糧となれるんだ。

我知らず、乾いた笑いが唇を歪めた。

……それも、いいな。

いっそ、このまま消えてしまえば、どれほど楽だろう。

もう、……いい。

消えてしまえ。

苦しむ必要などないのだ。

全てを無にしてしまえ。

そうすれば、お前は全ての苦しみから解放されるのだ。

……心の奥で、そんな声が響く。

全てを捨てて自由になりたい。

消えてしまいたい。

衝動は、軀の奥深くから徐々に、しかし激しく湧き上がってくる。気付けば、湖畔に佇んでいた。

夜か昼かの判断すらも誤らせるボンヤリとした暗闇の中で、自ら放っているのだろうか、淡い輝きが水面を包み、その動きと同調してか、周囲の風景までもがゆらゆらと揺らいで見える。

なぜか胸が締め付けられるほどに美しい光景だった。

アルフは力無い脚でフラフラと、引き寄せられるように湖に近付き、その場にガックリと膝を着いた。

この水底に沈んでしまえば、全ての枷から解放される。

苦しみも、哀しみも、憤りさえ、全てが無に帰し、楽になれるにちがいない。

そんな囁きが、酷く魅惑的に、意識の奥で木霊する。

妖しい美しさを湛える湖面の複雑な水の動きが、まるで誘っているかのように見えたのは、アルフの気の迷いだったのか、否か。

いずれにしろ、その誘惑に抗えない。

アルフは静かに指を伸ばし、水面に触れようとした。

その瞬間……。

ゾワゾワと粘り着くような悪寒が、一気に背筋を這い上がってきた。

反射的に振り返り、身を固くする。

背後を覆って立ち上がっていたものは、哀れなほどに微かな光までも呑み込んでしまったような凝った闇。

黒い影の固まりだった。

それが、アルフを今にも包み込みこもうと大きく両腕を広げているのだ。

『やっと、見つけた……』

『見つけましたぞお』

ざらざらとした、それでいて湿気を含んだ声……それを『声』と言えるのならだが……が、鼓膜というより皮膚に直接まとわりつ

いてきた。

激しい恐怖。

恐怖。

……恐怖！

それは否めない事実であるはずなのに、その一方で、酷く醒めた自分がいるのはなぜなのだろうか。

俺は、……死ぬのか？

こいつに喰われてしまうのか？

影の動きをじっと凝視したまま、もう一人のアルフは思っていた。
第一、逃げるには体が重すぎた。

生きようとする欲求が、生きていられる理由が、希薄になりすぎていた。

もう、どうでもよかった。

このまま森の闇に取り込まれ、喰われてしまうなら、それもいい。
闇を恐怖する感情を薄膜で包み込んでしまった、もう一つの感情に操られるままに、アルフはゆっくりと脱力し瞼を閉じた。

※

悪夢が繰り返し観せるのは、同じ場所。

同じ時。

それはいつも、見る影もなく荒れ果てた故郷と、憎しみで醜く歪んだジェンダ翁の顔の映像で始まる。

三年ぶりの再会に、懐かしさのあまり小走りで歩み寄ったアルフに叩き付けられたのは、氷のように冷たい一言だった。

「寄るな、疫病神め！」

老人の眉間に深く刻まれた皺と、真っ直ぐに突き出された斧の鈍い輝きが、その言葉が冗談などではなく、心の底から滲み出す嫌悪によって発せられた言葉だと無言で語っていた。

無論、村人達に歓迎されるわけなどないことくらい、はなから覚悟の上での帰郷だ。

なじられ、罵倒されても仕方がないと思っていた。

けれど、少なくとも両親とこの老人だけは笑顔で迎えてくれると信じていた。

それなのに……。

発熱した感情が、頭から冷や水を掛けられたように急速に冷めていく。

喉の奥に異物が詰まったようで声が出せない。

結局、そんなもんなのか？

人の心とは、こんなにも移ろいやすいものだったのか？

驚きというより、三年間の時の流れの重さに気付けずにいた己自身が情けなくて齒噛みする。

アルフのそんな思いを知ってか否か、老人の言葉は辛辣さを増しながら積み重ねられていく。

かつて優しくかった老人と同一人物だとはとても思えぬほどに苦々しく顔を歪めながら。

「何処の誰の子とも知れんお前を森で拾ってしまったとルヒルから相談された時、俺はやめろと言った。あいつ等夫婦に子供がいないのは可哀想だと思っていたが、別の種族を村に入れたら必ず不幸がやってくる。昔からの伝承には必ず根拠があるもんだから、やめておけ、とな。なのに、ルヒルの奴、俺の助言に耳も貸さんかった」

ジェンダは怯えるように身を震わせ、その場に膝をついた。

「結局、こんなことになっちまった。バカな奴だ。お前なんか拾ったばかりに……」

「いったい、何が……、あった？」

震える唇で、やっとそれだけ訊いた。

瞬間、ジェンダは眼を剥き、鬼のような形相でアルフを指差した。

「お前のせいだ！ 村は闇に食い潰されちまった。お前が村に連れ込んだ闇にだ！」

（俺が招いた……、闇？ 何のことだ？）

根拠ない誹謗中傷には慣れっこのはずのアルフの胸に、しかし、老人の言葉は鋭く突き刺さった。

悔しさが胸の奥から沸々と湧き上がってくる。

「父さんと、母さんは……？」

感情を抑えて短く問う。

自分の知らないところで、身に覚えのない疑いを掛けられるなんて真っ平だ。

父と母に逢おう。

逢わなければならない。

父と母なら、今この村でなにが起こっているのか、わかりやすく説明してくれるに違いない。

優しかった老人の心を変えてしまうほどの何か。

彼の言葉から察するに、恐らくは村人達が震え上がり、怯えるほどの何か。

それがなんなのか、自分の眼で確かめなければならないと、そう思った。

ジェンダは暫し憎々し気にアルフを睨め付けていたが、やがて意を決したように大きく息を吐き、背を向けて歩き出した。

付いていくしかなかった。

辛い思い出ばかりのこの地に、軽い気持ちで帰ってきたわけじゃない。

この場所で、校長先生の言っていた『真実』を見定めるまで、逃げ出すことなどできはしない。

それが僅かでも友を救い出す一助となりうるのであれば、今の自分はその為さなくてはならないのだ。

ならば、この先になにが待っていようと、前に進むしかない。

突き進むだけだ。

それだけを心の中で繰り返し、アルフは村への一步を踏みしめた。

第8章 望郷の想い No. 1 (後書き)

次回予告…闇の森を彷徨うアルフ。彼を捕らえようとする怪しげな力。そして、現れた謎の美女。敵か、味方か？ その正体は？

「翡翠の鳥は飛び方を知らなくて」は、原則として週一回更新します。

次回更新（予定）日は3月30日（金）！
宜しく願います！！

第8章 望郷の想い No. 2 (前書き)

「翡翠の鳥は飛び方を知らなくて」は「LURIA」は「翡翠の瞳
空の蒼」の続編です。

第8章 望郷の想い No. 2

◇◇◇ 第八章 望郷の想い ◇◇◇ No. 2

重い瞼をゆっくりと開く。

そこは酷く薄暗い場所だった。

ゆるい空気の流れにゆらゆらと揺れる灯りだけが、それが夢の中の映像ではなく、覚醒した自分の眼で見てる光景なのだと教えてくれている。

起きあがろうとしたが、体が酷く怠くて手脚を動かすことも億劫だった。

やむなく視線だけを動かし。灯りを頼りに周囲の様子を探る。

壁は天然の岩でできており、それがぐると天井まで続いている。どうやら洞窟の中らしい。

窓こそないが、壁の一部を刳り貫いて通気抗らしきものまであるようだ。

顔を横に向けると、テーブル、家具、暖炉など、生活に必要なものが一通り揃っていることも見て取れた。

ここが誰かの家であることは間違いなさそうだ。

しかも、家具の類は全て磨かれた岩で造られている。

硬い岩を木のように加工できる技術を持っている種族なんて聞いたこともない。

いったいどのどいつだ？

半ば感嘆し、半ば呆れながら、ゆっくりと首を回していく。すると。

「あら、気が付いたようね」

聴き慣れない、高音域に属する声音が鼓膜を揺らした。

誘われるままに視線を向けると、漆黒の艶やかな巻き毛を腰の辺

りまで垂らし、今は流行らない（ということとは、その方面には全く興味のないアルフにだってわかるくらいに）昔風のビラビラしたドレスを身に纏った女が、これもまた流行らない、背もたれの大きな椅子に腰掛けて、ニコニコと笑いながらこちらを見ていた。

なんだ、こいつ……？

起きようとして牀中に力を入れた。

瞬間、突き刺すような痛みが、脳天から脚の先までを貫いた。

声にならない呻きを漏らし、布団の中に沈み込む。

「ダメよ。まだ寝ていらっしやい」

女が身を乗り出し、顔を近づけてきた。

瞬間、噎せ返るような香水の臭いが鼻孔を突き、アルフは眉を顰めて顔を背けた。

こういう甘ったるい匂いは苦手なのだ。

拒絶の意図を感じ取ったのだろうか、小さな溜息に続き、数歩分だが離れていく足音が聞こえた。

ホッとすると同時に、酷く気まずくなった。

不用意に近付いてきた相手を拒絶し、自分の領域に踏み入れさせないのは常のこと。

なのに、なんで今だけ、こんなに気持ちが悪くなるのだろうか。

不明瞭な訝しさは、けれど、すぐに確信に変わった。

今、アルフが寝かされている布団の柔らかな肌触り、毛布の温かさ。

恐らく、この温もりを提供してくれたであろう当人に対するには、余りにも不遜な態度だったと、無意識に自身を非難していたのだろう。

そして同時に、温もりは懐かし記憶、けれど今は辛いだけの、思い出したくない記憶をも呼び覚ましてしまった。

子供として生きることを許されていた日々。

両親がいて、その間に自分がいて、暖炉の火が明々と燃えていた空間。

父が笑い、母が笑い、そして自分も素直に笑えたあの場所。
くすぐったいほどに幸せで、けれど、今はもう手の届かないところまで流れ去ってしまった時間。

胸の奥で凝り固まった痼りの重さに閉口しつつ、思考を断ち切るためにゆっくりと頭を動かして視線を女へと戻す。

彼女はアルフに背を向けて立っていた。

水音が聞こえるが、何をしているのかまでは窺い知れない。

女が何者で、何を企んでいるのかはわからないが、少なくとも温かな寝床を提供してくれたことは事実だ。

必要最低限の情報くらい提供してくれるに違いない。

そう判断し、アルフは短く訊いた。

「黒い、影、は……？」

けれど、問うてから口内で微かに舌打ちした。

意識が飛ぶ直前、確かに見掛けた黒い影。

奴等が身に纏っていたのは、全身を粟立たせるには十二分過ぎるほどに強い負の感情だった。

この女にどうにかできるような相手ではなかったはず。

ならば女は、奴等には出逢わなかったのだろう。

答えの得られない問いを発してしまったことを悔やみ、唇を歪めて視線を逸らした。

けれど、アルフの予想に反し、振り返った女は、数度眼を瞬かせた後、納得の態で口角を上げた。

「ああ、あいつ等？」

皮肉混じりに小さく笑うと、フワリと椅子に腰掛けた。

「大丈夫よ。この森で勝手をされては困るの。だから、丁重にお引き取り願ったわ」

顎に指を掛け、ホウツと悩ましげに息を吐く。

「まったく、最近は何事になったものよね」

驚いた。

追い返したといわんばかりの口ぶりについては話半分に関心とし

ても、奴等に出逢って助かったというのか？。

この女……、何者だ？

「あんた、いったい……」

女を凝視し、独り言ちる。

けれど、女はその声を耳敏く聞き付けたらしい。

疑問の形を取る前だったにも拘わらず、憤慨とばかり腰に手を当て、勢い良く立ち上がった。

「いやあねえ。助けてあげたのに、私のこと疑ってるの？ 失礼しちゃうわね。だいたい、こんな美人になら、取り殺されたって文句ないんじゃない？」

よく喋る女だが、敵ではないらしい。

それはアルフの直感だった。

できることなら早々に退散したいところだけれど、残念ながら躰がいうことを効かない。

それに、酷く怠くて抗う気力もなかった。

とりあえず、長引きそうな話の腰だけは折っておきたいと思った。

「ここ、……あんたの、家か？」

だからといって、そんなこと訊いてどうする？

気付いた時には、既に言葉として零れてしまっていた。

女は聞こえていることを示す程度に小首を傾げた。

見掛けよりも華奢な顎のラインに視線が釘付けになる。

「あら、あたしのことが知りたいの？ 子供のくせに生意気ねえ」

女はからかうように喉の奥で笑った。

「本当なら秘密にしておきたいところだけど、……そうね、貴方、可愛いから、特別に教えてあげる。この家はね、ある人のものだったの。それを私が貰ったってわけ」

次いで身を乗り出し顔を近づけてくる。

「言っておくけど、私の美貌に目がくらんだスケベオヤジのじゃないわよ。そんな奴の家なんて、気持ち悪くて住めたもんじゃないでしょ」

見掛けほどにはふざけた女ではないようだ。

が、ご多分に漏れずお喋り好きのようだ。

アルフは少々うんざりし、微かに肩を竦めた。

女は楽しげにクスクスと笑った。

「意識はしっかりしているみたいね。間に合ってよかったわ。でも、これからは気を付けること。貴方は闇に魅入られやすいから」

スカートを直し、再び椅子に腰を下ろす。

「あたしはマチェラ。この森に独りぼっちで住む美しき乙女よ」

女のお喋りは止まらない。

何か言えば十倍になって返ってくるにちがいない。

アルフは眼を閉じた。

とても疲れていた。

「眠いの？　なら、ゆっくりお休みなさい。たまには休息も必要よ。可愛い戦士さん」

そんな言葉が、少し遠くに聞こえたような気がした。

……と、次の瞬間、唇に柔らかな感触が触れた。

反射的に眼を見開く。

眼前に広がる波打つ黒髪。

胸にかかる女の体重。

噎せ返るような香水の香りが、再び、しかし今度は甘く鼻孔をくすぐった。

なぜだろう、抗うことができない。

胸許と唇から伝わる温もりが、酷く甘い、けれど、今は痛みしか伴わない懐かしい記憶を呼び起こしていく。

瞬間、アルフの軀を今まで感じたことのない感覚が貫いていった。軀の中心がカッと熱くなり、脳の芯が痺れた。

我に返った時、アルフは女を床に押し倒し、その上に馬乗りになっていた。

それなのに、女は抵抗の素振りすら見せない。
必然的に縮まる二人の距離。

自分の行動に驚きつつ、茫然と見下ろした女の榛色の瞳の奥に、微かに悪戯っぽい笑みが過ぎっていくのを見て取った。

（この女……、俺を羽目やがった？）

さっきまで、動かそうとしても動かなかった躰、少しでも動かそうとすれば激痛に襲われた四肢が、今、なぜこんなにも俊敏な動きをすることができるのか。

いつもの数倍は重いけれど、気怠さも痛みも遙かに和らいでいる。

「なにを、した……？」

問う声音は、自分のものでないように震えている。

おかしい。

この女は危険だ！

理性が耳許で叫んでいた。

しかし、勢いのついた躰と欲望を制止出来るほどの理性も気力も、今のアルフには残っていないかった。

胸の中に渦巻く色濃い虚無感が、出口を求めて暴れ回る。

自分でも訳のわからない衝動に突き動かされ、アルフは、女の豊かな胸許に貪り付くように顔を埋めていた。

なけなしの理性が消えかけていく。

瞬間、アルフは耳の奥に懐かしい声を聞いたような気がした。

頬を熱い何かが流れ落ちていく。

それが彼の最後の理性だった。

第8章 望郷の想い No. 2 (後書き)

次回予告…アルフの帰りを待つリオとルーの身に……？

「翡翠の鳥は飛び方を知らなくて」は、原則として週一回更新します。

次回更新(予定)日は4月6日(金)！

本連載も残すところ6話となりました。是非この後もお覧下さい。

第9章 純白の影 暗黒の光 No. 1 (前書き)

「翡翠の鳥は飛び方を知らなくて」は「LURIA」の翡翠の瞳
空の蒼」の続編です。

第9章 純白の影 暗黒の光 No. 1



第九章

純白の影 暗黒の光



No. 1

窓辺の椅子に腰を下ろして、リオがボンヤリと空を見上げている。今日は朝から天気が良くて陽射しも穏やかだからと、その場所に椅子を据えたのはルーだ。

彼はリオの隣で、リオと同じように椅子に腰掛け、本を読んでいた。

開け放した窓からそよそよと流れ込んでくる微風は、この時期には珍しいくらいに暖かい。

そこに紛れる芽吹く若葉の香りを楽しみながらページを繰っていたルーは、何かに遮られるように、ふと手を止めた。

風の音がほんの少し揺らいのように思えたからだ。

顔を上げ、無意識の中にも期待を込めて周囲を見回す。

……けれど、やはり何も変わってはいない。

飽くことなく空を見上げるリオが、そこにいるだけだ。

変わらない。

なにも、変わりはない。

リオは心を失ったままだ。

金糸のような長い髪が、穏やかな風に煽られて踊っている。

リオがいる空間。

リオがいる風景。

それ自体は何も変わらないけれど、周囲を包む空気が何時も以上に透明に感じられるのが、微かに気になる。

今のリオは、まるで産まれたばかりの赤ん坊のようだ。

碧の瞳には、いったい何が映っているのだろうか。

そしてそれは、リオの中を通り過ぎていくだけなのだろうか。

「ねえ、リオ。君のその瞳には、いったい何が見えてるの？」

問い掛けても、リオは答えてはくれない。

視線は不思議そうにルーを捉え、次いで室内を泳いだ後、再び空へと向けられた。

『それでも、リオはリオだ』

気休めとわかってる言葉を、ルーは今日も心の中で繰り返した。このままリオの心が戻らなかったとしたら、今、目の前にいる彼は、どうなってしまうのだろう。

赤ん坊だって、時と共に成長していく。

言葉を覚え、自我を持った彼は、リオではないのか？

ならば、その時の彼はいったい……？

頭を振って、考えを意識の外に飛ばす。

リオは戻ってくる。

必ず。

今、それ以外に信じてはいけないと、己に強く言い聞かせる。

小さく溜息を吐いた後、ルーはリオの膝元にペタリと座り込み、その膝頭に手を添えた。

温かさが伝わってくる。

「アルフは故郷の村に出かけていったきり、まだ戻らないよ。君を取り戻すための鍵を探しに行くんだって言って。何かあったのかな、もう五日になるのに……」

ふと不安になってリオの膝に頬を寄せた。

「ねえ、リオ。ボク等、このままバラバラになっちゃうの？　ボク等、一緒にいられないの？　ねえ、リオ、応えてよ。早く戻ってきてよ。ボク、……淋しいよ」

その時だった。

何時もと違う、微かに生暖かい風がルーの頬を撫でた。

反射的に顔を上げ、周囲を見回した後、眼前の端正な顔を覗き込む。

すると、リオの瞼がスッと閉じられ、次いで、深く息を吸う気配

が伝わってきた。

「リオ……？」

ルーは慌てて立ち上がり、リオの肩に手を掛けた。

……と、次の瞬間、ルーは天井と床が逆転するような浮遊感を覚え、同時に遠退く意識を感じた。

※

ルリアの民は、この場所を『闇の森』と呼ぶ。

この森を覆い尽くすのは、全ての力を無にする絶対的な力。

それ故に、この森に入った瞬間から、あらゆる魔法が意味を持たなくなるのだ。

けれど、その名の本当の由来は、別にあるとも言われている。

この地で魔族が生まれたのだと言う伝承故だ。

そのため、ルリアの民は畏怖と共に嫌悪を込めて、この場所をそう呼ぶ。

前屈みに軀を折り、前脚に体重を掛けながら歩く。

そうしていなければ倒れてしまいそうだった。

木々に縋りながら、一步、また一步と、リオは歩を進めた。

少しでも前へ。

少しでも……。

この場所は、苦手だ。

色濃い力が満ちていて、押し潰されそうになるから。

左の肩口で結んだ長い髪が解れ、汗が滴る頬に張り付く。

けれど、そんなことを気にしている時間など、今のリオにはなかった。

光さえ届かぬ暗い森の中を、ただ黙々と歩き続ける。そうしなければならなかった。

アルフが呼んでいる。

音として、声として、鼓膜を直接揺らすわけではないけれど、哀しいくらいの叫びが胸の奥底にハッキリと響いていた。いま行く。

だから、待ってて！

心の中でそれだけを繰り返しながら、リオは歩き続けた。

そうして、どれくらい歩いただろう。

不意に何かが目の前に立ちはだかった。

脚を止め、様子を窺う。

気配は暫し身動き一つせずリオを見下ろしていた。

やはり来たか。

心の中で小さく舌打ちする。

姿を確認する必要も、ましてや声を聞く必要もありはしない。

全身から漂う色濃い気が、気配の主の正体を如実に物語っていた。ルリアに神が降り立った場所とも言われるこの森は、全ての魔法を無にするだけでなく、不可思議な力に満ちている。

その力の意味を知っているのは、現存する長老達の中でも最古老年の、ごく限られた人達だけだと聞く。

そして今、リオの動きを観察しているのであろう『その人』も、その意味を知る数少ないルリア人の一人と言われている女性だ。

『神護りの御婆』

三千年以上の時を生き、その人生の大半をこの森で独り暮らししている彼女を、多くのルリアの民はそう呼び慣わしている。

できることなら今は逢いたくない相手だったが、この森に脚を踏み入れた以上、それは出来ぬ相談だということなのだろう。

とにかく今は、敵意のないことを示すために心を開き、ただ無心に脚を前へと進めること以外、リオに出来ることは何もなかった。

更に暫く歩くと、広々とした湖が眼前に広がった。ルリアの全ての泉の源流と言われるマチェ湖だ。

リオは一つ大きく溜息を吐き、流れ落ちる汗を右腕で拭くと、眼を細めた。

マチェ湖の湖面が、自ら放つ柔らかな光でに輝いていて眩しかったのだ。

十数年前、まさにこの場所で、魔族と天界の凄惨な戦いが繰り広げられたことなど想像すら出来ないほどに、その光景は美しかった。森の回復力を見せ付けられる想いだ。

リオは疲れきった表情を隠そうとするかのように、両手の平で顔を二回叩き、背筋を伸ばすと、更に歩を進めた。

強い力に遮られ、一歩進むごとに激しい目眩に襲われたが、そんなことに構ってなどいられなかった。

アルフの声は、この先から聞こえてくる。

次第に強まりながら、今ではハッキリと。

ならば、進まねばならなかった。

躊躇いも後退も、今のリオの選択肢の中には存在しなかった。

その時、不意に独りの女性が眼前に現れた。

漆黒のドレスに身を包んだ細身で長身の美しい女性だ。

彼女はブルーグレーの瞳を瞬かせ、暫くの間、じっとリオを凝視していた。

無言のまま、リオは正面から彼女の視線を受け止めた。

強い圧迫感に押し返されそうになりながら、必死に脚を踏ん張る。

やがて、彼女の唇の両端が上がったかと思うと、それは極上の、酷く魅力的な笑みとなった。

同時に、それまでリオを押し包んでいた強い力がふっと消え失せた。

「いらっしやい、天使のリオ君」

急く気持ちを抑え、リオは静かに頭を垂れた。

「お叱りは承知の上で参りました。神護りの御婆様」

「もう！」

女は腰に手を当て、胸を張った。

明らかに不満げな顔つきだ。

「あたしのことは『マチュエラ』と呼んで頂戴って言ったでしょう。女は何時までも若くありたいものなの。貴方みたいな綺麗な子に『お婆』なんて呼ばれるのは女としてのプライドが許さないのよ。わかった?」

「では……」

マチュエラは肩を揺らし、大きな溜息を落とした。

「ハイハイ、わかったわ。意地悪してごめんなさい。貴方はただの、魔法使い養成学校の生徒。……これでいいのよね?」

「はい」

答えてから、リオは深々と頭を垂れた。

「貴女の森を騒がせてしまったことは謝ります。無断で立ち入ったことも。お叱りは、後日、改めて受けに参ります。ですから、どうかお願いします。今だけ、僕を通して下さい」

マチュエラは、更に一步近付いたかと思うと、リオの顎の先に指先でそっと触れた。

「そんなこと、怒ってないわよ」

掠れ気味の高音が、少し哀しげに言った。

「残念ね、綺麗な翡翠だったのに」

閉じたきりの瞼の理由を問うているのだということはずぐにわかった。

だが、今は説明している時間も惜しい。

右手の甲で彼女の指先を払うと、リオは短く言った。

「眼など見えなくとも、感じることは出来ます。それで充分」

「そう」

再び哀しげに呟く。

彼女の意図が解せず、リオは、続けられるであろう言葉を待った。けれど、予想に反し、彼女はなかなか口を開こうとはしなかった。ジリジリと、時間だけが過ぎていく。

森に満ちた濃い霧のような気が波打つように騒いでいる。

それに遮られ、周囲の様子を上手く感じ取ることができないことも、リオを苛立たせる原因の一つだ。

それでも、強く、弱く、アルフの声はこの奥から聞こえる。

それだけは間違いなかった。

相変わらず動こうとしないマチェラの様子に業を煮やし、リオは自分から口を開いた。

「僕になにかご用件ですか？」

つつけんどんというより、切り捨てるような口調。

けれど今は、言い訳する気にもならない。

マチェラの口許に、少し意地悪な笑みが浮かんだ。

「あら、ごめんなさい。急いでいるようね」

「はい、とても。友を探しているので、今日は貴女のお相手をして
いる時間などないんです」

「もう！ これだから、貴方は！ レディの扱い方くらい、今から
覚えておかなかったら、後で山ほど後悔するんだから！」

からかう口調が、爛に障る。

とうとう我慢できなくなり、リオは声を荒げた。

「そんな後悔などいくらでも！ しかし、今この時、彼を失ってしま
ったなら、後悔なんかじゃ済まなくなる！ だから、お願いです
！ どうか、そこを通して下さい！」

「ホント、貴方のその性格って損だわよ。見た目が可愛い分、余計
に冷たく感じちゃうから」

頭痛がしそうなくらい苛立った。

もう限界だった。

礼を失することだとわかっていたが、それすらどうでもいいと思
う気持ちの方が強かった。

彼女を押し退け先へ進もうと一歩脚を踏み出し掛けた、その瞬間。

「ねえ……」

先ほどまでのからかう口調から一転、硬い声音がリオの足を止め
させた。

「貴方が探しているお友達って、黒髪の男の子じゃない？」
愕然とした。

振り返ると同時に、リオは短い問いを口にしていた。

「どう、して……？」

「あら、わからない？」

ブルーグレーの瞳が、窺うように細められる。

その瞬間、怒涛となって胸に流れ込んできたのは、深い哀しみ。

そして、その哀しみは紛うことなく彼のもの。

訝しむ気持ちに連座し、顰めてしまった眉根。

「アルが、……ここに？」

視界の中に、マチェラの姿をはっきりと捉える。

長い睫の奥でブルーグレーの瞳が僅かに揺れていた。

「そう……。彼の名前、アルっていうの」

それだけ言うと、リオの答えを待たず、マチェラは長いドレスの裾を翻してクルリと背を向けた。

「ついていらっしやい」

促され、マチェラの後続く。

その眼前で、湖の畔の一角を形成していた巨大な岩壁が音もなく口を開いた。

瞬間、胸に響く哀しみの色が、より濃くなる。

彼はいる。間違いなく、この奥に。

今や確信となったそれは、いやがおうにもリオを急かした。

マチェラを押し退けてまでも洞窟の中に駆け込もうとしたリオは、けれど、柔らかな感触に進路を塞がれた。

マチェラが突然立ち止まったため、その背中にぶつかったのだと気付き、慌てて一歩後退し掛けたその時、右手を取られ、掌の中に何かを握らされた。

「あげるわ」

指先にあたるのは、硬く冷たい感触。

恐らくは、クリスタル。

彼女が創ったものなのだろうか。

色は……？

せめて色だけでもわかれば、彼女の意図を解することもできようが、今のリオにそれは叶わなかった。

「これは……？」

短く問うたけれど、マチエラは答えてはくれなかった。

再び歩を進める彼女の、まるで独り言のような囁きだけが耳に届いた。

「貴方にあげる。好きにしてください。でも、貴方が本当に黒髪のお友達を大切だと思うのなら、悪いことは言わない。彼には決して触れさせないこと。開けてはいけない禁断の扉の鍵になるかもしれないから」

第9章 純白の影 暗黒の光 No. 1 (後書き)

次回予告…マチュエラに案内され、洞窟の中に入っていったリオ。アルフとは逢えるのか？

「翡翠の鳥は飛び方を知らなくて」は、原則として週一回更新します。

次回更新(予定)日は4月16日(月)！

本連載も残すところ5話となりました。是非この後もうご覧下さい。

第9章 純白の影 暗黒の光 No. 2 (前書き)

「翡翠の鳥は飛び方を知らなくて」は「LURIA」の翡翠の瞳
「空の蒼」の続編です。

第9章 純白の影 暗黒の光 No. 2



第九章

純白の影 暗黒の光



No. 2

洞窟の奥は、外見からは予想すらできないほどに整然とした住居となっていた。

眼は見えなくとも感じることはできる。

どこに何があり、それが命を持っているか否か。

敵か、味方か。

案内された部屋の中を一周、ぐるりと漂ったリオの意識は、ある一点に釘付けとなった。

意識の真ん真ん中に飛び込んできたのは、部屋の一角に設えられたベッドの中で背を丸める人の気配。

外敵に怯え、身を縮めて震える子狐のような……。

アルフ！

間違えるような無の無い、彼の気配。

駆け寄ろうと一歩脚を踏み出し掛けた瞬間、肩にそっと手が添えられ、動きを制せられた。

苛つく感情を抑え、見えない眼で見上げると、マチェラは静かに首を横に振った。

「とても疲れているようなの。貴方の気持ちもわからないではないけれど、……お願い、もう少しだけ休ませてあげて」

『お願い』

今、確かに彼女はそう言った。

衝撃だった。

よもや、彼女の口からそんな言葉が出ようとは思ひもなかったから。

誰にも口外したことはないが、リオは実際、過去に数度、この森

を訪ねている。

けれどその度、追い返されこそしなかったものの、一方的にからかわれるだけで、彼の問いに明確な答えが返ってきたことなど、ただの一度もなかった。

噂では、とても気難しい女性だと聞き及んでいた神護りのお婆。

実際に逢ってみれば、噂ほどの頑固者ではないにしろ、知恵を授けてくれる森の長老のイメージからはほど遠い、破天荒な女性という印象ばかりが強く残っていた。

それなのに、今、彼女はアルフのために『お願い』という言葉を口にした。

驚きだった。

なにが彼女を心変わりさせたのだろう。

否、彼女は何も変わっていないのかも知れない。

アルフという要因が、はたまた別の何かが、いままで表面に現れていなかった彼女の内面を顕在化させただけなのかも知れない。

その原因も理由も、リオにはわからなかったけれど、彼女の言葉がリオをからかうためのものではなく、アルフを気遣う心から発されたものだということだけは信じられた。

とにかく、逢えた。

アルフの無事な姿を確認することが出来た。

その事実だけで、張り詰め続けていた気持ちがゆっくりとほぐれていくのを、リオは確かに感じていた。

マチュエラに促されるまま、リオは隣の部屋へ移動し椅子に腰を下ろしたけれど、その間、一瞬たりともアルフから意識の視線を外すことがなかった。

リオの正面、テーブルに片手を着いたマチュエラが、小さく息を吐く気配が伝わっていた。

「あの子、……貴方の大切なお友達に、間違いはない？」

「はい」返事と同時に素直に頷く。

マチェラは僅かに眉を寄せ、眼を細めた。

「そう。やっぱり、あの子が……」

深い溜息とともに椅子に腰を下ろす。

衣擦れの音でそれがわかった。

遅々とした時間だけが流れていく。

二人とも、暫し無言だった。

アルフは貪るように眠ったまま、眼を覚ます気配すらない。

このまま目覚めなかったら……？

そんな不安が、一瞬、胸を締め付けた。

マチェラは何も言いはしないが、リオだって知っている。

哀しみが余りにも深すぎるがゆえに、その哀しみに心を捉えられ、現実から逃避すべく眠り続ける人がいることを。

ムクムクと頭を擡げる不安を、しかし、首を何度も横に振って追いつかう。

大丈夫。きっと大丈夫だ。

自分勝手に頼りない思いだとわかってはいたけれど、今は自らにそう言い聞かせていないと不安に押し潰されてしまいそうだった。

沈黙のまま流れる時間が酷く居心地悪く、リオは無意識に椅子に深く座り直した。

ふと、眼前のマチェラの肩が小さく震え出したことに気付いた。

と、思う間もなく、押し殺したような笑い声が鼓膜を揺らした。

不快感も露わに訝しみの視線を向けるが、マチェラの忍び笑いはやまない。

「何か……？」

苛立ちを隠すことなく、リオは短く言った。

マチェラは微かに視線だけを上げ、軽く右手を振った。

「あら、ごめんなさいね」

言葉とは裏腹に、全く悪びれることなく、その声は楽し気に震えている。

「あたしも、まだまだイケるんだなあって思ったら、なんだか嬉し

くつてえ」

意味がわからず、リオは眉間の皺を深くした。

それに気付いているであろうマチェラは、忍び笑いに言葉を乗せた。

「マチェラ湖の畔で見つけてね、可哀想だから、ここに連れてきてあげたの。彼、最初は寝返りも打てないくらいに弱りきってたのよ。

あんまり不憫でね、ほんの少し力を戻してあげたの。そしたら……」

再び、今度は先ほどまでよりも明らかに甲高い思い出し笑いが暫く続いた。

「子供っていつでも、やっぱり男の子よねえ。急にあたしに襲いかかってきたのよ。確かに油断はしてたけど、あたしもあっさり押し倒されちゃってえ」

上目遣いに見上げた粘着質な視線がリオに絡みつく。

「彼、可愛いわよねえ。頑なな態度が乙女心をくすぐるっていうのかしら？ お姉さんが、ちょっぴり慰めてあげようかなあ、なんて……」

刹那、頭の芯がカツと熱くなった。

モヤモヤとした感情が、胸の奥から一気に噴き出す。

気付いた時には椅子を蹴って立ち上がっていた。

左手は彼女の胸ぐらをねじり上げ、壁を背にさせて細い喉元に肘を押し当てる。

「……何を、したんです？」

食いしばった奥歯の隙間から言葉を絞り出す。

肘に少しばかり力を入れれば、彼女の首は折れてしまいうに違いない。

自身の行動に驚きつつ、けれど、一旦火が着き爆発した感情を制御することは、今のリオにはできなかった。

これにはさすがにマチェラも驚いたらしい。

笑みが固まり、暫しマジマジとリオの顔を凝視していた。しかし、自らの行動への困惑で力の弱まっていたリオの腕から逃れることは

容易だったらしく、スルリと抜け出すと、口許に手を添えてケラケラと笑い出した。

「いやだあ。あなたもそんな顔するのね。たっのしい」

ハッとした。あからさまな彼女の挑発に、簡単に乗せられてしまった。

彼女流の冗談を冗談として受け流す心の余裕もなくなっていた己の迂闊さを呪い、口内でチツと小さく舌打ちしてから床に視線を落とした。

マチエラは、全てお見通しよ、とでも言いたげに、壁に背を預けると、リオの顔を下から覗き込んだ。

「でもね」

指先でリオの鼻の頭をつんと突く。

「おやめなさい、そんな顔。貴方には似合わないわ。人ってね、嫉妬に歪んだ顔ほど醜いものはないのよ」

頬がカツと、発火しそうに熱を帯びた。

マチエラは再び、今度は少しの困惑を匂わせながら笑った。

「平気よ。あなたが心配するようなことはなにもなかったから。……っていうか、私の胸に顔を埋めたまでは良かったんだけど、あの子ったら、結局そこまでだったのよ。急に動かなくなるから、変だなあって思ったら……」

窄めた肩の高さで両手をヒラヒラと振る。

「酷いっतरらないのよ。そのままぐーぐー寝ちゃったたの。失礼しちゃうわよね。せっかくの豪華な据え膳だったのに。貴方が来なかったら、あたしの方から襲ってたかも。残念だったわ」

どこまでが本心で、どこからが冗談なのか。

イライラと波立つ心は静まらない。

そんなリオの気持ちを知ってか知らずか、マチエラは、わざと大袈裟に震えてみせた後、自分の両手で自分の臍を抱き締めた。

「だあいじょうぶよお。あたしは、身も心もあの方に捧げた女よ。いくら可愛い男の子だからって、そう簡単に操を捧げたりしないわ

よ。それに……」

次いで、つまらなそうに大きく溜息を吐く。

「あの子の瞳に私は映っていなかった。ホント、興醒めもいいところよ。まったく、バカな子よね。こんな美女が誘ってるっていうのに」

瞬間、全身の力が抜けた。

頭の中が冷え、それと相反して、今度は両の頬が熱を帯びた。

なんという失態。

気まずくて、気恥ずかしくて、リオは顔を逸らして俯き、そのままの勢いでぺこりと頭を下げた。

「すみませんでした。つい……」

「いいのよお。気にしないで。けしかけたのは私の方だし」

腕を組むと、細い指先を頬に添えた。その口許は柔らかく微笑んでいた。

「お母さんでも思い出したのかしらね。凄く安心した顔してた。だから、起こせなくて。それから、ずっと眠ったまんまよ」

まるで独り言のように呟くと、マチエラはドレスの裾をヒラリと翻し、ゆっくりと椅子に腰を下ろした。

どうして良いかわからず、暫し佇んでいると、悪戯っぽい視線を感じた。

微かな忍び笑いが聞こえ、その方向に顔を向ける。

「いいものを見せてもらったわ。貴重な経験ね」

マチエラの言葉に、再び頬が紅潮した。

それを隠したくて、俯いたまま椅子に腰掛ける。

彼女は、いったい何を知っているのだろう。僕の知らない何を……？

そう思うと、胸がキュンと痛んだ。

きつと、問うたところで彼女は何も教えてはくれないだろう。

色の薄いブルーグレーの瞳を読み解くことは、今のリオにはできない。

唇を軽く噛み、リオは隣の部屋で眠り続けるアルフのことを思った。

アルフの苦しみを思った。

辛くて情けなくて、酷く悔しかった。

僕はいったい何をしていたんだ。

彼がこんなにも苦しんでいた時に。

両の手を膝の上で硬く握る。

抑えようとしても、震えが止まらない。

マチェラに気付かれないようにと、それだけを願ったが、それすら無駄だったらしい。

小さな吐息に続き、優しい声音が降ってきた。

「今日はもう遅いわ。この森の中を独りで動き回って良い時間じゃない。今夜はここに泊まってらっしゃいな」

「でも……」

「眼鏡のお友達なら大丈夫よ。よく眠っているわ。貴方達が帰る時までは、きっとこのまま、良い夢を見ているに違いないわね」

全てお見通しか。

そう思った瞬間、肩の力が抜け、同時に苦笑が零れる。

所詮、子供の自分にできることなどなにもありはしないのだ。

こうして何もできないまま、心配に顔を曇らせ、座り込んでいるくらいしか。

「どうせ、今夜は眠れないでしょう？　なら、少し話し相手になってくれないかしら？　お礼に美味しいお茶をご馳走して差し上げよう」

そんなマチェラの誘いに、リオは小さな頷きで答えた。

第9章 純白の影 暗黒の光 No. 2 (後書き)

次回予告…マチュエラとの会話の中で知らされるLURIAの真実。
アルフは目覚めるのか？

「翡翠の鳥は飛び方を知らなくて」は、原則として週一回更新します。

次回更新(予定)日は4月120日(金)！

本連載も残すところ4話となりました。是非この後にもご覧下さい。

第9章 純白の影 暗黒の光 No. 3 (前書き)

「翡翠の鳥は飛び方を知らなくて」は「LURIA」
「翡翠の瞳
空の蒼」の続編です。

第9章 純白の影 暗黒の光 No. 3



第九章

純白の影 暗黒の光



No. 3

ベッドを用意するから少し横になった方が良いとのマチュエラの申し出を丁重に断り、リオはアルフの眠っているベッドに背を預け、床に直接座り続けていた。

彼は、まだ目覚めない。

それでも、ここにいれば彼の吐息を感じることできるし、目覚めた時に一番に「おはよう」の挨拶をすることもできる。

だから、この場を離れたくなかった。

正直、今までどおりに会話ができるかどうか、自信はない。

離れていた時間の壁は、それくらいには厚いと思えた。

いっそ、自分が自分でなかった時の記憶など無くなってしまえばよかったのだけれど、事実はどうじゃない。

全て覚えている。

散々心配を掛けてしまったのだから、「おはよう」の挨拶よりも先に掛けなければならぬ言葉はたくさんあるし、ありすぎるほどだけれど、だからこそ、何から話せばいいのかわからなかった。

けれど、そんな諸々のことなど後回しにしても良いと思えるくらいに、彼の安堵した顔を見たかった。

怒った顔でもいい。

思いつきり叱られて、一発くらい殴られたっていい。

いや、いっそ、そうして欲しい。

そうしてくれれば、やっと帰ってこれたのだということを実感できるに違いないから。

だから今は、一時だって離れたくはなかった。

そんなリオに、約束だから、とマチュエラが差し出してくれたのは、

カップになみなみと注がれた香りの良い紅茶。

それを両手で包み込むように握りしめ、薫りを嗅いでいると、やっと気持ちが落ち着いた。

パチパチと爆ぜながら燃える暖炉の火は温かく、凍った気持ちまでも解してくれるように感じられる。

無言の二人の間に、緩やかな、けれど、酷く重苦しい時間が流れていく。

ふと、嗅ぎ慣れない薫りが鼻孔を擦り、顔を上げた。

空気の流れに意識を集中する。

どうやら、マチェラの煙らせる煙管の煙らしいと推測した。

彼女は一息深く吸い込むと、ゆっくりと煙を吐き出した。

さほど煙たくないのは、通気口へ吸い込まれていくからか。

呼吸音に混じり、歯が煙管を噛る音がした。

と、マチェラがポツリと言った。

「闇が、……復活、したようだね。彼、襲われたのよ」

無意識に、肩がビクリと大きく震えた。

『彼』。

それが、今、貪るように眠り続ける黒髪の少年以外を指しているのならば、どんなにいいかと、リオは思った。

けれど、それは有り得ないということもわかっていた。

そしてそれが、眼を背けてはいけない真実であるということも。

「やはり……」

それ以上は言葉にならなかった。

微かな衣擦れの音です。

興味を惹かれたのであろうマチェラが身を乗り出したらしい。

「貴方、何か知っていて？」

「真に闇が復活したのならば、奴等はまず間違いなく、この森、そしてマチェ湖を我がものとせんとするでしょう」

視線は床に落としたままりオが答える。

マチェラは大きく溜息を吐き、煙管を置いた。

「そう。奴等にとっては、この森こそが誕生の場所。聖地だもの。……嫌な奴等。奴等は森を荒らし、命を奪う。でも、この森はそんなことのために生まれたんじゃない。森を荒らす奴は、何人たりとて許さない。それが神護りとしての私の役目でもあるから」

マチェラの視線が、アルフへと注がれる。

「彼の心がこんなにも傷ついた原因と闇の復活との間には、何か関係があるんじゃないかしら」

恐らくは……。

心の中だけで呟き、頷いた。

その眠りを護るように牀の上に掛けられたキルトの中、膝を抱え、背を丸めて眠り続けるアルフ。

葉草の力を借りて眠っていてさえ辛い夢に苛まれているのだろうか、時々呻くような声さえ発する。

何が、アルフをそんなにも傷付けたのだろう。

故郷で、彼は何を見、何を聞き、何を考えたのだろう。

その解を推量ろうとすれば、簡単に出来る。

けれどリオは、敢えてそれを拒否した。

否、拒否しようとした。

自分の推測自体が間違いであって欲しいと、それが仮定でしかない、そんな望みに縋っていた。

常に悪い方へ悪い方へと考えてしまう自分自身の思考回路を、これほどに呪ったことなどなかった。

一度、二度と、今度は本当に首を横に振ってみた。

それは、自分の心に対する最後の抵抗。

けれど……。

リオは笑った。

色濃い自嘲を含んだ笑み。

マチェラがそれに気付かぬふりを通してくれたことが、リオにとっての救いだった。

「リオ。忠告よ。神護りの御婆からの忠告」

マチエラの声は酷く淡々としていた。

「お友達を大切だと思うのなら、貴方が今、何を考えていようと、彼の傍を離れてはいけないわ。無理矢理にでも傍にいなさい。そうでなければ、貴方、もう二度と彼に逢えなくなるわよ」

「え？」

「彼、……死ぬかもしれない」

リオの顔からさっと血の気が引いていった。

頭の中が真っ白になった。

ただ無意識に腕を伸ばし、指を伸ばし、そこに友がいることを確認した。

幻ではないのか？

そう自分自身を戒め、何度も確認した。

指先を伝う感覚だけからでも、リオにはハッキリと見ることにできた。

彫りの深い端正な、歳よりも大人びた顔つき。

少し浅黒い肌の色。

濡羽色をした、前髪だけ長い髪。

……アルフだ。

間違い無く、僕の大切な友達。

消えてしまうことが怖くて、腕の中にそっと抱き締めた。

温かった。

そのことが、リオを余計に哀しくさせた。

この温もりの中心にある心が、誰よりも綺麗で、何よりも傷つきやすいことを一番知っているのは自分。

そう思っていたはずなのに……。

そんなのは、ただの奢りでしかなかった。

欺瞞でしかなかったんだ。

彼を護っているつもりで、彼に一番寄り掛かっていたのは自分。

心配などかけないつもりで、何時だって一番不安にさせてきたのは自分。

足枷にしかねない、自分。

背筋を言い知れぬ悪寒が這い登っていく。

そんなリオを見かねてか、震える背中に優しい声が掛かった。

「そんなに自分を卑下するものじゃないわ。貴方に彼が必要なように、彼にとっても貴方が必要。貴方達は、お互いを必要としあっている。失うわけにはいかないのよ。この世界のためにもね」

アルフを起こしたくなくて、身動き一つすることなく、リオはマチェラの言葉に耳を傾けた。

それを背中の様子から感じ取っているのだろう、マチェラの言葉は蕩々と続く。

「さつき貴方に渡したクリスタルには、彼の記憶の一部を閉じこめてあるの。私がどうしてもそんなことをしたのか、貴方はあのクリスタルをどうすべきなのか、……言わなくても、わかるわね？」

アルフを抱き締めたまま、リオは無言で頷いた。

「朝になったら連れて帰っていいわよ。ハクで送ってあげる。その後、……彼が目覚めた後で、貴方がどうしても全てを訊きたいと思うのなら、あのクリスタルを彼に渡して。でもそれは、彼の心をこの世界に繋ぎ止めておくに充分な言葉を用意した後にしてね。彼の心は薄い硝子のよう。今にも壊れそうだわ。人ってね、そんなに強い生き物じゃないのよ。心が壊れてしまったら、人は生きていけないの」

続く言葉は呟きのようで、リオの耳にさえ微かにしか届かなかった。

「独りきりで苦しんでいても、それ以上、先には進めないものよ。分かち合うことで、……お互いを支え合うことで、初めて歩き出せる。人って、そういうものじゃないかしら？ 共に生きるこのとき、きる相手が居るといっただけでも、人は救われ、癒されるものだよ」

指先で煙管を弄びながら、ゆっくりと紅茶を口に運ぶ。

「ああ、嫌ね。こういうのを老婆心っていうんだわ。歳は取りたくないものねえ」

その声音は、
酷く淋しげだった。

第9章 純白の影 暗黒の光 No. 3 (後書き)

次回予告…眠り続けるアルフ。リオ、そしてルーと再会できるのか？

「翡翠の鳥は飛び方を知らなくて」は、原則として週一回更新します。

次回更新(予定) 日は4月27日(金)！

本連載も残すところ3話となりました。是非この後にもご覧下さい。

第10章 生きられる場所 No. 1 (前書き)

「翡翠の鳥は飛び方を知らなくて」は、「LURIA 翡翠の瞳
空の蒼」の続編です。

第10章 生きられる場所 No. 1

◇◇◇ 第十章 ◇◇◇ 生きられる場所 ◇◇◇ No. 1

そこは、まるで一面に墨を流したような真っ暗な闇に覆われていた。

上も下も、右も左もわからない、光のない空間。

その中を、アルフはゆらゆらと漂っていた。

疲れていた。

酷く疲れていた。

気持ちが始えきっている身には、己の肉体の存在を意識することさえさえ煩わしかった。

四肢を宙に投げ出し、意識を四散させる。

もう、何も考えたくない。

自由になりたい。

全てから解放されたい。

意識としてあるのは、そんな願っただけだった。

その時、どこからか、何かが聞こえたような気がした。

初めのうちは気のせいだろうと一顧だになかったが、やがてそれが意味のある言葉を紡いでいるのだと気付くと、無視し続けるわけにもいかなかった。

アルフは嫌がる意識を耳に集中してみた。

(ドコダ、ココハ?)

どこからともなく聞こえてくる『声』は、確かにそう呟いていた。頭を動かし、声の源を捜すけれど見つからない。

それは鼓膜を介さず、直接頭の中に響いてくるらしい。

しかも、見えない壁に反響しているようで、酷くくぐもっていて聞き取りづらい。

(ココハドコダ? オレハ、ナニヲシテイル?)

《ニゲテイルノサ》

突如、別の声が割り込んできた。

今度は、少し明瞭な声。

でも、同じように意識の奥の奥で喋っているらしい。

頭が痛い。

二つの声は、主人であるべきアルフを無視したまま会話を続けた。

(ニゲル? ナニカラ?)

《ジブンジシンカラ》

(ナゼ?)

不意に、明瞭な声が沈黙した。

頭が、……痛い。中心から引き裂かれるようにズキズキと痛む。

痛みは暫くの間続き、それがふっと消えると同時に、再び『二人』

の会話が始まった。

(ソウダ、オレハ、ミタンダ)

《……ナニヲ?》

再び訪れた沈黙。

だが、今度は長くは続かなかった。

低く、力無く響く声音が答える。

(……ワカラナイ。オモイダセナイ)

《ナラ、ワスレテシマエバイイ》

(ソウダ、ワスレルンダ、スベテ)

《ソウスレバ、ナニモカワラズニスム》

(オレジシンヲ、ウシナワズニ、イラレル……)

その瞬間、今まで床だったはずの空間が抜け落ちた。

足許を支えていたものがなくなり、まっさかさ闇の中に落ちていく。

糸の切れたタコのように不安定な自分。

けれど、それでいいと思った。

もう少し。

あと少しで、全てから解放される。

それは、酷く甘やかな、永久の安らぎへの誘い。
これでいい。

これで全てを忘れてしまえる。

そうすれば、何も変わらずに済むんだ。

酷く心が安らいでいく。

誘われるまま、より深い闇へと指を伸ばし掛け……。

その時。

耳許で微かに何かが響いた。

さっきまで聞こえていた声とは違う『何か』は、まるで光のように一瞬だけ瞬いて、直ぐに消えた。

ハッとした。

通り過ぎた『何か』を手繰る寄せるように意識を集中させる。

と、今まで朦朧としていた思考が勢い良く回転し始めた。

俺は、いったい何をしようとしていたんだ？

忘れてはいけない『何か』を、今の苦しみから逃れるためだけに、あっさりと手放してしまおうとしていたのか？

思考を停止し、自我を捨て去ってまで。

自身に対する罵倒の言葉を頭の隅で繰り返しながら、耳を澄ます。
すると。

(アル……)

今度はハッキリと聞こえた。

酷く懐かしい、あまやかな声音が、耳の奥、意識の奥を、柔らかく刺激する。

頭を中心かカッと発火した。

弛緩していた四肢に再び血が通い始める。

閉じようとする瞼を無理矢理こじ開け、手足を少しずつ動かす。

(アルフ)

また聞こえた。

刹那、胸の奥がキュッと締め付けられ、不可知の熱いものが頬を

次々と伝い落ちていくのを感じた。

声は耳許で優しく囁き続ける。

（帰ろう、アル。僕等の家へ）

軀を曲げ、首を回すと、今まで一面の闇だった空間の一点に、淡い光がちらついているのが見えた。

暖かな、月の光のように柔らかな、ひどく優しい光だった。行かなきゃならない。

俺には、護らなければならないものがあるんだ。

そんな言葉で己を叱咤し、光に向かって必死に手脚をばたつかせた。

最初は虚ろだった淡い光は、徐々にその光彩を増し、強さを増して、アルフの前にあった。

光に向かって、必死に腕を伸ばす。

それはすっぽりと腕の中に収まった。

闇の中で全てを投げ出そうとした時とは別の、温かな安らぎが心の奥底にまで染みこんでいく。

その温もりをもっとよく確かめたくて、手放したくなくて、抱き締める腕に力を込める。

それはひどく柔らかくて、温かくて、これ以上力を込めたなら壊れてしまいそうなくらい危なげだった。

そっと頬を寄せる。

すると、光は淡く輝く人の形を成した。

淡い月の光の色をした柔らかな長い髪。

リ、オ……？

呟きは余りにも微かで、きっと声にはならなかっただろう。

けれど、腕の中の温もりは、小さく、けれど何度も頷いてくれた。そうだ。

ここが俺の居場所。

俺が決めた、俺の護るべき場所。

そう思った瞬間、温かな安堵感に包まれ、アルフは穏やかな眠り

の深淵へと誘われていった。

※

飛び起きるとは、正にこういう状態を指すのだろう。

怖い夢でも見ているのだろうか、アルフは酷く魘されていた。

流れ落ちる汗を拭っていたタオルがそろそろ役に立ちそうにないと判断したルーが、それを交換すべく立ち上がった、その瞬間、アルフが上掛け布団を跳ね除け、半ば立ち上がらんばかりの勢いで半身を起こしたのだ。

三対の視線が驚きに見開かれて交差し、……その内の一対を『視線』と呼んでも良ければ、だが……、お互いを見詰め合う。

しかし、それはほんの一瞬のこと。

瞳をスッと細め、ルーは柔らかに微笑んだ。

「アルの寝ぼすけ。もうすぐお昼だよ」

「ルー……？」

確認するように呟きつつ、アルフは周囲を見回した。

温かな陽射しが出窓越しに差し込んでいる。

春の訪れを感じさせる明るい光だ。

アルフは、まだ混乱しているのか、何度も眼を瞬かせている。森の中で倒れ、眠っている間に、自分の部屋まで運び込まれたのだ。

驚くのも無理はない。

そんなアルフの様子を確認し、少なくとも躰の方は大丈夫そうだと安堵したルーは、遣りかけの仕事を思い出した。

タオルを取りに行こうとしていたのだ。

次いで、汗だくの今のアルフに必要なのは、タオルよりも着替えだと思い直し、部屋の隅のタンスへと脚を向け直した途端、突如鼓膜を振るわせた素っ頓狂な声音に驚き、振り返った。

「……って、ここ、どこだ？ 俺、シエン村に行ったはずじゃなかったのか？ ジェンダ爺さんは？ 俺はいたい……？」

「やだなあ。なに言ってるの？ 自分の家がわかんないの？」

「……家？」

「そうだよ。ボク等の家じゃないか」

少し呆れたという態を装い、ルーは言った。

アルフが再び視線を巡らせる。

木枠の窓。差し込む温かな陽射し。

丸太の壁。淡いグリーンのカートン。

見慣れた光景を一つひとつ確認しているらしい。

「そっか……」

大きく息を吐く。

なんとか理解してくれたらしいということは、その声音と、落ちた肩の様子でわかった。

タンスから着替えを引っ張り出しながら、何気なく問い掛ける。

「ねえ、アル、お父さんとお母さんに逢ってきたんでしょ？ お

元氣だった？」

「え……？」

「なあんだ、逢わずに帰ってきちゃったの？」

わざと大袈裟に言った後、ルーはふと不安になった。

アルフの顔色が冴えなかったからだ。

「どうしたの、アル……？」

「俺……」

アルフは右手を額に当て、数度、頭を横に振った。

「よく、覚えてないんだ。村の入り口をくぐったのは確かなんだ。

でも、気付いたら……」

「リオが戻ってくることに、なんとなくわかったんじゃない？ だか
ら、すぐに引き返してきたんだよ」

反射的に、ルーはそう言った。

無論、なかなか気付かない鈍いアルフに業を煮やして、という意
図も働いていた。

瞬間、弾かれたように顔を上げ、部屋の隅をじっと凝視したアル

フの視線の先には、さっきから微動だにもせず、ちんまりと座り続けるリオがいる。

彼の姿を暫し見つめた後、アルフは納得の態で「……そうか」と、ポンと両手を打った。

が、次の瞬間、その顔色がさっと変わった。

「……って、俺のことなんかどうでもいいんだよ!」

「リオ!」

二つの声が見事に重なった。

反射的に肩を揺らし、背筋を伸ばしたリオは、ほんの少し唇の端を歪め、決まり悪そうに小首を傾げた後、遂には諦めたというふう
に、こちらに正対した。

アルフは布団を跳ね除けて勢いよく歩き出し、リオの肩を掴みかけ……、けれど、その直前で躊躇したように一歩身を退いた。

持て余した手をベッドの背を乗せ、佇んだままりオを見下ろす。

「……大丈夫なのか? 何も、されなかったか?」

リオは小さく笑った後、コクリと頷いた。

その微笑みは、妙に大人びていて、……とても綺麗だった。

「うん、大丈夫。心配掛けて、ほんと、……ごめんね」

少しだけ竦めた肩が、酷く華奢に見えた。

「そっか……」

アルフの全身から、スッと力が抜けていくのがわかった。

次いで、ベッドに座り込む。

「よかった。ホントに、よかった……」

背中を丸め、両手の中に顔を埋める。

かつて、これほどに力ない彼の姿を見たことがあっただろうか。
やはりまだ、躰の方が本調子ではないということか。

次いで訪れた空虚な沈黙。

ずっと待ち望んでいた瞬間のはずなのに、それを素直に喜ぶこと
のできない自分を明確に認めていたルーは、

アルフの体調を気遣いつつも、躊躇いがちに、さっきから気にな

つていた問いを言葉にした。

「ねえ、リオ。それ、本当なの？」

斜め横からじっとリオを見据えたままの問いは、自分でも驚くほどに淡々としていた。

「本当に、何もされなかったの？」

アルフは訝しむように眉根を寄せ、顔を上げた。

そしてリオは、……俯いたまま。

振り返ろうとすらしない。

さっきから感じていた違和感が、明確な疑問の形を為して、今、ルーの唇を動かし続けていた。

「なら、どうして？」

言葉にしたなら、その瞬間、それが現実になってしまいそうで怖かった。

「どうして、さっきから、眼を、……開けないの？」

刹那、アルフはベッドから腰を浮かし、リオの顔を覗き込んだ。

リオは、その視線から隠れるように俯いたが、近付いてきたアルフに顎を捕えられると、それ以上は逆らわなかった。

「リオ？　おい、リオ！」

呼びかけつつ、鼻の先が触れそうなほど顔を近付ける。

それでもリオの瞼は、……開かない。

「お前、まさか……」

アルフの声音は震えていた。

リオは顎に掛かる手をそっと退け、再び小さく笑った。

「此処に戻ってくるための代償なら、安いものだよ」

ルーの心の中で何かが音を立てて罅割れた。

こめかみが痺れ、頭の中で火花が散った。

と、次の瞬間、それは真っ白な世界へと変貌した。

「……冗談じゃ、ない……」

アルフが呟いたが、それを黙って聴き続けるだけの気持ちの余裕が、今のルーにはなかった。

胸の奥底を焦がす怒りに、爆発する感情を抑えきれなかった。

「冗談じゃないよ！ それって、なんなんだよ！」

付けば、ルーは半ば悲鳴のように叫んでいた。

しかし、一度口にしてしまったことで火のついた感情は、完全に自制心を失っていた。

「ひどいよ！ あんまりじゃないか！ 勝手に連れ去っておいてさ、戻するための代償って、いったいなんなんだよ！」

「ルー……」

驚いたアルフの顔が視界の隅にある。

だが、それでどうなるものでもなかった。

こんなふうに感情を爆発させたのは初めてだったかもしれない。

それくらい、ルーの怒りは頂点に達していた。

「ボク等がどれだけ心配したと思うの！ リオを連れ戻す手掛かりが見付かるかもしれないからって、アルなんか、辛い思い出しかないう故郷にまで行った。ボクは、……そりゃ、ボクは何にもできなかったけど、毎日まいにち、すっごく心配したんだ！ それなのに……」

喉が詰まり、一瞬、言葉が途切れた。

第10章 生きられる場所 No. 1 (後書き)

次回予告…二人の許に戻るため、視力を失ったりオ。アルフとルーは？

「翡翠の鳥は飛び方を知らなくて」は、原則として週一回更新します。

次回更新(予定)日は5月2日(水)！

本連載も残すところ2話となりました。最終話に向けて頑張ります。是非この後もお覧下さい。

第10章 生きられる場所 No. 2 (前書き)

「翡翠の鳥は飛び方を知らなくて」は「LURIA」の翡翠の瞳
空の蒼」の続編です。

第10章 生きられる場所 No. 2

◇◇◇ 第十章 ◇◇◇ No. 2

ついさっきまでは、リオに掛ける労いの言葉を頭の中で整理し、一番良い語彙を選び出し、何度も反芻していたはずなのに。もうダメだった。

感情ばかりが昂ぶり、頭の中はグチャグチャで、何が言いたかったのか、自分でもわからなくなってしまった。

なんなんだ、ボクは！

こんなの、見っても無さ過ぎる！

羞恥心が、混乱に拍車をかけた。

「なのに、朝起きたら、リオがアルを連れて戻ってきてさ。ボク、凄く嬉しくて、でも突然だったから凄くびっくりして。……ホントは色々訊きたかったけど、アルが眠ってるから、眼が醒めるまで待っててってリオに言われて……。だから、ボク、ずっと待ってたんだよ！　なのに、いざアルが起きたら、リオは……。まただ！　また、何も話してくれないんだ！　そんなふうには、辛いことや哀しいこと、全部、自分の中にだけ閉じ込めちゃってさ、いつも独りきりで我慢しちゃうんだ！」

論点が完全にズレ、全く別の次元へと向かっていることはわかっていて。

これじゃあまるっきり、子供の癪癪と同じだ。

それでも、悔しくて哀しくて堪らない気持ちは抑えきれなかった。誰よりも一番心配していたはずなのに、自分だけが除け者にされるなんて堪えられなかった。爆発の頂点に達した感情は、この場には全く相応しくない、心の奥底にしまいこんでいるはずの幼稚な自尊心まで顕わにしてく。

「どうしてだよ！　ボクだって、もう一人前なんだ！　いつまでも

泣き虫のルーじゃないんだ！　少しはボクのこと頼ってよ！　辛い時は辛いつて、泣き言くらい言ってよ！　そうしてくれば、ボク、今度そこ君を護ってみせる！　校長先生に一生懸命頼んでさ、天上界に連れて行ってもらって、君に酷いことした奴等、とっちめてやる！　だから……」

必死に言い募る。

しゃくりあげながら、それでも、そんな情けない自分を認めたくなくて、必死に何かを言おうとした。

けれど、もう、……そこまでだった。後は涙のせいで呼吸が乱れ、ちゃんとした言葉にすらならなかった。嗚咽が漏れるだけだった。その時。

「ありがとう、ルー。僕はいつだって君を頼りにしているつもりだよ。でも、ね……」

伸ばされた腕、細い指先が、そっと頬に触れた。

「いつの間に、こんなに強くなっちゃったのかな。正直、少しだけビックリしてる」

温かった。

リオの温もりは、以前と変わらず、とても温かった。

余計に涙が溢れ出し、とまらない。

さっきまでの勢いは何処へやら、ルーは急に恥ずかしくなってしまい、四つん這いでベッドをよじ登ると、アルフの背後に隠れた。

アルフはベッドに腰掛けたまま、ルーの背中をそっと撫でてくれた。

「本気で聴けよ、リオ。ほんとなら、こんな言葉じゃ全然足りないくらいなんだから」ボソリと呟く。

「うん、ちゃんと聴いてる。全部、見ていたから」

リオは小さく頷き、次いでそっと微笑んだ。

「天上界に連なる者にとって、両の瞳は力の源。だから、両の瞳を失った僕は、同時に殆どの力も失ってしまった。今の僕は、養成学校で学んだことを為すのが精一杯でしかない。でもね、それでも、

……例え全ての力を失ったとしても、此処に戻ってくることは変えられなかったんだ。僕の名前を呼んでくれる懐かしい声。懐かしい響き。何千回、……ううん、何万回、耳の奥に呼び覚ましたかしのれない。もう一度、君達の声で名前を呼んで欲しくて、ただそれだけのために、僕は此処に帰ってきた。もう一度、君達に逢いたかった。どうしても、逢いたかったんだ。そのためには、僕は、僕の全てを捧げてでも良いと思ったから」

アルフの背に隠れ、その言葉を聞きながら、ルーは酷く嫌な予感に苛まれた。

もう一度？

もう一度って……？

それって、……どういうこと？

「リオ、何言ってるの？ もう一度って、どういうこと？ 帰ってきたんでしょ？ もうどこにも行かないんでしょ？」

それは、思わず口を吐いて出た問いだった。

しかしリオはビクリと肩を震わせるだけで、何も答えてはくれない。

ルーの不安は弥が上にも増していった。

「ねえ、リオ。ちゃんと答えてよ！ ずっとここにいるんでしょ？」

だから、問い詰めるより他にしようがなかった。

「今度こそ、ボクが必ず護るから！ 意地悪な奴等がやって来たって、もう二度と、絶対に君をいかせたりしないから！ ねえ、リオ！ ちゃんと答えてよ！」

なのに、リオは俯いて口を噤んだままだ。

業を煮やし、ルーはベッドから飛び降りようとしたが、それをアルフが引き止めた。

「お前、……何考えてる？」

低いアルフの声音は、抑えてはいるが、ルーの憤りを引き継いだように色濃い苛立ちを滲ませていた。

アルフとルーの視線の先で、リオは暫し、戸惑うように、考え込むように俯いていたが、やがてゆっくりと顔を上げた。

「俺は、……開かれないままに。」

「二人に、聴いてほしいことがあるんだ」

ルーは呆然とリオを凝視し続けた。

「なんだよ、それ。どういうこと？ またどこかへ行っちゃうなんて言わないよね？ さよならを言いに来たなんて言わないよね？」

やっと絞り出した言葉に、しかし、リオは数度、首を横に振って答えた。

肩口で結ばれた金色の髪が揺れ、サラサラと音を立てる。

「僕がここにいられるのか、否か、それを決める権利は、僕にはない。決めるのは、……君達だ」

「権利って、なんだよ」

改めて顔など見なくとも、すぐ隣りで響いた声音の主が酷く苛ついていることくらいわかる。

アルフは、感情の滾りを深い溜息で打ち消した。

「話したいって言うんなら、聞いてやろうじゃないか」

「アル！」

ルーの抗議の声は、けれど、酷く穏やかにアルフのそれに封じられた。

彼は一度だけ首を横に振った。

「これからリオが話すことが、例えどんな内容であろうとも、リオがそれを心から望んでいるのなら、俺達に邪魔することなんかできやしない。俺達は友達なんだから。……そうだろうか？」

「でも……！」

「その代わり、俺達が納得できるちゃんとした理由、反論なんかできないくらい整然とした立派な理由がない限り、俺達の前から消えるなんて話は聴かない」

一対の漆黒は、真っ直ぐにリオを捉えていた。

「そんな話しやがったら、その場でひっぱたいて、縛り付けてでも

此処からは出さない。わかってんだろうな」

「理由なら、……ある」

喉が詰まりそうになりながら、リオは言った。

閉じた瞼を縁取る長い睫が震えていた。肩が、震えていた。

「ルー、アル。僕等、約束したよね。この家で一緒に暮らそうって、そう決めた時に、約束したよね。隠し事は絶対にしないって。でも……、ゴメン。僕、君達にずっと隠していたことがあるんだ」

深くて長い溜息を一つ零してから、リオは決心したように言葉を継いだ。

「それは、僕の生まれに関すること。本当はね、僕自身、ずっと信じられなかった。そんなことあるわけがないって思ってた。でも、……今度のことで確信しんだ。僕は、この世界で生まれたんじゃない。僕は……」

「リオ」

それは静かな、……とても静かな声。

アルフだった。

彼はリオを見つめたまま、ゆっくりと首を横に振った。

瞳の奥に先ほどまでとは違う、深い労わりの色が浮かんでいることに、すぐ傍らにいるルーは気付いていた。

「そのことなら、言わなくていい。言う必要のないことを、隠し事とは言わないんだ」

「そうだよ、リオ。ちゃんと、こうして戻ってきてくれたんだからルーは同意の言葉に力を込めた。」

第10章 生きられる場所 No. 2 (後書き)

「翡翠の鳥は飛び方を知らなくて」は、いよいよ次回が最終回です。
次回更新(予定)日は5月7日(月)！

是非この後もお覧下さい。

第10章 生きられる場所 No. 3 (前書き)

「翡翠の鳥は飛び方を知らなくて」は「LURIA」の翡翠の瞳
空の蒼」の続編です。

第10章 生きられる場所 No. 3

◇◇◇ 第十章 生きられる場所 ◇◇◇ No. 3

リオは微かに小首を傾げたが、次いで納得したというように口許を僅かに歪めた。

「校長先生から、大体のことは聴いてるんだったよね。でも……」
彼は項垂れるように俯き、何度も何度も首を横に振った。

その行為は、安直な解決に逃げようとする自分自身を戒めているかのように、ルーには見えた。

「それじゃ、ダメなんだと思う。君達が何を知っているのか、僕が何を伝えたのか、僕はそれを、ちゃんと知っていなくちゃダメなんだと思う。それに……」

やつれた細い顎の線が微かに震えた。

「それに、今言わなければ、もう二度と言えなくなってしまうかもしれない。僕は君達が思ってくれているよりもずっと臆病なんだから」

リオが戻ってさえくれば、彼がいなかった数ヶ月間の空白なんて、すぐに埋められる。

すぐに元通りの生活が戻ってくるんだと思っていた。
けれど、それは単なる思い過ごしでしかなかったのだろうか。

リオを奪い去った数ヶ月という歳月は、三人の心の中に深くて大きな、消えない傷を生じさせていたのだということを、ルーは今、改めて感じていた。

空白の数ヶ月は、ルーが思う以上に思い意味を持っていたのだと。それが酷く切なくて、哀しかった。

「僕はね、……僕は、この世に生を受けた時、僕は祝福されなかった。僕の本当の故郷は、生まれたばかりの僕を、いらないと、……必要ないと、生きる価値のない命だと断じて、ルリアの地に墜とし

た。僕は、生まれてきたことそのものが、罪悪なのだそうだよ」

「ざい、あく……？」

ルーは我知らずそう言ってしまい、ハッとして口を噤んだ。

生まれてきたことが罪悪？

それっていったいどういうこと？

リオが何かをしたって言うの？

……ううん、嘘だ！

全部嘘だ！

奴等がリオを手に入れるためにでっち上げたデタラメだ。

リオは嘘を吹き込まれたに違いないんだ！

グルグルと巡る思考は、悪い方向へ悪い方向へと墜ち込んでいく。そして、その間も、リオの言葉は続いた。

「僕が戻ってきたのは、君達に伝えたかったから。どうしても伝えなかったんだ、もう一度だけ」

一つ息を吐くと、そっと微笑む。

「大好きだよ。ほんの少しの時間だったけど、君達の家族になれて、僕は本当に幸せだった。ありがとう。本当にありがとう。そして、……どうか忘れないで。僕のことを忘れないで。愉しかった思い出を、最後に辛いものにしまった僕を怨んでくれてかまわないから、どうか覚えていて。僕が確かにこの世界に存在したのだということ、他のみんなが忘れても、どうか君達だけは忘れないで。それだけで僕は、……君達の心の中に生きていられるだけで、僕はずっと幸せでいられるから」

その時、悪循環に陥ったルーの思考を止めてくれたのは、短いアルフの言葉だった。

「言いたいことはそれだけか？」

言い捨てるや、ベッドから立ち上がった。

「なら、飯にするぞ。腹減った。ルー、手伝えよ」

それは、いつも通りの口調だった。

さっさと部屋を出て行こうとするアルフの背中に、今度はリオの、

半ば悲鳴に近い声音が追い継る。

「アル！　ちゃんと僕の話を……」

「ちゃんと聞いたさ。下らない話だった」

「くだらなくなんかない！」

居間に通じるドアを押し開けたところで、アルフの脚がぴたりと止まった。

彼はゆっくり振り返ると、開いたドアに背を預け、腕を組んだ。

「なら、今度は俺が訊かせてもらう」

半ば睨み付けるような視線が真っ直ぐにリオを射た。

「お前こそ、さっきのルーの話、ちゃんと聴いてなかったのか？」

「言っただろう。少しは俺達のこと信用して、頼ってみろよ。お前が両眼を失うほどの辛い思いをしてまで、光を失ってまで戻ってきたかった場所は、……俺達は、そんなつまらない過去に振り回されて、お前を見捨てるほど、頼りにならない奴等なのか？」

「でも、僕は……」

「過去を嘆いたって、意味なんかない。なら、そんなものに縛られて身動きが取れなくなってしまうなんて、バカらしいことだ。違うか、リオ」

漆黒の視線が不意に弛んだ。

そうだ。リオはリオだ。

奴等が何を言っただって、耳を貸す必要なんかない。

奴等は卑怯な方法で彼を連れ去ったんだ。

こうして還してくれたのだって、何か魂胆があつてのことかもしれない。

だから、今、リオを手放してはいけない。

何があるうと、三人で力を合わせて乗り越えていくと約束したんじゃないか。

ルーは今、その思いを新たにしていた。

つまらないことを考えていた己が、酷く矮小な存在に思えてしかたなかった。

アルフの、温かみを増した声音が続く。

「隠し事はしないって、確かに俺達は約束したさ。でも俺達が交わした約束って、それだけじゃなかっただろ？ 俺達、もう一つ約束しただろ？ どんな生い立ちがあろうとも、それを理由にはしないって。俺達には過去なんか関係ない。未来だけを見て進んでいこうって」

優しい、労わる瞳。いつものアルフだった。

「想い出せよ。ルーが望み、俺が望み、リオ、お前が望んだから、俺達は三人で暮らすことを決めた。三人で居ることが一番大事だって、ちゃんと約束しただろ？」

リオは、まるで見えているかのように、漆黒の視線を暫し真っ直ぐに受け止めていたが、その瞼が不意に震えた。

「だって、……怖かったんだ」

震える声を絞り出しながら、リオは膝の上に両肘を着き、掌の中に顔を埋めた。

虚勢で塗り固めた鎧がガラガラと崩れ落ちる音を、ルーは確かに聞いた気がした。

「こんな僕が、本当に君達に受け入れてもらえるのかどうか、不安で不安で、……怖かったんだ」

「バカ野郎。少しは俺達を信用しろよ」

アルフは踵を返し、リオの傍らに跪くと、涙で濡れた両手をそっと握りしめた。

「なあ、リオ。これだけは忘れるなよ。お前が俺達を想ってくれてるのと同じくらいには、俺達だって、お前のことを大切に思ってるつもりなんだ」

開かない瞼から、涙が花卉のように零れ落ちていく。

「許してくれるの？ 僕がここに居ることを、……君達の傍に居ることを、許してくれるの？ 僕は君達の傍で、君達と一緒に、生きていても、いいの？」

アルフが静かに微笑んだ。

「当たり前じゃないか。俺達は友達で、その上、大切な家族だろ？」
ルーはその隣りに跪き、アルフを真似てリオの両手に自分の手を添えた。

「おかえり、リオ。ずっと待ってたよ」

身を乗り出し、腕を伸ばしてそっと抱き締める。

と、リオはルーの腕の中に素直に倒れ込んだ。

床に座り込み、子供のように泣きじゃくる。

ずっと張り詰め続けてきた神経が弛んだのだろう、抑えても漏れてしまう嗚咽。

それが、この数ヶ月の間、たった独りきりで堪え続け、言葉にすらできなかった彼の心の叫び、苦悩の現れのように、ルーは、すっかり痩せてしまった背中を擦りながら、抱き締める腕に力を込めた。その肩をアルフが静かに抱き寄せて、三人で一つの体温を確かめ合う。

おかえり、リオ。おかえり。耳許にそっと囁く。

温かな春の陽射しが再び窓辺から差し込んできたように、ルーには思えた。

二人の腕の中で、リオは何度も何度も頷いた。

確かめるように、時には小さく、時には大きく。

そして、零れる嗚咽の中で、そっと呟いた。

「……ただいま」

たったそれだけの言葉。

けれどそれは、今までで一番長い、離ればなれだった時の終わりを告げる大切な言葉だった。

窓辺の光だけではなく、流れる風にも温もりを感じられる。

春はもう、すぐそこまで迫っていた。

その日、一番最初に目覚めたのはルーだった。

慌てて周囲を見回し、アルフとリオが寄り添うように眠っていることを確認して、ホッと安堵の溜息を漏らす。

リオが戻ってきたのは昨日の昼間。

夢は次の朝には醒めてしまうものだから、これが夢などではない、現実なのだと確認したい思ひは、三人とも同じだったらしい。

特に何を話すわけでもないけれど、昨夜は三人とも、計ったように暖炉の前に毛布を持ち込み、一晩中、ただ三人がそこにいることだけを確かめ合いながら眠りに就いた。

きっとルーには計り知れない旅をしてきたのだろうアルフとリオ。それでなくても疲れ切っている二人を起こさぬよう、そっとその場から抜け出し、朝食の準備をすべく水汲みのために外へ出る。

小川の縁に跪き、桶で水を汲んでいた、丁度その時、誰かに呼ばれたような気がして、ルーは空に視線を巡らせた。

と、筒状に巻かれた木の葉が二枚、頭上でヒラヒラと舞い踊っていることに気付く。

手を伸ばすと、それはまるで吸い寄せられるように落ちてきた。

封印には養成学校の公印。確認するまでもなく、魔法遣い養成学校からの連絡書だ。

宛先となっている本人以外は開封できないのは無論のこと、内容を読めないよう封印の施された公文書である。

嫌な予感がした。

訝しみつつも、急く気持ちに反して、寝不足の手は上手く動かない。

苛々しながら封を切り、その内容を一読した途端、顔色がサツと青ざめた。牀中の血が一気に足許に落ちていくのを、ルーはハッキリと感じた。

「アル！ リオ！」

突き破るようにドアを押し開ける。

二人は揃って、まだ寝ぼけ眼で床の上に居たが、彼等の様子を気に留める余裕すらなく、ルーは叫んだ。

「先生が、……校長先生が……！」

それは全生徒への一斉登校指示の連絡であり、校長先生の死の知らせだった。

慌ただしく登校準備をしながら、ルーはそつとアルフの様子を窺い、シャツの中に隠していたもう一通の手紙をクシヤリと握り潰した。

そこに綴られていた内容を、ルーはアルフに告げられなかった。すぐに彼の耳に入ることには疑いようがないが、それは『今』でなくともよいと思った。

やっと三人が揃った時間を途切れさせたくなかったからだ。

それは、小人族シエン村壊滅の報だった。

了

『翡翠の鳥は飛び方を知らなくて』 作…ほしの桜子

第10章 生きられる場所 No. 3 (後書き)

「翡翠の鳥は飛び方を知らなくて」は、これで終了です。最後までお付き合い頂きまして、本当に有り難うございました。

感想など戴けますと続編執筆の糧になります。宜しくお願い致します。

では。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1621b/>

LURIA第2部 ～翡翠の鳥は飛び方を知らなくて～

2010年10月8日15時07分発行